

茨城女子短期大学紀要

第40集（2013年）

＜目 次＞

1. 詩人・北島春柳論序説
..... 小野 孝尚 1
2. 三島由紀夫「山羊の首」雑感
..... 小林 和子 9
3. 独歩文学の〈笑い〉—「泣くことを免れんが為め」
..... 鷺崎 秀一 17
4. 「ONE PIECE」に描かれるレジリエンス
..... 安藤みゆき (1)
5. 「保育表現技術（身体Ⅰ・Ⅱ）」における身体活動の
取り組みに関する継続的研究
— 学生による自由記述文のテキストマイニング分析をもとに —
..... 国府田はるか (15)
6. 「こども音楽療育実習」の授業展開～初年度の取り組み～
..... 神永 直美・馬立 明美 (41)
7. 図書館システム：Enju 導入の覚え書き
..... 内桶 真二 (49)
8. 司書課程におけるアクティブ・ラーニング導入の試みに関する一考察
..... 中山 愛理 (55)
9. 「保育実践演習」「キャリア形成ゼミⅠ」の授業に宿泊研修を組み込む試み
～東日本大震災被災地（石巻）訪問（ボランティア）を実施して～
..... 塙 雅文・保育 科 (63)

茨城女子短期大学

40	茨女短大紀	No.40 P1～100	茨 城 2013
----	-------	--------------	----------

詩人・北島春柳論序説

小野 孝 尚

はじめに

筆者は、先に「詩人・下條綾子研究」を『茨城女子短期大学紀要』第三十六号（平成二十一年三月三十一日発行）に掲載した。その際機会があれば北島春柳についても調査結果を報告したい旨記録したが、その後の調査研究は進んでおらず、特に境町の生家に於いては、資料にも乏しくその生涯を探るには極めて困難な状況にある。本稿に於いては、現在までに判明した言わば北島春柳論の序説とするものであり、本稿が今後の北島春柳研究の基礎的な方向付けの資料となり参考にとみなれば幸いである。

茨城県に所縁のある詩人で梶浦正之の主宰する詩誌『桂冠詩人』（昭和二年四月発刊）に参加し、桂冠詩人叢書から詩集を出版した詩人には、村長詩人と謳われた境町の北島春柳と筑波野の女性詩人として活躍した筑西市の下條綾子の二人がいる。

北島春柳は明治十五年の生まれなので、平成二十四年は、生誕百三十三周年目となり、昭和三十一年に亡くなっているので、没後五十六周年目になる。しかし現在では、北島春柳の名前さえも埋もれてしまい、その

詩集は勿論のこと遺族には写真一枚が伝わるのみで、その遺稿等の所在すら定かではない。

I

「詩人・下條綾子研究」『茨城女子短期大学紀要』第三十六号（平成二十一年三月三十一日発行）に於いても述べたが、茨城県には詩人が多い。特に近代詩人は、横瀬夜雨や野口雨情や山村暮鳥等の先達詩人の導きによる大きい。北島春柳や下條綾子は先達三詩人の横瀬夜雨の影響下にあった。二人とも茨城県の県西地区の出身であり、北島春柳の生地である境町は鬼怒川の河岸の町として発展し、文化の流入が盛んであった。下條綾子の生家は、筑波野の広大な中であって、小貝川にも近く、裏筑波といった名峰の景観地に生まれ育ち、紫峰筑波は何よりも身近な存在であった。

昭和三年五月二十七日（日曜日）午後一時から水戸市にある茨城県公会堂に於いて出版の披露会が開催された。その挨拶文には「私共は皆様に不断なき御鞭撻と御指導によりまして日本詩人会から桂冠詩人叢書と

して北島は『春を呼ぶ』下條は『筑波野の春』を出版しました。幸ひにも大方の御高評を受けましたこと私共の望外の歎びでありました。いつか御礼の意味でゆっくりお目にかかる機会を得たいと常に思つてゐましたが幸ひにも左記の日取りで披露会といふと大袈裟ですがとにかくにもゆっくり膝を交へて御高説を拝聴したいと思ひます。さういふ意味で角張った会でなく氣持の好い少数の人をお招きした次第でございます。御多忙でせうが丁度日曜日になってゐますし、私共の為に貴重な時間をさいて御出席下さいますやう御願ひ致します。御出席の御都合は、猿島郡長田村北島宛に御返事を頂戴したいと思ひます。五月十五日 長田村

北島春柳 真壁郡古里村 下條綾子」とある。

その様子について、掲載紙及び月日不明の記事に「下條、北島両氏詩集出版記念会 近頃珍しき詩人の集り 一昨日県公会堂に開く」と見出しが書かれ本文には「今春詩集『筑波野の春』を出版した下條綾子女史及び昨秋自選詩集を出した北島春柳両氏の出版記念会は二十七日午後一時より水戸市県公会堂に開催された。この日東京からは井上康文、梶原正之、両氏が来会し県下文壇からは富岡如夢、中野茶山人、大野慎、木村直祐、小松原暁子、友常幸一、杉田省吾、斎藤幸次、蛸原濱壽、津川公治諸氏及び下條綾子、北島春柳両著者で一同は記念撮影の後デザートに入り最初に下條女史の挨拶があり、宴半ばにして梶浦氏の祝辞があり、続いて井上康文氏は「茨城県は山村暮鳥を詩壇に送り同氏の詩は今も尚ほ我々詩人が愛唱する不滅の作品である。両詩人も将来詩壇向かつて大いに活躍勵進するなら暮鳥さんの後継者となるのが出来ぬ訳はない」といふ意味激勵の言葉と感想談を述べ一同全く打くつろいだ歓談を

交換し最後に北島氏の挨拶があつて午後五時閉会した。更に一同は午後六時より大工町柳屋に晚餐会を開き小松原暁子女史の三味や大工町ガールの最高芸術を鑑賞し梶浦氏の磯節即詠披露、井上氏の「おけさ節」その他各自の芸術を發揮し午後十時散会したが最近珍しい会合であつた。」とある。

II

春柳・北島伝兵衛は明治六年五月二十四日、父北島覚蔵・母べんの長男として長田村（ながたむら）（境町）大字下砂井（しもいさごい）三四六番地に生まれた。

北島家は、江戸時代には下砂井村の組頭を務める地主であつた。祖父の伝蔵は明治時代の初めに下砂井村の用掛となつており、父の覚蔵も下砂井村の総代で村会議員を務めている。春柳・北島伝兵衛について『影印猿島郷土大観』（昭和四十七年六月 崑書房）によると「長田村の人、趣味高尚にして品性高く一般の俗吏と自から其の選を異にする。蓋し風流村長也。氏や固と是れ真率着実の人、村長として頗る治績を挙ぐるの一面に於いて、詩的天才有り、村長としてよりもむしろ詩人として命名あり、青年時代より新を能くし事触れ物に応じ才藻油然として涌くものあり、詩集『明暗の花』は広く青年間に愛読されたるものにして農村の一異彩たり」とある。町史研究『下総さかい』第二号（平成八年七月）の椎名仁の「北島春柳と詩集『明暗の花』」によると「伝兵衛もまた早くから長田の村役場書記をつとめるかたわら、詩作に精進する文学青年

であった。明治四十三年にはじまった「長田村是」策定事業には、長田村長岩崎民三郎をたすけて、長田村尋常小学校長石山陽平とともに村是編集の任にあたり、大正三年村是の刊行にこぎつけている。（中略）大正十四年三月、岩崎民三郎のあとを継いで長田村長に就任、村政の改善が順調に軌道に乗るのを見届けて、昭和五年十月退任。以後は悠々自適、晴耕雨読の日々を送り」とある。

北島春柳は、村役場の書記時代から俳句を始めていた。『石楠』『枯野』『ゆく春』で活躍した。「卯の花に野道の曲がり知る夜かな」は代表作。詩作を始めたきっかけは、川路柳虹の作品を読んで、門下となり『炬火』『現代詩歌』に作品を発表した。

大正十三年六月十五日、銀線社出版から処女詩集『明暗の花』を出版。序文は川路柳虹と佐藤惣之助の二人が書いている。交錯篇では「この舞台のまわらぬうちに、情熱、憤怒のスタート、詩人のつとめ、わが魂はあせつている、交響楽、総勘定、私は走馬灯につづいてめぐる、心臓、種を蒔かう、歓喜と苦悩、人間、無題詩「三篇」、春の日の戯れ、青春の幕、田舎の残暑、貧血児、人妻、東京駅、永遠、俺は生きている、星と握手したい、鏡を立てて御覧、冬の旅、つめたい肉体、煉獄、東京の娘子よ、寂しい心を抱いて、愛の栄光、正宗の空びん、元氣よく笑ひませう、桃林の風景、愛のなかに夢をみよう、生の絲、正月、最善の詩、煙りの誘惑、葦野の幻想、幸の海、冬の旅、郵便配達、人生の焚火、ひとりもの、小女、罪の子」が掲載され、続いて純情篇では「小曲、春浅し、渡船場、茶摘唄をきく、菫、蕁菜採り、隔離病舎、秋の日、夢、詩の国へ、時、追憶、我は迷ひ行くか、みみづくはなく、嘘か真実か、御みくじ、生と死」が

ある。跋は著者春柳が書いている。

冬の旅

薄靄か、つた筑波の紫峰を
窓にみつゝいま私は
汽車のなかにある
條々と萌黄の麦の畑
いづかに浴びる冬日射し

光るよ耕人の肥柄杓
山また林 田と畑と
自然は冬の支度した
鵜はくゝと低ふ飛び
黒きマントの大鴉
檜の大樹に思案顔
窓に残して 汽車は行く
鉄かむ汽車のひびき
私にも冬はやつて来た
小女の身をば轢くと云う。

渡船場

春浅し

春雨に誘われて早くも
咲いた 菫、蒲公英
踏むともなく踏み乍ら
胸に思を宿らせて行く
小川のほとり
パラ／＼と我が傘を
たゝくやさしい春雨の掌
あゝこの優しい掌にたたかれて
万象みな甦る
夏なれば めぐまれるものを
春まだ浅くめぐまれず
古るびた腕をさしのべて
一人立つ 榎か
しと／＼とふる
春雨の中
おゝと飛び行くからす
お前になにを話したか。

夕日は彼方地平線にうすづきて
うす紫の靄にとざされし
黄昏どき

流れの音もなきかの渡船場

ピーとなりしは小蒸気（ランチ）の笛か
ランチはかげも見えない たゞ

なよ風を孕みし白帆の二つ三つ

揺らぐか 行くかそもまたとゞまるか
水の面に……

向ふの岸辺には 赤い灯りがみえる

うすぐらい森の下なるあの灯は

それは可愛い少女の家ではなかったか
ちつよぼり赤い一つの灯

もやを透し ひかり映ゆ。

秋の日

うらゝかな秋の日に
白菜とさつまいもとを洗ふ
裏の井戸端で

素顔を半ば包んだ白手拭の姿もいとしい娘子二人
声ひそくと話し合ふ

ときたま 笑声の聞えるは

楽しい男の話でもあるのか

側の栗の木には

小鳥も 黙つてきいている。

北島春柳の何れの作品にも日常性に溢れた作品が多いことが特徴となっており、このことは作者自身も既に述べていることではある。本書は、過去五年間（大正八年から大正十二年）の収穫であり、一つの庭園に咲く花として全体を捉えている。「純情編」には初期の作品が掲載され、「春浅し」等が挙げられる。「交錯編」は大正十三年春までの作品が掲載されている。

大正十四年には、古河の塚田安郎や落合白桃を中心として文芸誌『河ぞひ』が刊行された。

『古河之文学』（平成十三年三月）の落合和吉の「古河における文化活動の回想―大正末期から昭和初期まで―」によると（古河市史研究四から転載）の『河ぞひ』に北島は、客員として横瀬夜雨や野口雨情等と共に名前を連ね、昭和二年の一月号には「こぼれ松葉」を掲載している。

北島春柳は、昭和二年の二月一日には『魂は緑野に遊ぶ』を編集出版している。筆者所蔵の詩集では、書題名には誤植があり、原本の表紙と中扉には「緑野」であるべきものが「緑夜」となっている。梶浦正之の

序文の中に「今諸君が詩歌集『魂は緑野に遊ぶ』を出版される」とあることによっても誤植であることは明らかである。その目次内容から見ると、序は梶浦正之と北島春柳の二人が書いている。本集に収録されている作品については、北島春柳が「欲望、胡枝子、あなたの住む国、花落ちて草枯れて、Zeekeie、晩秋の海辺、栗、意志、田舎の朝、可憐な蝶、秋、暮、Soul of Journey、友は愛人愛人はつまりは私のともである、即興詩、葬式、浅草公園、虚偽の花、停留場、白と黒、溺死、両手に描く幻想、田園風景素描、光を拾ふ」の詩を書いている。次に木原忠之の詩が五編、内野健次六編が掲載されている。その次は下條綾子の作品が、「記録台、旅人よ、芍薬の花、地上の誓ひ、祈り、十月の空、摸索、心の堂宇、紳士よ、ローレライ外二篇（さまよい、酒甕）」次に大久保晴雄が九編、初見素春十三編、館野怒が二編、伊藤わが二編、山本秀雄が二編、古室一が四編で以上が詩編である。次に短歌編の歌集として下條綾子が総題名「をとめの心」で四十九首、飯村葉津乃が「野の家」四十首、古室一「はつなつ」七首、古矢富士子「子等によす」三首、「雑詠」が七首、館野久子「理想」が二十首、石井芳村、「初夏雑詠」六首が収録されている。発売は、茨城県猿島郡長田村 野蒜詩社とあり、著者欄には茨城県猿島郡長田村北島春柳とある。

田舎の朝

門畑の陸穂はあくなき夜露と

夢を結んで葉尖きが重い

蕭蒲の花は純白

青道心の如なゆふがほはそこゝに転がり

それをめぐる玉蜀黍のうぶ毛はうすら紅い

いま玉蜀黍は初心なる処女

そつとその胸を披けたのは誰？

無邪気なそして元気な子供達

こちら種子胡瓜の鼠色

ちりめん南瓜の仏頂面

式部を想はせる紫柑の茄子

恋に染まつて紅い顔のトマト

これら等すべてを領す

私の門畑

ここに私達の詩がある生命がある

都の友よ

来てこの風景を味つてみな

田舎の朝―私の門畑

この作品も又詩人の周辺を書いた作品ではあるが、田園風景の中での身の回りの様子が克明に描かれている。

三冊目の詩集は、昭和二年九月一日に発行された詩集『春を呼ぶ』で

あり、これに収録された作品は、「憧憬、町の夕景、虚偽の花、花は咲くのに私は悩む、海、絵はがき、電灯、春を呼ぶ、春は寝る、白粉を塗る女、人の性、初夏の朝、梅雨の空、田舎の朝、恋愛、早春の恋、停車場、石鹼玉、現実改造の設計技師」である。この詩集は桂冠詩人叢書第一編として日本詩人会から発行された。

春を呼ぶ

朝日は靄立ちこもる地平線から

なまめかしいすがたをあらはし

大地の草木に しづくと御光を恵む

白鳥は 羽光らして 空高く飛び

みどり濃き家々の社

青い麦畑点ずる桃の濡れすがた

自然は春の模様を描くを忘れない

私もここに春を呼ぶ

フレッシユな朝のオゾンはものみなを漂白する

日頃 汚濁に浸つた私の思慕までも

いたづらに独り桎梏を呪ふもの

日と日とつぐ乱行に泣くもの

一まづこの艶かしい

朝日の前に立つて春を呼べ

詩集の書題名となった作品である。作者の春を待つ心が鮮明に描かれている作品である。早朝の朝日をいっばいに浴びた大地と鳥たちの春を感じ取る様子が伺え「青い麦畑点する桃の濡れすがた」等から作者も又春が近いことを知り「春を呼ぶ」心が高まる。早朝の澄んだ空気の中に立ち、心身共に洗われ、朝日に向かって春を呼ぶ作者の存在がある。

全体に北島春柳の作品は身辺雑記的な詩材が多く、直情的な表現が多い。それらは北島春柳の人間性を表すものであり、風土的な特色と云えるものがある。自然豊かな田園風景に囲まれた毎日の生活の中から育まれた素朴で人間性溢れた作品が多い。又一面に於いては非常に情熱的な面も伺える。村政にも関わっており、その葛藤も多かったことである。

孫に当たられる北島衛氏によると皆に慕われ、厳しくもあつたが優しさが多かったとのことである。職務に於いては、接待等で持ち出しも多かったようである。昭和三十一年五月二十日午前十時三十分亡くなった。七十四歳。戒名は釈傳應信士。

三島由紀夫「山羊の首」雑感

小林 和子

一、

三島由紀夫の短編「山羊の首」は「別冊文藝春秋」の昭和二十三年十一月号の〈小説特輯号〉に発表された。昭和二十年代に書かれた三島の初期の短篇小説に対しては「仮面の告白」などの長編小説等に比して従来あまり注目されることが無く、「山羊の首」もほとんど論じられることさえ無い短篇の一つである。

しかし、三島が嫌悪した戦後の日常生活が復活した時代を背景に、大学卒業、就職活動や高等文官試験、大蔵省への入局というあわただしい生活の中で、三島は文学への夢を捨て切れず、川端康成の仲介による雑誌「人間」への寄稿を手掛かりに、初の長編小説「盗賊」(「文学会議」S22・12～23・10、他)を連載した。そして河出書房の坂本一亀氏からの初の書き下ろし小説の依頼と前後しての昭和二十三年九月末に大蔵省退職、そして坂本氏宛書簡にあるように、後に三島事件の日付けともなる十一月二十五日を起筆として、問題の小説「仮面の告白」(河出書房、S24・7)を書いていくことになる。

つまり、従来ほとんど無視されてきたこの短篇「山羊の首」は三島の本格的文壇デビューを果たした直前の時期に書かれた作品なのである。

そのような背景から、一見すると軽いタッチで書かれたとも見えるこの作品にここではちょっと注目してみたいと思う。

二、

全集にして十三頁足らずのこの短編の内容は次のようなものである。ダンスホールで舞踏教師をしている四十歳の女たらしの辰三はチャップリンとあだ名される仲間の一人から、客である三十格好のミステリアスな香村夫人の忘れものである黒いレエスの手袋を預かった。彼が田舎から出てきて書生をしていた二十歳の頃、憧れていた家の奥さんに彼女が似ていたため、彼は香村夫人に惹かれていた。彼は戦争末期、水兵として駆り出された横須賀近郊の、五月の明るい高草の中で、百姓娘を抱こうとした時に、血に汚れた山羊の首が彼らの傍らに見つめるように置かれているのを発見したことがあった。戦後ダンス教師になった後も、彼が女を抱こうとすると必ず山羊の首の亡霊が現れ興ざめしてしまふのだったが、香村夫人だけとは山羊の首が現れない気がしていた。手袋をきっかけに香村夫人を誘った彼はA市の湾を一望できるホテルの一室で、彼は山羊の首のことを彼女に打ち明けた。彼女は「あなたはこ

れから山羊の首なんか決してごらんにはなりません」と言い放ち、その言葉通り山羊の首の現れない朝を辰三は迎えたが、目覚めると彼女の姿は彼の財布と一緒に消えていた。彼女の寝ていたところには「白粉と香料に匂ひにまじつて、かすかな山羊の匂ひが漂つてゐた」と結ばれる。

自分の作品に饒舌な三島は、この短編に対して『三島由紀夫短篇全集2』の「あとがき」（講談社、S40）で次のように述べている。

考へてみれば、この集のほとんどは、いはゆる戦後派への抵抗として書かれたと云つてもよく、「宝石売買」や「頭文字」の貴族趣味もさうなら、「山羊の首」の、実存の象徴としての山羊の首の出現を、わざと風俗画的に軽くあしらつた手法もさうなら、「獅子」の狂的な自己肯定の主題もさうであつて、さういふ時代への抵抗の要素を取り去つてこれらの作品を読んでもれば、かなりわかりにくいところが出てくるにちがひない。

この頃の短篇は「時代への抵抗」として書かれたという事、そして「実存の象徴としての山羊の首」という作者の言葉について考えてみたい。

「山羊の首は清浄で威厳に満ち、深い眼の色で辰三と田舎娘との寝姿を見詰めて」いて、それは「そしるような眼差ではな」く、「審くような眼色に近いかもしれない」が、「審く者の眼差にしては、その目が湛へてゐる暗さは濃すぎるやうに思われた」と表現されている。この作品の中では続けて、この山羊の首は工廠に徴用されていた少年たちが兵舎で飼つていた山羊を盗み出して始末して食べてしまったあとだった

と解説される。しかし、辰三にとって「戦争がはつた」後、この山羊の首は彼の日常生活そのものである女との交渉を妨げる亡霊となつて彼に取り付いていくのである。戦後の辰三が、もとの女誑しの辰三であるうとすると現れる、戦争中に見た山羊の首に、寓意的な意味合いが託されていることは明らかである。

山羊はスケープゴートの言葉でもわかるように旧約聖書において生贄、贖罪、身代わりの意味を課されている。また一方、ギリシャ神話では享樂の神としての牧神・パンを連想させる。明治末に高村光太郎などがメンバーだった耽美的、浪漫主義の文芸グループが「パンの会」という名称だったのは後者の意味からである。三島はこの二つの意味を十分意識したうえで山羊を象徴的につかつているのであろう。

山羊の首自体を見事に否定しさる香村夫人の予言通り、彼がその亡霊から解放された時、彼は皮肉にも山羊の幽かな匂いの中、あこがれの夫人が盗人だったという苦い現実の中に取り残される。

ここに戦争という非日常の中で青春を過ごしてきた三島の、戦後という時代への呪詛を読むことは可能である。

この「山羊の首」に対して言及されたものは少ないのであるが、中村光夫は「解説」（『鍵のかかる部屋』新潮社、S29）で「コントとして氏の全作品を通じてもつとも完成したもの」と評価し、野島秀勝は「解説」（『ラディゲの死』新潮文庫、S55）で「大臣」とこの作品を「鋭敏な諧謔」と評した。前田貞昭は『三島由紀夫事典』（勉誠出版、H12）で中村や野島の「コント」「諧謔」という「女誑しが純な心を持ったがゆえに、見事に裏を搔かれた物語」という解釈に対して、「山羊の首の

意味の解明が必要」と述べている。

また、越次俱子が『三島由紀夫事典』（明治書院、S51）で「この手法は、後に『金閣寺』で用いられている」とさうと述べているのは、三島の代表作「金閣寺」（S31）の主人公・溝口が女性と関係を結ぼうとすると、それを邪魔するように金閣寺の幻覚が現れることを意味しているであろう。

「実存の象徴としての山羊の首」は八年後に美の象徴としての金閣となつて溝口を呪縛し、戦後も焼け残つてしまった金閣からの解放のため、彼は金閣を燃やし、不能からも解放されるのであった。

三島は「昭和二十一年から二・三年の間といふもの、私は最も死の近くにゐた」（「終末感からの出発―昭和二十年の自画像―」（「新潮」S30・8）と書き、「不幸は、終戦と共に、突然私を襲つてきた」（「私の遍歴時代」（「東京新聞」S38・1:100～5:13）と書いている。

一種の浪漫主義的陶酔の中で自らの実存と向き合う必要のなかつた非日常の戦争が終わり、戻つてきた日常的平和の中で否応なく向き合わざる得ない自らの現実との齟齬に三島は苦悩していた。そのような葛藤の中にいた三島がこの時期に書いた「風俗画的に軽くあしらつた」と作者自身に解説された小品「山羊の首」の象徴する物は、実は代表作「金閣寺」にも発展し、それと同時に、この作品のすぐ後に書かれた「仮面の告白」のホモセクシャルの問題にもかかわつてくるのであろう。山羊の首からの呪詛を逆手に取ることを決意した結果生まれた作品が三島自身が「裏返し of 自殺」（「仮面の告白ノート」と呼んだ出世作「仮面の告白」）だったのである。

しかし、この時期に「実存」という言葉を三島があえて使つたのには、戦後の急激なサルトルブームも影を落としている可能性もあるかもしれないと思うのである。

三、

三島由紀夫の文学者としての活躍はサルトルの日本におけるブームとびつたりと重なる。しかし、三島におけるサルトルとの関係は従来言及されることが少なく（注1）、これは三島自身がサルトルに言及することが少なかったことに要因があると思われる。その少ない例として「小説家の休暇」（講談社、S30）の中で次のように述べている。

近代の主観主義は精神の相貌を茫洋としたものに変へてしまひ、誰もナルシスの水に映る影をはつきりとつかめず、はては心理の無限の沼底に埋もれてしまふやうになつた。そしてやうやく一九三〇年代になつて、サルトルがやつて来る。この実存主義者は、こんな混沌たる沼そのものを、彼の精神の相似物とみとめるやうな、無駄な努力を拒んだ。彼は主体と客体とのこんな相対的対立状態からは、何物も生れぬものと見極めをつけた。サルトルは「実存は本質に先立つ」と云ひ、「主体性から出発せねばならぬ」と云ふ。そして、「人間は他者との関連において自分を選ぶ」といふ教義を立てたのである。かふしてふたび小説における表現の道筋がひらけて来る。

このほか「裸体と衣装」（「新潮」S33・4～7）の中でサルトル

の「聖ジュネ」に軽く触れている程度である。男色家であったジャン・ジュネを論じたサルトルの「聖ジュネ」に三島が言及するのは当然であるが、その後の政治的な方向性の違いから、三島はあえてサルトルに言及することを避けた可能性もあると思われる。

しかし、サルトル受容のもっとも初期の時期のこの「山羊の首」には実はサルトルの影響を見出すことも可能なのではないかと思うのである。

「山羊の首」という作品は三島自身の戦争直後の一時期ダンスに熱中していた時期の経験が生かされたものである。昭和二十一年五月十一日から翌年の11月13日までの「会計日記」〔決定版三島由紀夫全集補巻〕を見ると昭和二十一年12月17日に「国枝夫人よりダンスはじめて習ふ」とあり、「シルクローズ」というダンスホールへ連日のように出かけるようになっていく。この時のことは「ダンス時代」〔婦人公論〕昭和24・8に詳しい。

私がダンスをはじめたのは終戦のあくる年のクリスマスで、数寄屋橋のシルクローズ・クラブで、国枝史郎未亡人に教わった。この先生は実になつかしいをばさんである。ソラー、二三、ソラー、オットツト、そこで右にシャッセ、さうさう、ソラー、二三、といふ風にワルツを教わった。銀座の名物チャップリン氏がよくふらりと戸口にあらはれて、給仕の小さい女の子をふりまわして踊つてゐた。この情景は「山羊の首」といふ小説のはじめの方に使った。

三島自身書いている通り、手袋を辰三に渡す冒頭にそのまま使われている。もしかすると辰三のモデルのような舞踏教師もいたのかもしれないがそれには三島は触れていない。それ以上に気になるのはこの文章の後半で三島自身が次のようなことを書いている点である。

昭和二十二年五月号の「世界文学」に、サルトルもダンスをすることが書いてある。サルトルは朝九時から夕方六時まで書いて書いて書きまくった末、六時から晚餐に移り、八時から「ル・バル・ネグル」（黒人ホール）といふカバレでの二次会へ、大勢の実存主義者たちと乗り込んで、やたらに腰をくねくねさせるルムバなど。タンゴなど、ワルツなどを踊るのださうである。サルトルのダンスはあまりみつともよいものではないといふ報告がついてゐる。

海の外では実存主義とダンスとがごく自然に適合するらしいが、日本でも適合してゐないことはない。しかし日本の実存主義文学は本質的にダンスよりも俳句や和歌や流行歌の感傷性に近いといふことは言へさうである。それに比べると、一見離れ離れに見えるサルトルの昼と夜の生活は、一本の糸でつながつてゐさうに思はれる。紹介だけを読んだの推測であるけれど、カミュの作品の世界なども、ジャズ音楽の破裂的な悲劇性が背後のリズムにあるのではないかと思はれる。

おりしもダンスに入れ込んでいた時期でもあり、作家としての出発期で、三島は原稿依頼があれば徹夜で書いていた時期だったのでこの記事

(注2) が印象に残ったのかもしれない。ダンスに興じる時代の寵児・サルトルに自らを重ねたとしてもおかしくない。

この「山羊の首」には、三島自身の「実存の象徴としての山羊の首」という言葉通り、サルトルの影がちらつくのである。主人公の辰三もサルトルと同じ四十歳である。

サルトルが日本に紹介された始まりは「中央公論」昭和十五年一月号に堀口大学の訳で「壁」が掲載された(注3) 事であるという。その後十六年十二月の「文化評論」創刊号にフランス文学徒であった白井浩司が自ら手に入れた原書「ラ・ノーゼ」を「嘔吐」として掲載したが、開戦という状況でフランス文学徒以外に知られることなく戦後となった。

サルトルが日本に一般的に紹介されたのは戦後直後に発行された雑誌「世界文学」においてであった。

「世界文学」は昭和二十一年一月から二十五年三月まで通算38巻、京都下京区の世界文学社から刊行された雑誌で、編集発行人は柴野方彦、中心になっていたのはサルトルの紹介者でもあるフランス文学者の伊吹武彦であった。まず「世界文学」の昭和二十一年九月号に伊吹五郎の「実存主義はヒューマニズムなり・サルトル」サルトルの新作「自由への道」が書かれ、翌十月号に〈サルトル特集〉が生まれ、サルトルを写真入りで紹介し、サルトルの「水いらず」と「小説論」を一挙掲載した。

そして続けて、世界文学叢書として昭和二十二年十二月に世界文学社から『水いらず・壁／ジャン・ポール・サルトル(伊吹武彦・吉村道夫訳)』が刊行された。

織田作之助は時を同じくして一流誌である「改造」(S22・10)の「二

流文学論」でサルトルに触れ、翌月十一月十八日付の「読売新聞」の坂口安吾の「肉体自身が思考する」が実存主義のサルトルを印象付けた。織田作之助や坂口安吾がサルトルに言及したのは、この京都を拠点とした雑誌に織田作之助も坂口安吾も寄稿していた関係から、伊吹などを通してサルトルの作品に触れたからと思われる。

また、三島が「ダンス時代」の文章の中で触れた五月号の前月の昭和二十二年の四月号においても、伊吹武彦が「サルトルの世界観」という文章を掲げ、この中で実存主義をわかりやすく言えば「俺は俺だ」ということである、とサルトルについてを詳しく、啓蒙的に紹介している。

この「世界文学」という雑誌、および世界文学社が、実存主義のサルトルを日本に本格的に紹介したのである。

三島がサルトルの「水いらず」を「山羊の首」執筆以前に読んでいたかどうかは確認できないが、三島も「ドルジェル伯爵の舞踏会」を一年後の「世界文学」の昭和二十三年五月号に書いている。「一九二〇年初頭のドルジェル家の舞踏会に招かれて客になつた」と始まり、三島が少年時代よりあこがれの対象であったラディゲに会う、という小説仕立ての評論である。「会計日記」にも「世界文学」の購入記録もあり、三島が「山羊の首」執筆以前にサルトルの「水いらず」を読んでいた可能性もあると思われる。

サルトルの「水いらず」は、不能の夫アンリーを持ったリユリユという妻のおしゃべりが語られる作品で、新しい男と関係するリユリユは結局不能の夫のもとへ戻っていく。その中で同性愛なども描かれ、その性の扱い方がセンセーションを呼んだサルトル初期の代表作である。

サルトルの専門家である白井浩司は『三島由紀夫事典』（明治書院）のサルトルの項目でサルトル自身の解説に紙面を割き、昭和四十四年五月十三日の東大全共闘との討論集会で「私の大嫌いなサルトル」という、三島の発言を紹介し、「サルトルの文学作品を共感を持って読んだとは考え難い」と断言した。そして新しい勉強出版の『三島由紀夫事典』ではサルトルの項目自体が無くなっている。

サルトルの影響はサルトルの専門家であった白石によって否定されたことによって、また後半生の政治的方向性が逆であったため、三島由紀夫とサルトルを正面から比較しようとすることすら無くなってきた。まっていたが、三島の「仮面の告白」とサルトル「一指導師の幼年時代」との関連なども視野に入れて行くべきであろう。

四、

先に紹介した「小説家の休暇」で三島がいう「近代の主観主義」と言っているのは、具体的には三島が戦争中の十代に耽溺していたレーモン・ラディゲなどの文学を指してゐいると思われる。「ナルシスの水に映る影はつきりとつかめず、はては心理の沼底に埋もれてしまふやうになった」のは、実は戦後ラディゲの向こうをはって「盗賊」を書いた三島自身なのであろう。「盗賊」の不評（注4）はその三島に追い打ちをかけた。本格的に職業作家として出発しようと決意をしていた三島にとって、「混沌たる沼そのものを、彼の精神の相似物とみとめるやうな無駄な努力を拒んだ」サルトルの登場は新しい方向性を三島に与えた可能性がある。

三島はだからこそ、サルトルを日本に紹介した「世界文学」にラディゲとの決別を宣言した「ドルジェル伯爵の舞踏会」を書いたのであろう。その中で三島は苦悩するラディゲに「僕の一番奥底にあった人間的な確信が崩れてしまった」（傍点三島）と語らせている。そして三島はこの不思議な作品を次のように終わらせている。

「ラディゲは鏡の中へ入ってしまったのだ」と僕は痛みをこらへて独り言した。しかし、僕はその中へはいれなかった。（傍点三島）

ラディゲに別れを告げた三島が新しい方法論を模索していた時に「実存は本質に先立つ」と高らかに宣言して颯爽と戦後社会に登場したサルトルに新たな表現の可能性を見出そうとしたとしてもおかしくない。不能の夫との性生活や同性愛をあっけらかんと描くサルトルの代表作「水いらず」が「山羊の首」という作品のヒントになった可能性はあるように思われるのである。

「山羊の首」は中村光夫などの高い評価とは裏腹に今まではほとんど注目されてこなかった作品であるが、三島由紀夫が「仮面の告白」を執筆する動機でもある戦後という時代への抵抗と、三島自身の失恋や性の悩みなどが入り混じった作品であり、三島とサルトルとの関係も想像させ、もう一度きちんと見直すべき作品であると思う。

(注1) 清真人『三島由紀夫におけるニーチェーサルトル実存主義

精神分析を視点として』(思潮社、2010年)はサルトルの専門家である著者が三島の作品をサルトルの分析方法を使ってニーチェとの関係を論じたもので、三島におけるサルトルの影響を直接見出そうとしたものではない。

(注2) 昭和二十二年五月に出版された通算十号の「世界文学」の「あと・らんだむ」という頁に「実存主義者の日常」として、三島が紹介しているような事が書かれている。

(注3) 石井素子「J・P・サルトルの受容についての一考察」(『京都大学大学院教育学研究科紀要』52、2006・3)や室鈴香「安吾とサルトル」(『國文學論叢』52、2007・2)など

(注4) 同時代評で中村光夫が「こんなものはマイナス百二十点だ」と述べた話しは有名である。

独歩文学の〈笑い〉―「泣くことを免れんが為め」

鷲崎 秀一

一、

国木田独歩と〈笑い〉の取り合わせは、少々意外に思われるかもしれない。近代文学史に名を刻んでいる「武蔵野」(『国民之友』明治31・1(2)や「竹の木戸」(『中央公論』明治41・1)などの作品に、読者を微笑ませるような、あるいは大笑させるような表現や描写は溢れていない。だが、代表作の一つである「牛肉と馬鈴薯」(『小天地』明治34・11)には、深遠な思想性の一方で、随所に〈笑い〉が散りばめられている。実際、独歩の作品に〈笑い〉、なかでもユーモアが見られるという指摘は明治期からしばしばあった。しかも、それは特筆すべきものと捉えられた向きもあり、例えば『新古文林』(明治38・9)に「独歩集を読む」を寄せた萩声子という記者は、次のように述べている。

わが国の小説がユーモアの分子を書いてゐるのは著しい事実である。喜劇は或は死んだかもしれない。而しユーモアは必ず生存させる価値があるのである。(略)わが国の小説家が高尚なユーモアの運用を解してゐる者を挙げたら、蘆花、独歩そして二葉亭四迷の三氏を推すべきであらう。

ほかでは片上天弦が「国木田独歩論」(『早稲田文学』明治43・1)において、「飄逸な淡いユーモアの気分」を「独歩の人物並びに作物」に看取している。

なぜ、ことさらユーモアが着目され、評価されたのか。これは先の引用中にもあるとおり、当時の〈笑い〉を描いた文学に著しい停滞感があつたためであろう。例えば、夏目漱石は「滑稽文学として世にあるもの、多くは大抵陳腐でなければ卑しい駄洒落か、嘲笑の気の充ちたもの許り」^①と述べている。だが、独歩は従前の滑稽文学とは異なる手法によつて〈笑い〉を描いていた。その背景に、ユーモアによる〈笑い〉や喜劇を文学界に移入しようとする動向があつたとすれば、独歩の一連の著作は文学的野心に満ちた挑戦という面もあつたわけだが、そもそも独歩のユーモアとは具体的にどのようなものであつたのか。

ユーモアについては、先行研究において各作品単位にて言及されることはあつたものの、作者である独歩自身がいかにそれを身に付けていたかはあまり調査されていない。近年では、明治期の〈笑い〉と英語笑話受容の観点から、浦和夫が独歩と関連の深い人物として、明治期を代表する英語教育者であるイーストレーキ、福沢諭吉、翻訳家の山縣五十

雄、馬場孤蝶、英語学者の勝俣詮吉郎などの名を挙げており参考となるが、その後の研究が待たれる状況である。また、個別の作品論では、他作品への目配りが十分とは言えず、独歩文学の〈笑い〉を総体的に浮かび上がらせることは難しかった。

本稿では、作者と作品の両方の観点から、総括的に独歩文学の〈笑い〉について考察していきたい。

二、

まず、同時代評にもあるとおり、独歩文学の〈笑い〉の特質であるユーモアについて触れておく必要がある。すでに拙稿⁽³⁾にて報告してあるの⁽³⁾で、ここでは概要を示すに留めるが、ユーモアとは、もとは「体液」を意味するラテン語の「フモール」に由来する語であり、ゆえにそれは、人間の普遍的な性質（性格）に依拠した〈笑い〉と考えられている。何気なく出た言葉や、無意識的な行動に起因するような〈笑い〉がその一例として挙げられる。

ただ、当時の文献を見ると、多様な〈笑い〉がユーモアと解釈されていたようである。例えば、森鷗外は、どこか悲哀を帯びている〈笑い〉を有情滑稽^{ユイモア}としている。この場合、道化のような態度も該当するので、必ずしもその〈笑い〉が無意識的とは限らない。同様に、無意識的とは対極にある、強い批評性を有する風刺や機知^{ツキチ}と思われるものでさえユーモアとされることがあった。舶来のユーモアは不明瞭なまま恣意的に用いられていたのが実情のようだが、ただ、少なくとも操りや語戯に留ま

る〈笑い〉はユーモアとみなされておらず、それは滑稽であった。文学においては、手法的に無理がなく、かつその裏に作者の人生観を想起させる〈笑い〉がユーモアとして位置付けられており、それゆえ、ユーモアの描かれた作品は、従来の滑稽文学ではない、近代にふさわしい〈笑い〉の文学として支持されたのであった。

では、かようなユーモアを駆使した独歩の、文学における〈笑い〉観はどのように形成されたのか。その点は検討不可避な課題であるが、その前に、独歩自身がユーモアについてどのように言及しているのか確認しておく。

じつは、独歩の著作において、ユーモアという語はほとんど見られない。わずかに確認できるのが、晩年の『病牀録』（明治41・7、新潮社）においてである。「ユーモアを除きて主観の厳肅なし」と題された短文は次のとおりである。

主観の厳肅と云ひ、冷静の態度と云ふ。然も、ユーモアを除きて主観の厳肅ありや、冷静の態度ありや。人生よりユーモアを除けば、此二者の存立は竟に得べからざるなり。

この短文を見ても、独歩の中で、ユーモアは密接に人生観と結び付く用語であったということが分かる。その人生観を反映させ、作家活動を行ってきたことは想像に難くないが、ただ、『病牀録』は晩年の随筆であり、実際に作品を執筆した時期に、それをどの程度意識していたかは定かでない。独歩は果たしていつからユーモアを知っていたのか。それを推し測る資料として、間接的なものではあるが、田山花袋の「KとT」（『文章世界』大正6・1）がある。「KとT」は、明治三〇年に行われた、

二人の日光での山ごもりの回想録で、そこには、当時二十六才の独歩が、ユーモアという語を用いたという記録が残されている。独歩は当地で身の回りの世話をしてくれた老婆を評して、「不思議な婆さんだ。(略)あれで、中々ユーモアに富んでゐたぜ、君」と述べたという。今少し追っていくと、その老婆は、「半分以上わからない」東北方言でありながら、寺に住む和尚を真似て喋るような人物で、独歩と彼女とのやり取りの中には「娘が来る、来るつて、婆さんが言ふから、何んな娘が来るかと思つてゐたら、四十先の婆さんぢやないか」ということもあったという。その老婆について、独歩は次のとおり総括している。

あの深く刻み込んだやうな皺が好い。それにこにこしてゐる。いかにも無邪気だ。あらゆる苦痛を知らない、といふよりも、あらゆる苦痛を経て来てあそこに行つたといふやうな気がする。

むろん、この「KとT」を全て鵜呑みにするわけにはいかないが、老婆の「無邪気さ」と、その裏に「苦痛を経て来てあそこに行つた」ことを看取している点は、独歩のユーモアを知る上で参考となろう。この日光滞在中に執筆したのが処女作「源叔父」(『文芸倶楽部』明治30・8)ゆえ、小説家として活動する以前からユーモアに関する知識を有していた可能性はある。そして、その蓋然性は彼の読書歴から見ても低くはない。カーライル、シェークスピア、チェーホフなどの作品からは、滑稽とは趣が違う、意味深いユーモアを学び得たはずである。そして、これらの作家以外に、先に浦和夫が挙げた英文学系の研究者たちからは大きな影響を受けたのであろう。

だが、独歩文学に描かれた〈笑い〉は、舶来のユーモア一色ではない。

その傾向がとくに表出しているものの一つに、独歩が刊行した月刊誌『上等ボンチ』(明治39・8(40・1)がある。いわゆるボンチ絵を中心に、一口噺、滑稽問答、川柳、狂歌、都都逸と、構成的にはほぼ当時の滑稽を売りにした雑誌と同様だが、一方で、毎回英和对訳の笑話も掲載されていた雑誌である。編集を担当した小杉未醒と吉江孤雁が「材料が余りに上品過ぎた」と述懐しているように、独歩の描く〈笑い〉が和洋混交で、かつ読者の馴染み深い滑稽に留まっていなかったことを窺わせるものなのである。

漱石にしても紅葉や露伴にしても、独歩と同世代の〈笑い〉を得意とした作家たちは皆、近世文芸が残存する文化的土壌にて生育してきた。それらは否応なく彼らの視界に入っていた。独歩とて例外ではなく、若き日の日記である『明治廿四年日記』を紐解けば、例えば「十九日(略)九段坂の藤本亭に円朝之落語を聞かんとて出掛けたり」との記録が残っている。かような寄席通いの痕跡は、明治二十六年の日々を残した『欺かざるの記』にも見られる。ただ独歩の場合、義太夫を目当てに通っていた節は見えるのだが、滑稽噺についてはその趣味を窺わせる記述がない。和の〈笑い〉に関して、その興味の深淺を測ることは極めて難しいのだが、いずれにせよ、少なからず内面化していたことは抑えておく必要があろう。

和と洋の〈笑い〉を摂取して、独歩は彼なりにユーモアを形象化していた。では、それは具体的にどのような描かれていたのか。まずは初期の作品から、その〈笑い〉の質が顕著なものを抽出してみたい。

「郊外」〔『太陽』明治33・10〕という小説は、『定本国木田独歩全集第二巻』（昭和39・7、学習研究社）の「解題」にて、瀬沼茂樹が「東京郊外の人生模様を淡彩画で描いたやうな作品である。作者の観照が自然なユーモアとなり、ペイソスとなつて流れてゐる好箇の短編である」とした作品である。三部構成という形を採っているが、作品を通じた主人公が不在という点に大きな特色がある。

各部につき、おもに一人の男に焦点が当てられ、その誰もが一癖ある人物である。まず第一部の「時田先生」は、「四角な顔の、太い眉の、大きい口の、骨格の逞ましい、背の低い、言ふまでも無く若い女などには余り好かれない方の男」であるが、「何処か言ふに言はれぬ優しい処が有る」とされ、さらに彼は、何事においても「無頓着」だという。周囲がいかに氣を揉むような状況にあつても彼だけは平然としている。かような態度が、作中ではしばしば淡い〈笑い〉となつてゐるが、この「無頓着」は冷淡とも雑駁とも違う。例えば「何だか知らない。何だつてよいじゃあないか。」と言つても、「幸ちゃんの身に成つて見ると堪らないサ。」とも発言しており、ときには意識的であることを匂わせてゐるのである。かく配慮に満ちた人格と、どこか微笑ましい風貌とが周囲に溶け込み、ユーモアを醸し出している。

時田が無口であつたのに対し、第二部で登場する「これも何処か変物らしい顔付」という画家の「江藤」は、喋り出したら止まらない。第一部の〈笑い〉が静かで淡いものであつたのに対し、こちらは分かりやす

い。ある日、彼は一念發起して、キャンバスに向かつていた。「近頃自分で自分を疑ひ初めて」、「果して己は一個の画家として成功するだらうかなんて頻りと自脈を取て居た」のだという。ところが、何故か背後から物音が聞こえてくる。この時の様子を彼は次のように語る。

若しこ、で己が後へ振向くなら最早今日かぎり画家は止めるのだぞ、よしか、其でよければ向け、若し此森に居るとか噂のある狂犬であつて己の後から突然頸筋へ喰ひつくなら着いても宜ではないか。其で死でも関はない、斯うなれば最早意地だ！ この意地が通されない位なら美術家たるは愚、何一ツ仕出来すものかと、今度は喧嘩腰になつて、人を後へ向かさうツて、誰が向か、ざまを見ろと今から思えば可笑いが真実にさう独語を言いながら画き続けた。落語家さながらの語りは、頻繁にその森に出没する「近所の老爺」の登場で、しつかりサゲて終わる。

笑い話としては至つて平凡であるが、話の内容ではなく、夢中になつて喋る姿が〈笑い〉だとすれば趣きも異なる。むしろそう捉えるべきと考えるのは、続く第三部でも、かような〈笑い〉を体现する人物が描かれてゐるためである。

連日のように、近所の踏切で鉄道往生があることを苦慮している「八百屋の主人」は酒好きで、その日もすでに「其眼はとろんこに為て、身体がふらくして居る」。彼は「飽まで太い事を云」う性格であるが、その実、小心で優しく、例えば家で飲んでゐる分には、威勢良く「死たい奴は此踏切で遠慮なしに行て呉れるがい、や、方々へ触れ廻はしてやらア」と言い放つが、そんな時でも「其代り便所の窓から念仏の一つも唱へてや

らア」と付け加えることを忘れない。それ故、外に人影らしき気配を感じたときは「何を言っても命あつての物種だ」と聞こえよがし大声を出している。しかもその人影は、じつは自分の娘と逢引きしていた男のものであるのだが、そんな疑念はまるでなく、人の好い主人なのである。

かように、作品の穏やかな〈笑い〉の中に居る三名であるが、梅雨前という季節を背景に見てきたとおり、各々軽視できない問題が明滅していることを見落とすことはできない。第一部における「時田先生」の「無頓着」が示すように、「郊外」の〈笑い〉の根底にあるものは、陰鬱な現実を明るく過ごそうという意識なのである。本作同様、全集の解題にて「ユーモアの筆致」を指摘されている小説「鹿狩」〔『家庭雑誌』明治31・8〕は「郊外」に先行する作品であるが、その中心人物で「一番声」が大きい、一番元気がある、一番面白さう」と評される「今井の叔父さん」もまた、鉄砲腹で実息を亡くした人物であった。

実生活においても、周囲に〈笑い〉を振り巻く人物への独歩の評価は高く、例えば西園寺公望がその一人である。独歩が初めて西園寺と面談するのは明治三十三年六月で、その翌年、独歩は一時西園寺邸に寄宿している。その人格に敬服していたことはよく知られているが、〈笑い〉観においても影響を受けていたように思われる。

独歩自らが編集し、「陶庵候に就て」という後書きも書いた『陶庵隨筆』（明治36・10、新声社）によれば、若き日にフランス留学を経験した西園寺は、対話術や議論において抜きん出ていたとされ、「多くの場合に趣味ある比喩を用ゐてしやれる。」という具合であった。彼の〈笑い〉を重視する態度について、かつて竹越三又は、次のとおり評したという

が、独歩は「此等の言に就て余は悉く同意」なのだという。

渠豈に冷然として無頓着なるものならんや、眼底涙あり、皮下血あり、慷慨し、憂慮し、怒憤す、唯だ智力を以て強て之を抑へ、冷静の工夫を試みんとするのみ、渠フキガロの所謂る、泣くことを免れんが為め、万物を笑ふと云ふは、渠に於て之を見る。

かような西園寺の態度に共感する独歩ゆえ、「郊外」の面々が描かれ、また恐らく「牛肉と馬鈴薯」や「号外」〔『新古文林』明治39・8〕のように、サロンを舞台とした、軽妙な会話に特色ある作品を描くことができたのであろう。

その後、「巡査」〔『小柴舟』、明治35・1〕という作品においても、「郊外」の三名を集約したかのような人物が描かれている。「巡査」は次のような書き出しから始められる。

自分は人相のことはよく知らぬが、円い顔の、口髭頬髭ともに真黒で、鼻も眼も大きな、見たところは柔和の相貌とは言へないがさて実際はなか／＼好人物なのが世間には随分ある、この巡査もその種類に属するらしい。

若し其人が沈黙であつたなら斯ういふのは余り受の可い人相ではない。処が能く語り能く笑ふ、笑ふ時はその眼元に一種の愛嬌がこぼれる、語る時は相手の迷惑もなにも無頓着で、のべつに行る。そこで思いもつかぬ比喩など用ゐて、それを得意で二度も三度も繰返す、如何だらう、斯ういふ人物は他の憎悪を受けるだらうか。

本作は、ある一人の巡査の非番の様子が写されたもので、立て続けに喋ったかと思いきや、突如居眠りし始めるような姿も〈笑い〉として描

かれています。先に挙げた「号外」の主人公「加卜男」もまた大声の話しきで、眠くなれば寝てしまう人物で、それゆえ「巡査」の「山田巡査」は独歩文学の典型的な〈笑い〉を演出する人物とも位置付けられる。彼には故郷に妻子があり、口では「一人のうが気楽」というが本音は違う。また巡査である以上、市民の平和を願うのは当然だが、事件がなければ活躍の場もない。立身出世なくして帰郷なしと決意している彼は、かようなジレンマを冗談や漢詩の中で、笑いながら悲哀混じりに語ってみせるのである。

なおこの「巡査」に関しては、「次ぎに今余の記憶に残つて明らかなるは、『巡査』だけである」と、漱石が敏感に反応しているのも興味深い。

『巡査』は、巡査の運命とか何とか云ふものを書いたのではない。或る一人の巡査を捉へて其巡査の動作行動を描き、巡査なる人は斯う云ふ人であつたと云ふ、其所が面白い。即ち低徊趣味なる意味に於て、『巡査』を面白く読んだのである。

独歩文学に「余裕がある人でなければ出来ない趣味」という低徊趣味を見出している点は、留学経験があり、ユーモアの心得ある漱石ならではの着眼点である。なお、「郊外」や「巡査」に描かれた〈笑い〉が、ユーモアとして評価されるのは明治四十年以降である。これは明治三十年代の独歩自身の不遇にも一因あるが、文学における〈笑い〉の問題として、いまだユーモアの評価軸が定まっていなかったことに起因している。こうした〈笑い〉を取り巻く時代の変化に対応しているのか、明治四十一年の『病牀録』には、先のユーモアへの言及以外にも、独歩の〈笑い〉観を窺わせる発言が多く残されている。「趣味の数々」（遺稿、銚子療養

中に書かれたか）という短文では「境遇、其物にのみ既に面白味はある也。平凡の人物も特殊の境遇に置て見れば、特殊の色彩を放つもの也。」とあり、また「余裕の半面あれ」という短文においては「要は真面目に動き、摯実に考ふる極めて厳正なる半面に対し、余裕の半面なからざるべからず。余裕なく、洒落気なき人は、其人遂に小人物たらむのみ。」と、図らずも、漱石の〈笑い〉観と通底していたことを窺わせている。

四、

「郊外」や「巡査」を読む限り、独歩が創作活動の初期から意識的にユーモアを文学化しようとしていた可能性は否定できない。その旗色を鮮明にするためには、概念的に対極にある〈滑稽〉を拒絶していることが望ましいはずだが、先に触れたとおり、すでに馴染んでいる〈笑い〉から真に距離を取ることが、当時の人々にとって容易なことではなかった。ことに独歩については、滑稽小説とも映る「園遊会」（『園遊会』明治35・10）という作品を残しており、その〈笑い〉観を複雑なものとしている。

「園遊会」についても、全集の「解題」には「『園遊会』は課題小説であり、戯作めかした皮肉とユウモアとをきかした作品である。独歩の作品では軽いものに属する。」とある。掲載紙の『園遊会』は、書肆金港堂が自社の園遊会の記念に作った冊子（非売品）で、かつ、所収作品の多くが園遊会を題材としてのことから、本作も課題小説であろうことが推測されている。

小説「園遊会」は、「真実に病弱い」とされる「自分」が、新聞記者の「戸塚」と二人で、園遊会に集う個性的な人物を見て回るといふ筋である。またその前後には妹との軽妙な「舌戦」が配置されており、この「舌戦」で、「自分」は頓才豊かな妹にやりこめられる。その徹底ぶりも、本作の〈笑い〉の一つに違いないが、むしろ園遊会めぐりに作品の〈笑い〉は集中している。当時の読者は作中の「自分」の眼差しを通じて、楽しみながらこの園遊会を見て回った。また、かように二人の男が冗談を飛ばし、ときに失態を演じつつ、様々な事物を見て回るといふ作品は、当時の読者にとって見慣れたものであったはずである。

仮名垣魯文『西洋道中膝栗毛』（明治3〜9、万笈閣）の存在は広く知られているが、同様に「東海道中膝栗毛」に範を取った滑稽小説は、江戸期から連綿と書き継がれていた。系統的には「園遊会」も、それらと同じ枠組みの作品に映ったのであろう。例えば「其代り鮎は食ふこと五十二」のような狂句、あるいは「僕は戸塚相模です。相模守大船です。何分よろしく」などの洒落は随所に見られ、かような会話が、膝栗毛らしき枠組みの中で展開されていたとなると、媒体の特質からしても、当世の文学作品とは映らなかつたはずである。実際、同時代評も「兎に角お景物的の作と云ておけば充分である。」と手厳しい。「園遊会」には、次のような場面もある。

突然山の下で先の豪傑連が何に激してか大声を上げて喚呼きだした。見下すと直ぐ下で、

『君は君の好む所の人物を崇拜しろ、僕は僕の好む処に従う。お互いの自由だ』と一人がいふ。

『宜しい、それなら何故ガルバルジーを攻撃する？ ガルバルジーを攻撃するのは僕を攻撃するやうなものだ失敬だ？』

『君はそんならガルバルジーか。』

『勿論僕はガルバルジーだ！』

と言ふや、山の上の自分等は思はず笑ひかけると禪僧大真面目で『今言つた人は今の今、ガルバルジーに為つて居るのです。決して笑ひごとじやありません。虎の神に合すれば虎となり、英雄の神に合すれば英雄となる。不思議はないのです。』

ここでは「豪傑連」となっているが、大男や馬、あるいは明治の中期なら政談演説会での若い壮士など、力あるものが暴れて掻き回す光景は、しばしば滑稽小説で用いられる型であり、こういった場面一つを取つても、「園遊会」を近代文学史上に位置づけることには抵抗がある。ただ、それでも随所に単なる滑稽小説とも言ひ難い面も見られ、例えば「先の豪傑連」の描かれ方にしても、一方的に悪ふざけに陥るようなことはなく、自然に主人公の「自分」は「思はず笑ひかける」。また、「真実に病弱い」彼が、病を押して園遊会に参加する姿には、積極的に社会に関わろうとする意欲、そして現実が醜悪なものであつたとしても受け入れ笑おうとする態度が看取される。言うなれば、滑稽小説の外観に、ユーモアが胚胎しているようにも映る「園遊会」は、独歩の〈笑い〉を知る上でも、時代の〈笑い〉の在り様を知る上でも、興味深い作品といえよう。

なお独歩はその晩年に、再び膝栗毛を想起させる作品を書いている。新聞『日本』に連載した「湯ヶ原ゆき」（明治40・7・17〜30）である。「湯ヶ原ゆき」は、独歩自身の転地療養の様子に材を取つた、一見、紀

行文とも映る作品であり、「自分」と義母の二人連れが、道中様々な人物や事物に遭遇し、行く先々で失敗を繰り返すという話である。品川から湯ヶ原までは、まさしく東海道の旅であり、徒歩ではないが、近代文明の象徴である汽車の旅であることから、当世版「東海道中膝栗毛」の体裁となっている。「湯ヶ原ゆき」の「自分」もまた病身で、つまりこの移動は肉体的にも気楽な旅とは言い難いものであるが、それを意識的に旅とみなし、明るく振舞うところにユーモアはある。ただ、「園遊会」のように畳み掛けるような〈笑い〉はない。連れの義母はその介助という役割のためか、会話はおろか、移動そのものに乗り気でない。作中には、話し好きで活発な「自分」と比較して、「何方が病人か分ない」状況が描かれているが、そこには可笑しいとも哀しいとも評しがたい〈笑い〉が見受けられる。

五、

最後に、晩年の作品から「泣き笑ひ」(『新古文林』明治40・3)という小説を取り上げ、総括的に独歩文学の〈笑い〉を捉えてみたい。

「泣き笑ひ」は、夕刻になってようやく帰宅した息子が、周囲の心配を他所に、釣った魚を誇ったり、揚げ足を取ったりするので、母親は泣き笑いしたという短い話である。焦れる母とは対照的に、呑気な父と女中、さらに無邪気な息子の姿が余りに平凡に映ってしまったためか、当時は「恐しく評判の悪るき作なり」とまで言われた作品であるが、文学における〈笑い〉の在り方を模索していた当時の感覚からすれば、その

ような観点から評価されてもよかったはずである。泣き笑いに着目し、それを主題化して前面に押し出した点は、後に微苦笑芸術を提唱する久米正雄に先行するものである。

しかも、この「泣き笑ひ」は、単純な母子の愛情話に留まるものではない。次は、息子の時之助が近所の池に落ちたのではないかと心配する母と、父との会話である。

『さうですとも。そんな事が無とも限りません。連伴が少年のことですから驚いて逃て来て知らん顔をして居るなんて、よく東京でもあるぢやありませんか。』

『そんな馬鹿々々しいことがあつて堪るものかね。第一お前は時等が釣魚に行く場所の模様を知らないから、そういふこと言ふのだ、今日、時が釣に往つた処は平地で池の堤といふものがない。だから落ちようがない。(略)』といはれて乙なことおつしやると言ひたそな身構をして東京の奥様

『堤があるか無いか、昨年来たばかりの私にはお国の事は存んじません、(略)』

この場面では、土地の事情に疎い「東京の奥様」の、杞憂に過ぎぬ心配が自然な〈笑い〉となつているが、一方で母である彼女が「昨年来たばかり」という点には、この夫婦、延いてはこの家族の微妙な関係が読み取れる。後の場面でも、帰宅した息子は『だつて母上の国じやアこれが五尾か十尾でも、日本帝国では四十九尾ですからね。』と述べており、何らかの影が意識された上で〈笑い〉が発信されていることが窺えるのである。呑気者という父も実は「休職判事」で、これまた呑気な「東京

から連れ帰った女中」は「孤児なるが故に可哀さう」だから一緒にいるという。「泣き笑ひ」における父や女中の呑気さ、母親のただならぬ焦り、また子供の無邪気な様子や洒落などの〈笑い〉には、一つ屋根の下に寄り合う家族を繋ごうとする重みが伴っている。

さらに、「泣き笑ひ」がこれまでの作品と異なるのは、〈笑い〉のまとまりが極めて良い点にある。例えば話の冒頭、焦燥し切っている母に対し、女中は「へえ。」と相槌ばかりを繰り返して要領を得ない場面があるが、結末部では息子が説教する母親に対し「ほう」という相槌を繰り返しており、首尾対応させている。対応表現については、息子が帰ってきた喜びを「悲変じて喜となる」と表した後は、口答えされた怒りを「喜変じて怒となる」とした場面もある。また、〈笑い〉の背景にある基本的な構図は都会対田舎であり、それが大団円で結ばれている点からしても、「泣き笑ひ」は、当時の文学作品には珍しい喜劇の体を成した作品であった。内容と構成の両面で、〈笑い〉が文学的に昇華された作品が「泣き笑ひ」であり、奇しくもそれは結核が進行していた独歩の最晩年の作品であった。

以上で見えてきたとおり、独歩文学の〈笑い〉は、年を経るごとに、また〈笑い〉自体を取巻く時代状況とともに成熟してきたが、その軸となるものは揺るがなかった。ときに鋭い機知もあるが、それもまた社会の中で不可欠な〈笑い〉の一つである。独歩文学の〈笑い〉は、常に人間社会に寄り添うものであり、それは若き日のキリスト教の信仰によって培われた面もあったのかもしれない。かように周囲に〈笑い〉をもたらしつつ、その時々をその場所で前向きに生きんとする人生、それを独歩

は文学作品として形象化していたのではなからうか。

【注】

- (1) 夏目漱石「滑稽文学」『滑稽文学』明治40・1)
- (2) 浦和夫「国木田独歩と笑い―「上等ボンチ」と「米国一口噺」(『笑いと創造 第六集』平成22・12、勉誠出版)
- (3) 拙稿「未だ見ぬ真の滑稽(ユーモア)―国木田独歩「郊外」(『稿本近代文学』平成14・12)
- (4) 小杉未醒・吉江孤雁「独歩社時代」(『趣味』明治41・8)
- (5) 夏目漱石「独歩氏の作に低徊趣味あり」(『新潮』明治41・7)
- (6) 夏目漱石「高浜虚子著『鶏頭』序」(明治41・1、春陽堂)
- (7) 同作品の詳細については、拙稿「近代滑稽小説の系譜―国木田独歩「園遊会」(『稿本近代文学』平成16・12)を参照されたい。
- (8) 白雲子「自然派と『濤声』」(『読売新聞』明治40・6・9)
- (9) 無署名「前月文芸史」(『新潮』明治40・4)

【付記】

本稿は、「日本の近代文学と笑い」を特集した『国文学解釈と観賞』(平成23年11月号、至文堂)に掲載予定のものであったが、残念ながら発売直前にして休刊となったため、未発表となっていたものである。

総論的な内容となっているのはその趣旨のためだが、今回、新たな資料も加えて大幅に書き改めた。

 論 文

「ONE PIECE」に描かれるレジリエンス

安藤みゆき

茨城女子短期大学

Key words ; レジリエンス, ONE PIECE, 逆境 (adversity), 重要な他者, 発達心理学

要旨 (要約) : サブカルチャー (大衆文化) は, その時代が求めているものを無意識にあぶりだす力を持つ。爆発的に流行しているアニメ「ONE PIECE」というテキストに拠り, 心理学, 精神医学等の臨床領域でとみに注目されるようになってきた「レジリエンス」(弾性, 回復力) の現代における意義を考察した。主人公ルフィが, ゴムゴムの実の特殊能力者として弾力性を強みに, 屈強かつ破壊的な敵を次々と倒し海賊王をめざすというストーリーは, 現代に必要な新しい「つよさ」はレジリエンスであることを象徴している。ルフィの「つよさ」は, 「重要な他者」とのかかわりの中で獲得した信頼感, 自尊感情, 肯定的未来志向と, 仲間との緊密な情緒的絆により支えられており, それらは, レジリエンスの根幹を支えているものである。

1 はじめに

レジリエンス (resilience) は, 一般には, 「弾力性」と表現されることが多い (Schaffer, 1998 : 無藤・佐藤訳, 2001)。「レジリエンス」, 「レジリアンス」, 「レジリアンス」などと表記されることもあるが, 本論では, CiNii (国立情報学研究所論文検索) 上で一番使用頻度の高い「レジリエンス」という表記を用いる。レジリエンス研究の嚆矢とされているウエルナーとスミス (Werner, E. E. and Smith, R. S.) の「*Vulnerable but Invincible: A Longitudinal Study of Resilient Children* (弱きものされど打ち負かされない: 弾力性のある (回復力をもった) 子どもたちの研究)」(1982) や, 「*Overcoming the Odds. High Risk Children from Birth to Adulthood* (逆境を克服する—ハイリスクな子どもたちの誕生から成人まで)」(1992) という著書の題名に象徴されているように, レジリエンス研究のルーツは恵まれない逆境に生きる子どもたちの発達に関するものであった。ウエルナーらは, 1955 年よりハワイのカウワイ島で, 周産期の合併症, 貧困, ネグレクト, 親の精神病といった困難を抱えた 698 名の子どもたちの, 生まれてから成人になるまでの追跡調査を行い, 劣悪な養育環境であったにもかかわらず, 健全な大人に成長することができた 3 分の 1 の子どもたちについて, どのような要因が彼らの成長を助けたのかを分析した。その後, 困難で脅威的な状況を乗り越えていくために機能する心理的な弾力性やその促進要因の分析などが, レジリエンス研究として注目をあびるようになった。現在, 日本においては, 心理学, 精神医学だけでなく, 防災, 社会システムにおよぶ領域でも「レジリエンス」が論じられるようになっている。

筆者がウエルナーらの「*Resilient Children* (弾力性のある子ども)」(シャファール, 2001) という言葉に出会ったのは, 今から 12 年前, 大学院に通いながら児童養護施設に付設された児童家庭支援センターに勤めていた時である。筆者は, そこで困難な生育歴にもかかわらず, 安定した社会人

に成長することができた卒園生（施設出身者）たちに出会い、彼らの適応の要因を「重要な他者」との関係性の観点から考察した（安藤・数井, 2004）。当時は、なぜ、心理的に傷ついてしまったのか、その要因に関する研究が多かったが、筆者が「なぜ、彼らは回復する（跳ね返す）ことができたのか」に興味を持ったのは、ウエルナーらの研究に示された逆境に打ち負かされない「弾力性のある子どもたち」との出会いによる。

一方で当時、弾力性（レジリエンス）を象徴・体現するようなゴムゴムの実の能力者ルフィを主人公とするアニメ「ONE PIECE」を愛読しながら、仲間関係と共に、彼らを支える親以外の大人との関係が丁寧に語られるそのアニメに、レジリエンスとの関係性を見出すことができないだろうかと漠然と考えていた。

それから12年が経ち、現在「ONE PIECE」は爆発的に売れ、レジリエンスという概念も、先に述べたように浸透しつつある。これは、単なる偶然なのだろうか。そこで本論では、「ONE PIECE」第1巻から第61巻「頂上戦争編」までを、時代を切り取る一つのテキストとして用い、「レジリエンス」の現代における意義について発達心理学の視点から考察することを試みる。

2 レジリエンスとは

レジリエンス研究の動向をまとめた石井（2009）によれば、「レジリエンスという言葉は、19世紀には、「弾力性」や「反発力」を示す物理学用語であった。その語源は、「跳ね返す」の意味があり、ある物体に加わるストレスに抗して、元の形状や状態に戻ろうとする力のことで、それが、1970年代頃からは、逆境で生育したにもかかわらず、精神病理学的には、それほど重篤な障害を残さず生育した子どもの特性を表す用語として、主として、心理学、さらには、精神医学に導入され、防御と抵抗力を意味する概念として用いられている。その点では、ストレスという言葉が同じく工学から派生し、心理的な概念として用いられるようになった経緯と類似している」という。さらに「レジリエンスの初期の研究は、戦争や自然災害からの立ち直り（Rutter, 1985: 以下3件石井, 2009より）、貧困や社会的経済的低階層の問題からの適応（Garmezy, 1999）、虐待を受けた子どもたちの立ち直り（Crittenden, 1985）」など、困難を抱えた子どもたちの研究が多かったが、2000年以降、様々な領域に研究が広がっている。

米国心理学会では、レジリエンスを「逆境、トラウマ、惨事や脅威、もしくはすさまじいストレスにさらされても、うまく適応してゆく過程」（木村, 2012）としている。レジリエンスは、当初は、単一の能力や特性とみなされる傾向にあったが、さまざまな要素の複合体であることが理解されるようになった（岡野, 2011）。レジリエンスを高めるファクターとして、生まれながらの気質が関わっていること、大人とのよい関係が持っていること、指導者や模範的な先達を持つことなどがあげられている（岡野, 2011）。小塩ら（2002）によれば、レジリエンスの状態にある者の心理的特性、精神的回復力尺度は、①新奇性追求、②感情調整、③肯定的な未来志向の3因子で構成されるという。

3 レジリエンス概念における「逆境 adversity」

レジリエンスは、「重大な逆境という文脈の中で良好な適応をもたらすダイナミックな過程をいう」（Luthar, Cicchetti and Becker, 2000: 石井, 2009より）。「大きな脅威や深刻な逆境に曝されること」と「良好な適応を達成すること」という、二つの条件を満たすことが必要とされるのである。「疾

風知勁草」という言葉が『後漢書』にあるが、疾風が吹いて初めて勁草（勁（つよ）い草）を知ることができる。順風の中に生きている人に、レジリエンスを見出すことはできない。疾風に曝されてこそ、逆境に曝されてこそ、レジリエンスが機能するのである。

庄司（2009）は、日本におけるレジリエンス研究の多くは、「レジリエンス尺度構成に関する研究や尺度を使った研究であり、レジリエンスの概念を日常的なストレスにいわば拡大」（小塩ほか、2002 など）しており、「このような研究方法に偏っている現状は好ましいとは言えない」としている。さらに仁平（2009a）も、持続的なストレスを経験する特別な子どもではなく、一般的な子どもを対象とした健康な発達条件の研究（Seama et al., 2005：仁平，2009a より）の方向性について、「当初のレジリエンス研究が持っていた特定の問題を解決するという意識が希薄になる」と指摘している。

筆者も、「逆境を乗り越えてきた人を対象とした事例研究やナラティブなどの質的な研究からレジリエンスを構成する要因・条件を明らかにしていくべきではないか」との庄司（2009）の意見に賛成であり、社会的養護や児童家庭福祉の分野での研究の進展がさらに求められている、と考える。貧困や虐待などの「逆境」とそれにも関わらず「適応できた」という2つの条件がセットになるレジリエンス研究において、もうひとつ気をつけなければならないことがある。それは、貧困問題が子どもの心理的発達にどのような影響を与えるのか（例えば、MacLeod and Shanahan, 1993：シャファー，2001 より）、虐待が子どもの脳にどこまで深刻なダメージを与えるのか（例えば、友田，2011）など、逆境に曝されることのダメージの理解なしに、回復を語ることはできないということである。レジリエンスの本当の意味を理解するためには、「逆境 adversity」の概念を明確にし、それがもたらす破壊的な影響について十分に理解しなくてはならないであろう。

4 日本におけるレジリエンス研究の動向

日本におけるレジリエンス研究は、心理学、精神医学の分野にとどまることなく、看護学、教育、生態学、経済学、防災学、社会システム論等の広い領域にまでおよび、活発化する傾向が認められ、たびたび研究雑誌等に特集で取り上げられている（表1）。

レジリエンス（レジリエンス・レジリアンスを含む）という言葉に冠する書籍としては、筆者が調べた限り表2の20冊を挙げることができる。20冊のうち17冊が2009年以降に出版されたものである。CiNiiのキーワード検索において、「レジリエンス（レジリアンス等を含む）」でヒットした472編の論文のうち305編が2009年以降に発表されたものであったことから、2009年以降、日本で急速に関心が高まっていることがわかる。

レジリエンスは、「領域横断的な概念」（加藤・八木，2009）であり、先に紹介した書籍のタイトルをみてわかるように、2011年以降、防災や社会システムの領域において頻繁に用いられるようになってきた。CiNiiのキーワード検索では2012年だけでも98件がヒットするが、そのうち45件が、心理学や精神医学以外の分野のものである。京大・NTTレジリエンス共同研究グループ（2012）によれば、全国4紙と日本経済新聞における1年間の「レジリエンス（レジリエンスを含む）」の使用頻度を調べると、2009年は、20回だったが、2011年は41回であり、2011年は心理学の分野よりも社会システムに関する記事で使われるケースが多かったという。

今や様々な研究会やセンターの名称が、「レジリエンス」という言葉を冠している。「救国のレジ

リエンス」(2012)の著者である藤井は、京都大学レジリエンス研究ユニットの代表であるが、そのホームページで、東日本大震災やリーマンショックによる経済危機を経験した今の日本を踏まえ、「レジリエンスとは、社会を一個の有機体と見なした時に、その有機体が如何なる危機に直面しても維持し続けられる、弾力性ある「しなやかさ」を言うものである。様々な外力が加わっても、致命傷を受けることなく、被害を最小化し、迅速な回復を果たす、その社会の力こそが、レジリエンスである。」と述べている。一般社団法人レジリエンス研究会(会長 京都大学教授 林春男)では、「企業及び組織並びに地域社会の防災力・防火力・防犯力ならびに災害・事故・事件からの回復力」をレジリエンスと定義している(同会ホームページより)。

逆境を克服した子どものたちの要因をさぐる研究にルーツをもつレジリエンス研究が、心理学・精神医学の分野のみならず、あらゆる分野に及んでいることは特筆すべきであろう。

表1 レジリエンスをテーマとした研究雑誌の特集号

No.	雑誌名	特集の名称	巻 号	年 月
1	児童心理	心の「強さ」を育てる	61 2	2007 2
2	児童心理	くじけない心を育てる	63 5	2009 4
3	家族療法研究	しなやか(resilient)な家族をめざして: 進化する家族療法の技法と理論	22 3	2005 12
4	女性ライフサイクル研究	生き抜く力を育む レジリエンスの視点から	16	2006 11
5	臨床精神医学	脆弱性とレジリエンス	37 4	2008 4
6	臨床精神医学	レジリエンスと心の科学	41 2	2012 2
7	看護学研究	看護に活用するレジリエンスの概念と研究	42 1	2009 2
8	教育と医学	「立ち直る力」を育む	60 7	2012 7
9	BIOCITY ビオシティ	未来へつなぐレジリエンス・デザイン	50	2012 3

表2 著書名または著者名にレジリエンス(リジリエンス等を含む)という言葉を用いている書籍(2013年3月現在)

No.	著書名	年	著者	訳者	出版社
1	サバイバーと心の回復力ー逆境を乗り越えるための七つのリジリエンス	2002	ステイヴン・J・ウォーリン、シビル・ウォーリン	奥野 光・小森康永	金剛出版
2	幼児期のレジリエンス	2004	小花和 Wright 尚子		ナカニシヤ出版
3	傷ついたあなたへーわたしがわたしを大切にすること DV ト라우マからの回復ワークブック	2005	NPO 法人レジリエンス		梨の木舎
4	レジリアンスー現代精神医学の新しいパラダイム	2009	加藤 敏・八木剛平		金原出版
5	子どものリスクとレジリエンスー子どもの力を活かす援助ー	2009	マーク・W・フレイザー	門永朋子・岩間伸之・山縣文治	ミネルヴァ書房
6	子どもの「こころの力」を育てるレジリエンス	2009	深谷昌志監修、 深谷和子・上島 博・ レジリエンス研究会		明治図書出版
7	しなやかな社会の創造 災害・危機から生命、生活、事業を守る	2009	京大・NTT リジリエンス共同研究グループ		日経 BP コンサルティング
8	傷ついたあなたへ (2)ーわたしがわたしを幸せにすること DV ト라우マからの回復ワークブック	2010	NPO 法人レジリエンス		梨の木舎
9	組織事故とレジリエンスー人間は事故を起こすのか、危機を救うのか	2010	ジェームズ・リーズン	佐相邦英	日科技連出版社

10	チームで実践!レジリエンスモデルによる統合失調症のサイコエデュケーション	2010	石郷岡 / 純	医薬ジャーナル社
11	ナラティブから読み解くレジリエンス	2011	スチュアート・T・ハウザー, 仁平説子・ ジョセフ・P・アレン, 仁平義明 イヴ・ゴールドデン	北大路書房
12	レジリエンス・文化・創造	2012	加藤 敏	金原出版
13	つながる 話す とともに歩む 講演録	2012	NPO 法人レジリエンス	レジリエンス
14	認知行動療法におけるレジリエンスと症例の概念化	2012	ウィレム・クレイン, 大野 裕監訳・ クリスティーン・A・パデスキー, 荒井まゆみ・ ロバート・ダッドリー 佐藤美奈子	星和書店
15	救国のレジリエンス, 「列島強靱化」でGDP900兆円の日本が生まれる	2012	藤井 聡	講談社
16	しなやかな社会への試練 東日本大震災を乗り越える	2012	京大・NTT リジリエンス共同研究グループ	日経 BP コンサルティング
17	地域のレジリエンス 大災害の記憶に学ぶ	2012	香坂 玲	清水弘文堂書店
18	レジリエンスエンジニアリング—概念と指針	2012	Erik Hollnagel, Nancy Leveson, 北村正晴 David D. Woods	科技連出版社
19	レジリエンス—喪失と悲嘆についての新たな視点	2013	ジョージ・A・ボナーノ 高橋祥友	金剛出版
20	レジリエンス 復活力—あらゆるシステムの破綻と回復を分けるものは何か	2013	アンドリュー・ゾッリ, 須川綾子 アン・マリー・ヒーリー	ダイヤモンド社

5 レジリエンス研究と「ONE PIECE」の共時性

CiNii のキーワード検索によれば, 「レジリエンス (レジリエンス等も含む)」を論文タイトルに含む, 日本で発表された一番古い論文は, 武井ほか (1954) の「加硫ゴムのレジリエンスについて」(日本ゴム協会誌) である. もともと「レジリエンス」は物理学用語であるのだから当然なのだろうが, ルフィがゴム人間なので, 最初の論文がまさに「ゴム」であることに驚いた. さらに驚いたことに, CiNii によると「レジリエンス resilience」という言葉が, 心理学の用語として日本語の論文タイトルに初めて用いられたのが, 1997 年(澤田・上田, 1997) である. 1997 年といえば, 「ONE PIECE」が週刊少年ジャンプに連載開始された年である. さらに, 先に述べたように 2009 年より「レジリエンス」に関する論文の発表や書籍の出版が盛んになるのであるが, 2009 年は, 「ONE PIECE FILM STRONG WORLDS」が公開され, 漫画原作のアニメ映画として歴代最高 (当時) となる興行収入 48 億円を記録した年でもある. これらのことは, 単なる偶然であるが, 共時性を感じざるを得ない. 「ONE PIECE」とレジリエンス概念が, パラレルに日本の社会に広まっていったということは確かであろう.

6 研究対象としての「ONE PIECE」

「ONE PIECE」は, 新世界に存在するというひとつなぎの秘宝 (ONE PIECE) を求め, 海賊王を目指すモンキー・D・ルフィをはじめとする「麦わらの一味」が冒険する物語である. ルフィは, 図らずも悪魔の実を食べてゴム人間になったが, シャンクスに憧れ, 義兄のエースやサボとの約束を果たし海賊となる.

「ONE PIECE」の累計発行部数は, 国内最高となる 2 億 8000 万部を突破している (2012 月 11 月, 第 68 巻刊行現在). NHK テレビ番組「クローズアップ現代」(2011 年 2 月) でも, 幅広い読者層

を持つ人気の秘密に迫った特集が組まれたほどであり、「ONE PIECE」は現代を代表するサブカルチャー（大衆文化）であると言える。

さらに、「ONE PIECE」が興味深いのは、その発行部数だけでなく、「ONE PIECE」について書かれている本の多さである。筆者はそれらを3つのグループに分けた。ひとつは、表3にあるような「ONE PIECE」に張り巡らされた伏線を読み解こうとするものである。ちなみにインターネットでは多数の「ONE PIECE」に関する考察サイトがある。2つ目のグループは、表4のように「ONE PIECE」から生き方を学ぼうというものである。

3つ目のグループは、「ONE PIECE」から時代を読み解こうとするものである。「ワンピースの言葉」の著者、遠越（2011）は、「これほどの売れ行きを示すのは、面白さの中にも、時代が求めている思想、哲学そして読者の心魂に訴える重要なメッセージが含まれているからだ」として、「人間の解放者」と呼ばれたベンジャミン・フランクリンとの共通点を指摘している。「モンキー・D・ルフィの「D」はドラッカーだった」の著者、阿部（2011）は、「古今東西、普遍的にすぐれた価値や考え方というものは、何かしらの共通点があるはずだ」として、「マネジメント」の著者ドラッカーとの共通点を指摘している。「ルフィの仲間力ー「ワンピース」はなぜ人の心をつかむのか」と「ルフィと白ひげー信頼される人の条件」の著者、安田（2012）は「400万人以上の人々が感動を共有できる事象」は稀有であるとし、ネットワーク論、リーダーシップ論、チーム論を語っている。「ワンピース世代」の反乱、「ガンダム世代」の憂鬱」の著者鈴木（2011）は、「ワンピース世代」とは自由と仲間を最重視する“ヨコ社会”に生きる者たちとしている。

表3 「ONE PIECE」を分析した著書の例

No.	著書名	著者	年	出版社
1	「ワンピース」の真相	ONE PIECE 考察会	2010	データハウス
2	「ワンピース」の海賊の教科書	ONE PIECE 考察会	2010	データハウス
3	ワンピース最強考察	ワンピ漫研団	2010	晋遊舎
4	ワンピース最終研究。海賊王の血脈と古代文明の謎	ワンピ考古学研究会	2011	笠原出版社
5	ワンピース愛読団	ワンピース世界研究所	2011	KK ベストセラーズ
6	東大生が読み解くワンピース伏線考察	カムラアキラ	2012	晋遊舎

表4 「ONE PIECE」から生き方を学ぶをテーマにした著書の例

No.	著書名	著者	年	出版社
1	「ワンピース」に学ぶ仕事術	平居 謙	2010	データハウス
2	「ワンピース」に学ぶ勝利の交際術	平居 謙	2011	データハウス
3	「ワンピース」に生きる力を学ぼう！	平居 謙	2011	晋遊舎
4	「ワンピース」に学ぶ就職活動	平居 謙	2012	笠原出版社
5	漫画ワンピースは、これからの時代のビジネスバイブルだ！	徳永 泰	2011	イーセミ出版
6	超読解 ワンピースが教えてくれた人生で大切なことー自分の“宝”を守るために必要なもの	海賊行動学研究会	2011	経済界

7 発達心理学の視点から読む「ONE PIECE」

多くの人が、「ONE PIECE」の世界を読み解こうとし、「ONE PIECE」から時代を読み解く鍵を引き出そうとしている。筆者はそれらを可能な限り概観したが、発達心理学からのアプローチはなく、レジリエンスとの関連を指摘しているものもなかった。社会学や経済学、ネットワーク理論の視点が主であり、「ONE PIECE」に描かれる「仲間関係」、つまり横のつながりを論じているものが多かった。

しかし、発達心理学的な視点から「ONE PIECE」を見るならば、レジリエンス（弾力性）とそのレジリエンスを促進する要因とされる親以外の大人との絆、縦の関係が重要な物語となって立ち現れてくる。「ONE PIECE」における「縦の関係」は、「ONE PIECE」の真骨頂であるところの仲間関係を下支えしている重要なテーマである。

「ONE PIECE」の著者、尾田（2011）は、「そもそもセリフっていうのは、キャラクターが勝手に喋ってしまうものなんです。（中略）セリフと言うものは、紛れもない「彼ら」のものなんです」と述べている。小説が書かれる時、単純に「作者」が「作品」をすべて統御しているとは言えない（バルト、1979）ように、アニメ作品も同様のことが言えるのではないか。

「ワンピースという物語」が、作者の手によりこの時代に投げ出され、それぞれの読者の人生との相互作用の中で読み込まれていく。読者の幅広い、自由な読みを許すというよりも促す。それこそ「ONE PIECE」の名作、怪物たる所以であろう。

8 「ONE PIECE」に描かれるレジリエンス

「ONE PIECE」を米国心理学会のレジリエンスの定義（木村、2012）にあてはめると、「逆境やトラウマ、惨事や脅威、もしくはすさまじいストレスにさらされた」子どもたちが、それらに打ち負かされることなく、逞しい青年に成長していく物語として読むこともできる。

ルフィを含め、ルフィの仲間の多くは、親以外の大人に育てられた子どもたちである。戦争孤児のナミ、親に捨てられたチョッパー、フランキー、親戚に引き取られ冷たい養育を受けたロビン、ゼフに育てられたサンジなどであるが、ロビンとチョッパーは悪魔の実の能力者であったため、幼少期に化け物扱いにされ排斥されていた。さらに、それぞれが、子ども時代に、自分にとって大切な大人が、目の前で、自分を守るために殺されたり、腕や足を失っている。ナミやロビンは、自分の住んでいる村を破壊された経験を持ち、ロビンは8歳ですでに賞金首にされ、ナミは10歳で無理やり海賊の一味に加えられた。ルフィの仲間たちは、文字通り「逆境やトラウマ、惨事や脅威、もしくはすさまじいストレスにさらされた」子どもたちであったが、それにも関わらず、仲間を信じ助け合い、それぞれの夢に向かって生きていく逞しい若者たちに成長することができた。まさに、レジリエンスの物語ともいえよう。

1) 強さのパラダイムシフト

強さとは何か、それは、レジリエンスについて考える時に重要なテーマであり、「ONE PIECE」が我々に問いかけているものでもある。仁平（2009a, b）は、人間が生きていくために心の力として何が重要かについて、1990年ころから世界的に考え方の転換が起こったと述べている。重要なのは、「強い心」や「タフな心」（ハーディネス hardiness）ではなく、「しなやかな心」あるいは「心

の回復力」(レジリエンシー resiliency) だというパラダイムシフトである。

「この二つの概念は、同じような意味で使われることもあるが、出発点にある発想と研究は、まったく逆のものだった」(仁平, 2009a, b) という。ハーディネスは、強者中の強者(例えば、公共機関の男性管理職、課長以上の昇進を果たした成功者たち)が、なぜ勝ち組になることができたのかという研究から出発している。それに対して、レジリエンス研究は、「本来ならば、精神的に問題を生じるようなひどい状況にあっても、たとえば、親による虐待というような持続的で強いストレスを受けても、精神的に健康に成長できた子どもたちがいるという事実と驚きから出発している。言い換えれば「負け組」が負け組にならない条件の研究である」(仁平, 2009a)。ハーディネスでは、ストレスを感じないし傷つきもしないが、それに対して、回復という意味を持つレジリエンスは、傷ついたところから回復するのである。

「ONE PIECE」においても、強さのパラダイムシフトは十分に描かれている。ルフィが、ゴムゴムの実の特殊能力者として弾力性を強みに、旧来の強者の象徴であるような、屈強かつ破壊的な敵を次々と倒し海賊王をめざすというストーリーは、現代に必要な新しい「つよさ」は、レジリエンス(弾力性)であることを象徴していると考えられよう。

2) 「ONE PIECE」に描かれている「しなやかな強さ」

ルフィが、海賊王になる夢を抱いて海に出て、初めて戦う海賊が、「金棒のアルビタ」である(第1巻)。厳つい体のアルビタは、大きな金棒でルフィを殴るのだが、ルフィは、「効かないねえっ! ゴムだから」と、にやっと笑って、アルビタを弾力性あるパンチで飛ばしてしまう。バギーとの戦い(第2巻)では、砲弾をも跳ね返してしまう。「ゴム」と「金棒」、「ゴム」と「砲弾」という象徴的な対比で、ルフィの強さ(レジリエンス)が描かれている。

「東の海編」に登場する海賊艦隊の首領クリークは、強靱な鋼の鎧や武器を全身に装備して相手を完全に叩きつぶす海賊であった(第8巻)。そのクリークとルフィとの戦いの場面で次のようなやりとりがある。「なあ、小僧、てめえとおれとどっちが“海賊王”の器だと思う?」「おれ」とルフィが答える。するとクリークは、「その夢見がちな小僧に『強さ』とはどんなモンかを教えてやる…!!」「小僧…おれが 東の海を制した本物の『武力』ってもんを見せてやる。お前のそのくだらねえ能力の無意味さを知れ!」と攻撃してくる(下線筆者)。しかし、ルフィは驚異的な弾力性で戦い、クリークに勝利する。怪力よりも鋼鉄の体よりも、ルフィの「くだらねえ能力」(ゴムゴムの実の能力(弾力性)レジリエンス)の方が「本当の強さ」なのだと描かれているのである。

クリーク海賊団の鉄壁の盾を持つ「鉄壁のパール」が「無傷こそ、強さの証」とルフィたちに言い放ち、戦いを挑んでくる。これはいわば傷つかないという「ハーディネス」を象徴するような言葉であるが、結果としてルフィたちに敗れる。「ONE PIECE」においては、無傷であることは強さの証にはならない。ルフィもゾロもシャンクスもゼフもココヤシ村のゲンゾウも無傷ではない。むしろ、傷こそが彼らのアイデンティティであり、傷ついてもなお生きぬくことこそ強さの証であり、回復力(レジリエンス)の証明なのである。

「空島編」でエネルと戦う場面も、ルフィの強さ(レジリエンス)が象徴的に描かれている(第30巻)。エネルは、自然災害の驚異の象徴ともいえる、自然系(ロギアけい)の悪魔の実の能力者であり、2億ボルトという桁はずれのエネルギーを操り、体を雷と化したり雷を自在に落として攻

撃することができる。普通の人ならば、エネルの雷の一撃で死んでしまうところだが、ルフィには全く効かない。エネルは驚き、「なんだというのだ…貴様!!…」と問う。「俺はルフィ、海賊でゴム人間だ」とルフィは答える。ゴムは絶縁体のため雷も効かないのだ。ルフィのレジリエンスは、自然の猛威さえ、受け止めてしまう強さを象徴しているかのようである。

「スリラーパーク編」では、超強化したモリアが、ルフィをブラックボックスに閉じ込め、その箱ごと踏み潰す場面がある(第49巻)。絶体絶命と思われたが、ルフィは「俺は誰にもつぶされねえ…!!」と言って立ちあがる。「潰されねえ…?!」そう言い切る根拠の浅さこそが、てめえの経験の浅さを…」と言いかけるモリアを遮り、ルフィは自信に満ちた顔で、「ゴムだから」と言い返す。「俺は誰にも潰されねえ」という言葉は、ルフィの心理面の弾力性、折れない心、ゴム人間としてのアイデンティティーをも表していると言えるだろう。

「頂上戦争編」の回想場面では、幼いエースとルフィがもっと強くなりたいと鍛えあう様子が描かれている(第60巻)。「やっぱ、ゴムなんて戦闘向きじゃあねえんだよ」とエースが言う。「ゴムゴムの実をバカにすんな!!」とルフィが言い返す。

確かに、今までの価値観であれば、「ゴムなんて戦闘向きではない」のであるが、「ONE PIECE」では、新しい強さの価値観を提示している。それは、あらゆる攻撃を弾力的に受け止めることで無効化または最小化し、形を変えどこまでも柔軟に戦いを勝ち抜いていく能力であり、今までのヒーローの強さとは、異質のものである。

藤井(2012)は、レジリエンスを「しなやかな強靱さ」と言い換え、「日本が今一番必要としている力」であるとしている。「例えば太い丸太ん棒は、ある程度の力を加えてもびくともしないが、一定以上の力を加えると、ボキッと折れてしまう。つまり、丸太ん棒は、頑丈ではあるが、脆い」として、「柳の木のような、しなやかな強靱さが必要だ」としている。

様々な脅威に曝される逆境において有効なのは、頑健な力よりも弾力的なしなやかな強さ(レジリエンス)であろう。驚異的な弾力性をアイデンティティとするルフィは、藤井が言うところの、「日本が今一番必要としている力、レジリエンス」を体現しているとは言えないだろうか。

3) レジリエンスの根幹を支える重要な他者

ルフィとレジリエンスとの共通点は、「弾力性」だけにとどまらない。レジリエンスがある者の心理的特性は、①新奇性追求、②感情調整、③肯定的な未来志向(小塩ら, 2002)であるが、ルフィは、①好奇心が強いという新奇性追求、②時には、「このけんかは絶対に買うな!」と仲間を制するなど、怒りをコントロールする感情調整、③「海賊王に、俺はなる!」という肯定的未来志向などに共通点を見出すことができる。しかし、なぜ、ルフィとその仲間たちは、このようにレジリエントな若者に成長することができたのだろうか?

仁平は(2009a)は「レジリエンスの形成には、「メンター」が重要な役割の一つ」を果たしており、その中核は、「自分を心配して見てくれる人がいる。自分はひとりではないという感覚を与えることにある」としている。O'sullivan(1991: 仁平, 2009aより)は、「アルコール依存症の親を持つ子どもたちは、病理的傾向を示すリスクがあるが、メンターがいた子ほど、レジリエンスが高かったと明らかにしている。その理由は、①誰か、世話をし、心配してくれる大人がいることは、アルコール依存の親を持つ子どものつらい経験をやわらげてくれる。②子どもはメンターが自分と

人間関係を結んでくれることで、人とつながるという感覚を育てることができ、家庭でのアルコール依存症患者から建設的なかたちで距離をとることができる。」と述べている。Aronowitz (2005: 仁平, 2009a より) も「望まない妊娠や触法などを経験した子どもたちの中でレジリエンスを形成できた者たちは、自分を心配してくれる、有能で責任を持ってみってくれる成人の誰かとの結びつきがあった」と述べている。

フレイザー (2009) も、レジリエンスの要因に思いやりのある大人の存在の重要性を指摘している。社会的な支援やつながりを提供する大人が少なくとも1人いることは、様々なりスクの状況にある子どもの防御推進要因となることが一貫して確認されているのである。

シリュルニック (2007) も、トラウマを受けた子どもの療育・発達の側面を重視してきた、ルーマニアの孤児の発達研究に着目し、レジリエンスを「人間のトラウマからの絶え間ない回復力・抵抗力」と定義し、逆境やトラウマを体験した子どもがどのような出会いであれ、「外部に導く存在があり、感情的な人間関係を結べて自分を表現する場所がある場合に、レジリエンスが発揮される」と述べている。

4) 「ONE PIECE」における「重要な他者」

数々のレジリエンス研究の結果が、逆境に打ち負かされずレジリエンスを高めるためには、親以外の大人（重要な他者）との情緒的な絆が重要であることを伝えている。「ONE PIECE」の中には、自分の身を投げ出してまでも、ルフィたちを守る、親以外の大人たち（重要な他者）が描かれており、いつもルフィたちのことを気にかけている。

例えば、シャンクスは、海王類に襲われたルフィを助けた時に片腕を失った。シャンクスの腕がないことに気が付いて泣くルフィにお前の命が無事でよかったと笑う。ゼフは、海難事故で10歳だったサンジを助け、漂流した島でサンジにすべての食料を与え、自分の足を犠牲にして食べた。ベルメールは、戦災孤児であったナミたちを育てていたが、アーロン一味が村を襲った時に、ナミたちのために殺された。ナミの住むココヤシ村の駐在ゲンゾウも、ナミを父親代わりのように見守ってきたが、ナミがアーロン一味に連れて行かれるのを阻止しようとして、瀕死の重傷を負った。Dr. ヒルルクは、もともと余命僅かであったが、結果的にはチョッパーのために命を落とした。化け物扱いをされ、親にも仲間にも拒否され、名前さえつけてもらえなかったチョッパーに、Dr. ヒルルクは名を与え息子のように愛した。トムは、フランキーたちを庇い海軍の陰謀にはめられ、政府により監獄に連行された。サウロは、身を挺して海軍からロビンの命を守り、捕縛され凍結された。サウロは、妖怪扱いされ孤独だったロビンに笑い方を教え、いつか会える仲間と生きるんだと励ました。生き延びるために様々な組織を利用してきたロビンの心の奥底でこのサウロの言葉が生きていたからこそ、ルフィたちと本当の意味の仲間になることができたのである。

さらには、このようなクリティカルサポートだけでなく、「ONE PIECE」の世界では、親のいないルフィやナミを絶えず気にかけて、愛情を注いでくれた、フーシャ村の、村長やマキノや村人、ココヤシ村の、駐在やドクターや村人たちなど、幼少期の彼らに対して日常的なサポートをしてくれたコミュニティが描かれている。他にもルフィの養母ダダン、ルフィが兄を失い自暴自棄になった時に支えてくれたジンベエ、覇気を教えてくれたレイリー、ロビンを支えたオハラ学者たち、ゾロを導いたクイナの父・鷹の目のミホークなど、彼らの重要な他者をあげたら、枚挙にいとまが

ない。もちろん、重要な他者の中には、仲間も含まれていく。レジリエンスには、他者からのサポートを引き出す力、ネットワーク構築力も含まれているのである（佐藤・祐宗，2009）。

発達心理学においては、重要な他者というと親を示すことが多いが、しかし、なぜ「ONE PIECE」には、普通の親子ではなく、親以外の親（重要な他者）との絆がこのように丁寧に描かれるのだろうか。現実の社会に立ち戻り考えてみれば、そもそも逆境にある子どもは、親が普通に機能しないからこそ逆境に陥っているケースが多い。よって、必然的に親以外の大人（重要な他者）の力が求められるのであろう。

親に「手に負えないガキだ」と船から海に投げだされた10歳の少年フランキーが、廃船島で「おっさん、おれ、拾ってくれ」とトムに頼む。7歳のルフィは、「こんなに邪魔者扱いしているのに、なんで俺らについてくるんだ」とエースに言われて、「だって、他にたよりがいねえ」と泣く。親のいないルフィとエースに気兼ねして、孤児だと嘘をついていたサボの「親はいても一人だ」の言葉は象徴的だ。一人で生きている子どもたち、大人とのかかわりを切望している子どもたち、仲間との関わりを切望している子どもたち、その姿が「ONE PIECE」に描かれている。みんな孤独の中で「頼りになる、自分を気にかけてくれる重要な他者」を求めているのである。

「ONE PIECE」は、ルフィたちが、自分を守るために差し出してくれた重要な他者の命とともに、その志を受け継いでいく物語である。命を守ってくれた重要な他者に対する絶対的な信頼感、自分は助けてもらうだけの価値のある人間だったんだという自尊心、重要な他者の志を引き継いだことによる肯定的未来志向、そのすべてが、レジリエンスの源である。つまりルフィたちにとって、レジリエンスの根幹をなすものが、重要な他者たちとの緊密な情緒的絆であったといえよう。そして、それらが仲間たちとの絆の土台となっているのである。

9 考察—なぜ、今レジリエンスなのか

日本を一つの有機体として捉える（藤井，2012）ならば、低迷する経済、6人のうち1人の子どもが貧困に直面しているという現実（厚生労働省報道発表資料，2009）、増え続ける虐待通告（厚生労働省政策レポート，2011）、東日本大震災、福島原発事故等による深刻な被害、またさらに予想されている巨大震災の危機等の逆境にある今の日本だからこそ、回復や、打ち負かされない弾力性を追究するレジリエンス研究が、あらゆる分野で進むのは必然であり、レジリエンスという概念を時代は求めているのである。そのような時代状況のなかで、爆発的な流行をした「ONE PIECE」は、日本における「レジリエンス」概念の表出の在り方の一つといえるのではなかろうか。

「レジリエンス研究は、世界的には、1990年ごろから、爆発的といえるほどに盛んに行われていった。子どもの発達のマイナス条件ではなく、プラスの条件に目を向けて、積極的にそれを作り出していこうとする考え方への転換は、「レジリエンス革命」（Leadbeater et al., 2005：ハウザーほか，2011より）と呼ばれるほどの大きな研究の枠組みの変化であった」（仁平，2011）。しかし、すべての子どもが、逆境を克服できるわけではない。虐待やネグレクトを受けた子どもたち667人のその後を22年間追跡した研究（McGloin and Widom, 2001：ハウザーほか，2011より）では、「多面的な社会的健康・精神的健康の指標から見て「レジリエンスが見られた」子どもたちの割合は22%だった」。筆者が冒頭で紹介したウエルナーのカウワイ島の研究でも適応的であったのは、3分の1であった。

フレイザー（2009）は、「レジリエンスは、ゴールデンアワーのテレビを面白くして人を引き付ける磁石のようなものである。映画やテレビのスターは、並外れた手腕、大胆不敵、堅忍不拔、または、ユーモアによって、あり得ないような困難を乗り越える。しかし、現実の世界で現実の人々にこのようなことが起こるのだろうか。答えはイエスだが、注意が必要である。」と述べている。さらに、Cicchetti and Rogosch（1997：フレイザー，2009より）の研究結果を引用し、「きわめて深刻な逆境を経験して良好に適応する子どももいるが、それは非常に例外的で稀有なことである」と述べている。

しかし、たとえそれが、稀有な例だとしても、逆境を克服した「弾力性のある子どもたち」がいるかぎり、我々は、彼らの存在に強く惹かれ、なぜ彼らが破滅を回避し、その安定（適応）を手に入れることができたのかを探求せずにはいられない。

Skolnick（1986：齋藤，2001より）は、62名の縦断研究から、人生の初期（3歳までの親子関係）がすべてを決定するのではなく、出会った人々によって、人生は変えていくことができると述べている。シリユルニック（2002）は、レジリエンスを個人の中にあるだけでなく、個人を取りまく人々との協働によって作り出されていくものであると指摘している。つまり、レジリエンスは、逆境にある人を受け止め支援する社会全体の問題なのである。

「ONE PIECE」の物語は、逆境にある子どもの健全な発達には、子どもの周りの大人の力が必要だということ、それは、親でなくても、その子のレジリエンスを支える人物になることができるということを確認させてくれる。

逆境の克服は簡単ではない。まして、逆境にある子どもに手を差し伸べることも容易ではない。レジリエンスは、みんなが求めている概念であるが、現実にはそんなに簡単ではない。しかし、だからこそ、アニメ「ONE PIECE」の中に、時代がレジリエンスを求めているということが無意識にあぶり出されているとはいえないだろうか。

10 最後に

外力による物体の歪み（ストレス）に対して、反発力（レジリアンス）が生じるのは、物質界の日常現象である。かつて物理学用語であった「ストレス」は、20世紀前半に医学用語となり、今日では、ほとんど日常用語になった（加藤・八木，2009）。PTSDの「トラウマ」ですら、本来は、生死に関わるような強い恐怖をもたらす体験のことを指しているが、日常的に使われるようになってきている。「レジリエンス」という言葉も、遠くない将来に日常的に用いられるようになるだろう。それは、先に筆者が述べたように時代が求めている概念であれば、当然である。

しかし、「レジリエンス」という言葉がどんなに巷にあふれようとも、レジリエンス研究のルーツを我々は忘れてはならない。つまり、今、まさに逆境に生き、トラウマに曝されて、レジリエンス研究の知見とそれによるサポートを待っている子どもたちの存在を忘れてはならないのである。

11 参考文献

- 阿部美穂，モンキー・D・ルフィの「D」はドラッカーだった。モンキー・D・ルフィと DRUCKER の共通法則。経済界，188p., 2011.
- 安藤みゆき・数井みゆき，「もうひとりの重要な（意味ある）他者」―児童養護施設出身者のライフストーリー

- よりー. 茨城大学教育学部紀要 (人文・社会科学), 53, 75-94, 2004.
- Aronowitz, T., The role of "envisioning the future" in the development of resilience among at-risk youth. *Public Health Nursing*, 200-208, 2005.
- Barthes, R., *Introduction a L'analyse Structurale des Recits*. ロラン・バルト, 花輪 光訳, 「物語の構造分析」. みすず書房, 232p., 1979.
- Cicchetti, D. and Rogosch, F. A., The role of self-organization in the promotion of resilience in maltreated children *Development and Psychopathology*, 9, 797-815, 1997.
- Crittenden, P. M., Maltreated infants: vulnerability and resilience. *Journal of Child Psychiatry*, 26, 85-96, 1985.
- Cyrlunik, B. ボリス・シリユルニック, 桑田光平訳, 専門家はいかにしてレジリエンスを導く人になれるのか. 現代思想, 35, 148-165, 2007.
- Cyrlunik, B., *Les Vilains Petits Canards*. Odile Jacob, 2001, ボリス・シリユルニック, 齋藤 学監修, 柴田都志子訳, 「壊れない子どもの心の育て方」, KK ベストセラーズ, 223p., 2002.
- Fraser, M. W., *Risk and Resilience in Childhood: An Ecological Perspective*. 2nd. Ed., 2004, マーク・W. フレイザー, 門永朋子・岩間伸之・山縣文治訳, 「子どものリスクとレジリエンス—子どもの力を活かす援助—」. ミネルヴァ書房, 576p., 2009.
- 藤井 聡, 救国のレジリス. 「列島強靱化」でGDP900兆円の日本が生まれる. 講談社, 254p., 2012.
- Garmezy, N., Resilience in children's adaptation to negative life events and stressed environments. *Pediatric Annals*, 20, 459-466, 1991.
- Hauser, S. T., Allen, J. P. and Golden, E., *Out of Woods. Tales of Resilient Teens*. Harvard University Press. 2006, スチュアート・T. ハウザー, ジョセフ・P. アレン, イヴ ゴールデン, 仁平説子・仁平義明訳, 「ナラティヴから読み解くレジリエンス」, 275p., 北大路書房, 2011.
- 石井京子, レジリエンスの定義と研究動向. 看護学研究, 42, 3-14, 2009.
- 加藤 敏・八木剛平, レジリアンス 現代精神医学の新しいパラダイム. 金原出版, 231p., 2009.
- 木村美也子, 脆弱性とレジリエンス. こころの科学, 165, 16-21, 2012.
- 厚生労働省報道発表資料, 子どもがいる現役世帯の世帯員の相対的貧困率の公表について. 大臣官房統計情報部国民生活基礎調査室, 2009年11月13日発表.
- 厚生労働省政策レポート, 児童虐待関係の最新の法律改正について. 雇用均等・児童家庭局総務課虐待防止対策室, 2011年8月.
- 京大・NTTレジリエンス共同研究グループ, しなやかな社会への試練 東日本大震災を乗り越える. 日経BPコンサルティング, 247p., 2012.
- Leadbeater, R., Dodgen, D. and Solarz, A., The resilience revolution: a paradigm shift for research and policy? In Peters. R. D., Leadeater, B. and McMahon, R. J. (eds.) *Resilience in Children, Families and Communities: Linking Context to Practice and Policy*. New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers, 47-61, 2005.
- Luthar, S. S., Cicchetti, D. and Becker, B., 2000, The construct of resilience: a critical evaluation and guidelines for future works. *Child Development*, 71, 543-562.
- MacLeod, J. D. and Shanahan, M. J., Poverty, parenting and children's mental health. *American Sociological Review*, 58, 351-366, 1993.
- McGloin, J. M. and Widom, C. S., Resilience among abused and neglected children grown up. *Development and Psychopathology*, 13, 1021-1038, 2001.
- 仁平義明, 人間力育成のパラダイム・シフト—ハーディネス (心の頑強さ) からレジリエンシー (心の回復力) へ. 現代のエスプリ, 500, 194-203, 2009a.
- 仁平義明, 子どもの虐待と心の回復 (レジリエンス) の指標. 白? 大学論集, 26, 363-390, 2009b.
- 仁平義明, 少し長い訳者あとがき. レジリエンス入門. Hauser, S. T., Allen, J. P. and Golden, E., *Out of Woods*.

- Tales of Resilient Teens*. Harvard University Press. 2006, スチュアート・T. ハウザー, ジョセフ・P. アレン, イヴ ゴールデン, 仁平説子・仁平義明訳, 「ナラティヴから読み解くレジリエンス」, 265-275, 北大路書房, 2011.
- 尾田栄一郎, *ONE PIECE STORONG WORDS*. (上・下巻) 集英社新書ヴィジュアル版, 206p., 222p., 2011.
- 岡野憲一郎, 続 解離性障害-脳と身体から見たメカニズムと治療. 岩崎学術出版社, 246p., 2011.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治, ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性-精神的回復力尺度の作成. カウンセリング研究, 35, 57-65, 2002.
- O'sullivan, C. M., The relation between childhood mentors and resiliency in adult children of alcoholics. *Family Dynamics of Addiction Quarterly*, 1, 46-59, 1991.
- Rutter, M., Resilience in the face of adversity: protective factors and resilience to psychiatric disorder. *British Journal of Psychiatry*, 147, 598-611, 1985.
- 齋藤耕二, 22 章 変化に対する柔軟性. 齋藤耕二・本田時雄編著, ライフコースの心理学, 金子書房, 290p., 2001.
- 佐藤琢志・祐宗省三, レジリエンス尺度の標準化の試み. 『S-H 式レジリエンス検査 (パート1)』の作成および信頼性・妥当性の検討. 看護研究, 42, 45-52, 2009.
- 澤田和美・上田礼子, 病気の乳幼児と母親の養育性-強靱性 (Resilience) の育成の視点から. 小児保健研究, 56, 562-568, 1997.
- Schaffer, H. R., Making Decisions about Children. Second Edition. Blackwell, 1998, シャファアー, H. R., 無藤 隆・佐藤恵理子訳, 「子どもの養育に心理学がいえること 発達と家族環境」, 新曜社, 299p., 2001.
- Seama, A. Jr., Mannes, M. and Scales, P. C., Positive adaptation, resilience and the developmental asset framework. In Goldstein, S. and Brooks, R. B. (eds.), *Handbook of Resilience in Children*. Kluwer Academic/Plenum Publisher, 281-296, 2005.
- 庄司順一, レジリエンスについて. 人間福祉研究, 2, 11-25, 2009.
- Skolnick, A., Early attachment and personal relationship across the life course. *Life-span Development and Behavior*, 7, 173-206, 1986.
- 鈴木貴博, 「ワンピース世代」の反乱、「ガンダム世代」の憂鬱. 朝日新聞出版, 208p., 2011.
- 武井健三・阿部満雄・藤本邦彦, 加硫ゴムのレジリエンスについて. 日本ゴム協会誌, 27, 282-288, 1954.
- 友田明美, 児童虐待が脳に及ぼす影響. 小児の精神と神経, 51, 38-42, 2011.
- 遠越 段, ワンピースの言葉. Philosophy of ONE PIECE. 綜合法令出版, 237p., 2011.
- Werner, E. E. and Smith, R. S., *Vulnerable but Invincible: A Longitudinal Study of Resilient Children and Youth*. McGraw-Hill, New York, 1982.
- Werner, E. E. and Smith, R. S., *Overcoming the Odds. High Risk Children from Birth to Adulthood*. Cornell Univ. Press, Ithaca and London, 280p., 1992
- 安田 雪, ルフィと白ひげ. 信頼される人の条件. 「ONE PIECE」に学ぶ, 希望を運ぶリーダーシップ. アスコム, 230p., 2012.
- 安田 雪, ルフィの仲間力. 「ONE PIECE」流, 周りの人を味方に変える法. アスコム, 188p., 2012.

「保育表現技術（身体Ⅰ・Ⅱ）」における 身体活動の取り組みに関する継続的研究 — 学生による自由記述文のテキストマイニング分析をもとに —

国府田はるか

茨城女子短期大学 保育科

Key words；身体表現、ダンス、保育、ひらいた身体、テキストマイニング

要旨；女子短期大学における体育関連の授業実践を報告し、その成果と課題を明らかにするとともに、幼稚園教諭・保育士養成校における体育授業の在り方について検討を行った。

学生による「授業の振り返り」自由記述文のテキストマイニング分析により、学生は「保育表現技術（身体Ⅰ・Ⅱ）」の授業を通じて、現場での実践に結びつく保育実践力の向上及び身体表現力の向上、心身への効果の実感や体育嫌い・ダンス嫌いの改善、他者とのコミュニケーションの構築や達成感・自己充実感の獲得等の様々な効果を認めていることが明らかになった。

また、現代の女子学生が直面している「身体を見られることに抵抗がある」「人前で表現することが恥ずかしい」といった種々の身体的問題を解消し、子どもの表現をからだ全体で受け止め、支え、共感し、広げることのできる「ひらいた身体」を目指すという授業のねらいに関しては、ある一定程度達成されたものと考察される。

1. はじめに

筆者は2009年度より現在まで4年間、I女子短期大学において「健康とスポーツ」、「基礎体育」ⁱ、「保育表現技術（身体）」、「身体表現」、「幼児体育」、「保育内容演習（健康）」、「総合表現」等の実技・演習科目の指導に携わってきた。受講する学生は保育科に所属しておりⁱⁱ、保育士や幼稚園教諭を目指して勉学に励んでいる。

授業を通して学生と関わる中で、「身体が硬い」「身体を動かすのが面倒である」「心身共に疲れやすい」「身体が思い通りに動かない」「身体を見られることに抵抗がある」「人前で表現することに恥ずかしさを覚える」といった現代の女子学生が抱えている種々の身体的問題に直面することとなった。

学生が将来現場で活躍するにあたっては、指導者としての高い専門性・実践力を身につけることのみならず、子どもたちの表現を引き出し、促すことのできる保育者が求められており、幼稚園教諭・保育士養成校においても身体的感性を高める身体活動は重要な意味を持つと考える。

そこで筆者は、自身の経験を生かしたフロアストレッチ、フロアエクササイズ、ヨガ、ピラティス、コンタクト・インプロヴィゼーション、リズム遊びや表現遊び、バレエ、ベリーダンス、フラダンス、創作ダンス等の様々な手法を取り入れた身体活動を各授業に導入することを試みている。

本稿では、学生の言葉を手掛かりとして2年間にわたる「保育表現技術（身体Ⅰ・Ⅱ）」におけ

る授業実践を報告し、その成果と課題を明らかにするとともに、幼稚園教諭・保育士養成校における体育授業の在り方について検討していきたい。

2. 方法

本研究では、2011 年度及び 2012 年度に実施した 1 学年の受講生全員が記入する「運動経験に関する質問紙調査」、「運動・スポーツ実施状況に関する質問紙調査」、「体育の好き嫌いに関する質問紙調査」、また、2011 年度「保育表現技術（身体Ⅰ・Ⅱ）」の最終授業において受講生全員に記述を依頼している自由記述の回答文、2012 年度「保育表現技術（身体Ⅰ）」の最終授業において受講生全員に記述を依頼している自由記述の回答文、及び 2012 年度に実施した「球技サークル」「テニスサークル」を対象とした運動状況に関する質問紙を分析の対象とする。

「保育表現技術（身体Ⅰ・Ⅱ）」の受講学生は、Ⅰ女子短期大学保育科に所属する 1 学年の女子学生、2011 年度 78 名、2012 年度 73 名、計 151 名である。

2011 年度、2012 年度の「運動・スポーツ実施状況に関する質問紙調査」、「体育の好き嫌いに関する質問紙調査」に関しては選択回答方式により全受講生に回答を求めた。

2011 年度の「授業の振り返り」に関しては、1 年間の授業を通じて「学んだこと」や「心に残ったこと」、授業の印象や感想、反省や要望等を自由に記述するように全受講生に指示した。2012 年度の「授業の振り返り」に関しては、半年間の授業を通じて「学んだこと」や「心に残ったこと」、授業の印象や感想、反省や要望等を自由に記述するように全受講生に指示した。

「授業の振り返り」に関する質問紙調査の分析方法については、記述文を項目ごとに全てテキストデータ化し、テキストマイニングの手法を用いて解析するⁱⁱⁱ。使用ソフトは KH Coder である。まず、分析対象ファイルを指定し、強制抽出する語を選択^{iv}した上で、前処理を実行する。手作業で同義語を統合した後、複数回以上使用された語を抽出する。その上で、文章を特徴づける頻出語の抽出を行い、記述語同士の共起関係をネットワーク図にする共起ネットワークを作成する。

また、授業実践の報告に関しては、「健康とスポーツ」117 回、「基礎体育」30 回、「保育表現技術（身体Ⅰ）」46 回、「保育表現技術（身体Ⅱ）」43 回、「身体表現」30 回、「幼児体育」43 回、計 309 回分（2009 年 4 月から 2012 年 1 月現在まで）の筆者による各授業実践の記録を用いる。

3. 女子学生の身体活動に関する継続調査

厚生省（現厚生労働省）が 2000 年に策定した「21 世紀における国民健康づくり運動（健康日本 21）」は、壮年期死亡の減少、健康寿命の延伸等の実現を目的とし、国民が一体となって取り組む健康づくり運動である。「健康日本 21」では、「日頃から日常生活の中で、健康の維持・増進のために意識的に体を動かすなどの運動をしている人」の増加を図り、「1 回 30 分以上の運動を週 2 回以上実施し、1 年以上継続している人」すなわち「運動習慣者」を「男性 39%、女性 35%」とする目標値を設定している。

その上で、2011 年、厚生労働省により「健康日本 21 最終評価」が公表された。そこでは、「意識的に運動を心がけている人の割合は増加したが、運動習慣者の割合は変わらなかった」という問題点が指摘された。多くの者が運動の重要性を理解しているにもかかわらず、長期にわたる定期的な運動には結びついていないと考えられる。

それらを踏まえ、Ⅰ女子短期大学における学生の身体活動の現状を把握するために、女子学生が短期大学入学時までに行ってきた、部活動やクラブ活動、習い事やスポーツ少年団等の運動経験について質問紙調査を行った。調査対象は、2009年度～2012年度入学の18歳～19歳の女子学生、有効回答者数は2012年73名、2011年82名、2010年度57名、2009年度45名、計257名である。なお、運動は、1年以上継続したものを記述するよう指示した。回答方法は自由記述方式による。本調査によると、いずれの年度も、上位4種目を「水泳」「バスケットボール」「バレーボール」「テニス（硬式・軟式）」を占める結果となった。

4年間のデータを統合したところ、上位10種目は、「水泳」70名（27.2%）、「バスケットボール」55名（21.4%）、「テニス（硬式・軟式）」53名（20.6%）、「バレーボール」52名（20.2%）、「卓球」23名（8.9%）、「バドミントン」22名（9.3%）、「剣道」17名（6.6%）、「陸上」11名（4.3%）、「ソフトボール」11名（4.3%）、「サッカー」9名（3.5%）という結果であった。

また、これまでの運動経験について「体育の授業のみ」と答えた学生は、2012年度8名（11.0%）、2011年度11名（13.1%）、2010年度7名（12.3%）、2009年度4名（8.9%）となり、4年間のデータを統合したところ、30名（11.7%）であった。約9割を超える生たちが、短期大学入学時まで部活動やクラブ活動、習い事やスポーツ少年団等において、何らかの運動経験を行ってきていることが明らかになった。

年度別の調査結果をまとめたものを図1～図4に示す。また、4年間のデータを統合したものを図5に示す。

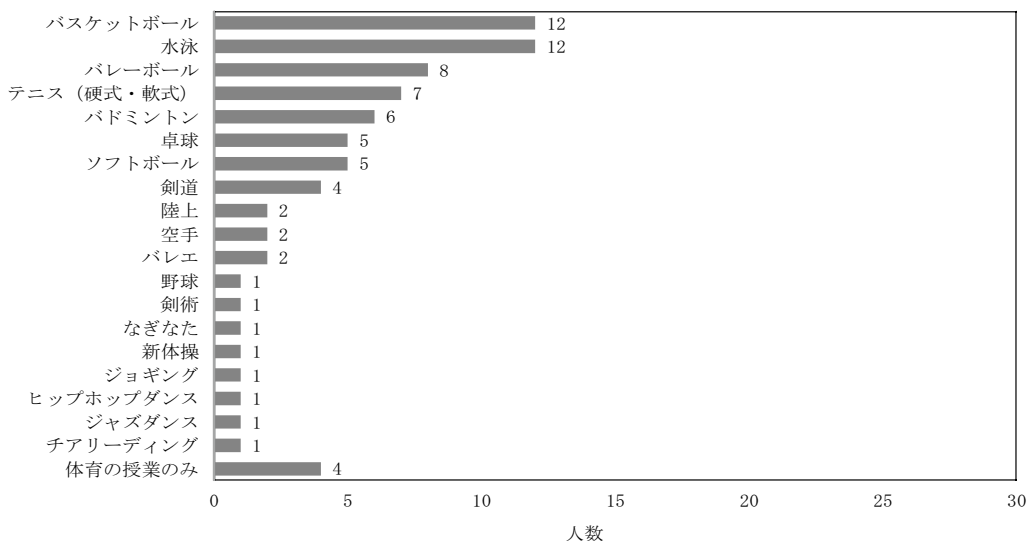


図1 女子学生が短大入学時までに行ってきた継続的な運動経験（2009年度）

次に、女子学生の短期大学入学以降の運動・スポーツ実施状況に関する質問紙調査を行った。調査項目は、「運動部やスポーツクラブへの所属状況」、「1日の運動・スポーツ実施状況」、「1日の運動実施時間」である。調査対象は、2011年度入学及び2012年度入学の18歳～19歳の女子学生、

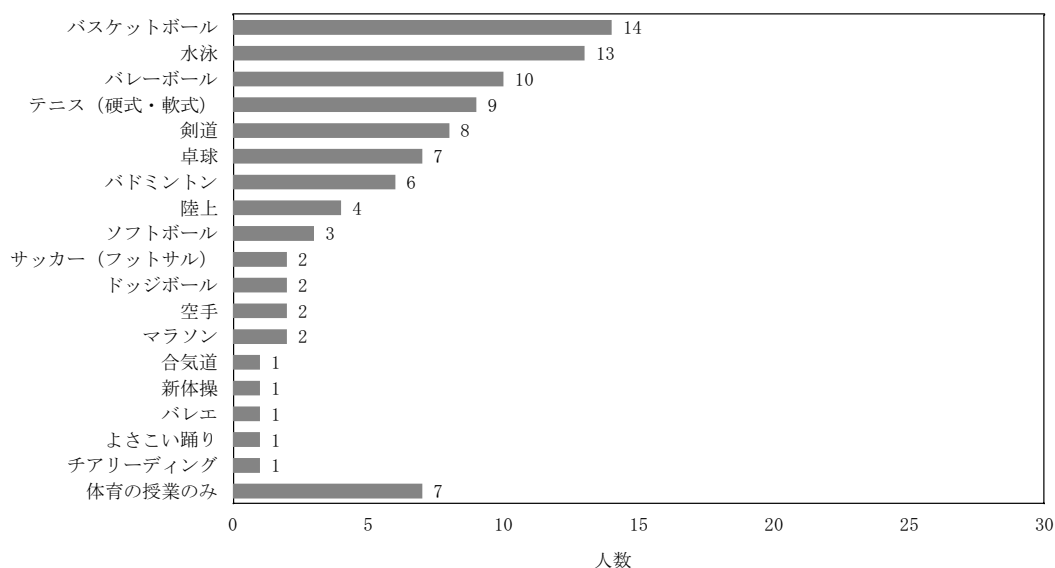


図2 女子学生が短大入学時までに行ってきた継続的な運動経験（2010年度）

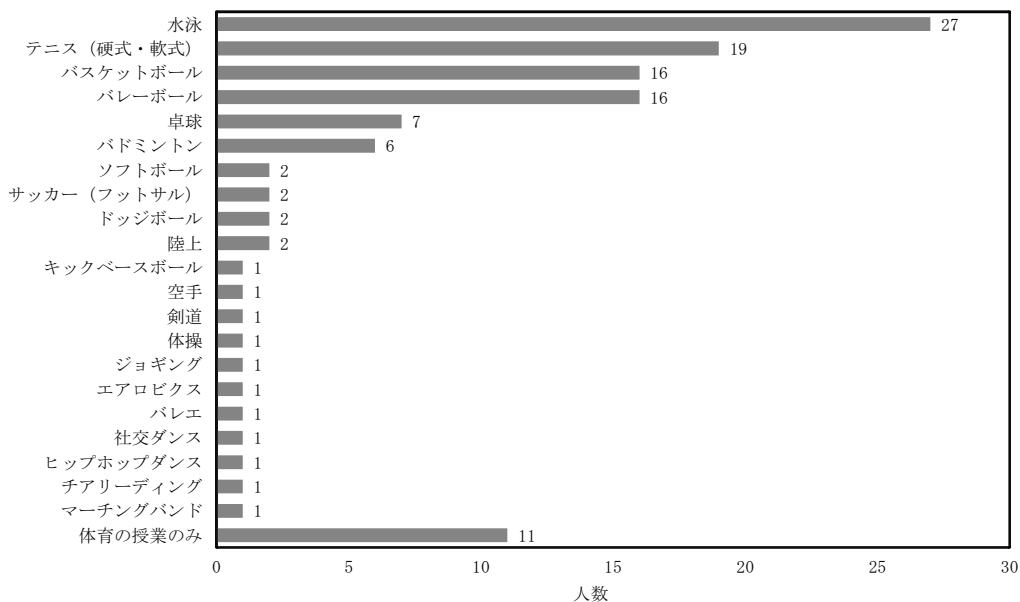


図3 女子学生が短大入学時までに行ってきた継続的な運動経験（2011年度）

調査時期は2011年10月及び2012年10月、有効回答者数は2011年度77名、2012年度57名であった。回答方法は選択回答方式による。

2011年度入学の女子学生については、運動部やスポーツクラブ等に所属している学生は2名（2.6%）であり、運動部やスポーツクラブ等に所属していない学生は75名（97.4%）であった。運

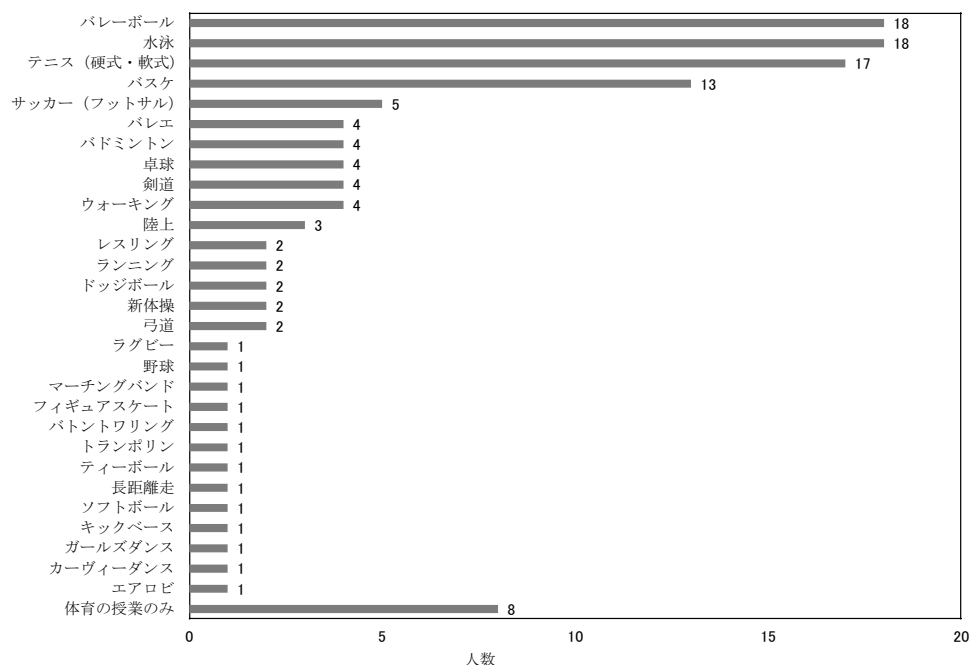


図4 女子学生が短大入学時までに行ってきた継続的な運動経験（2012年度）

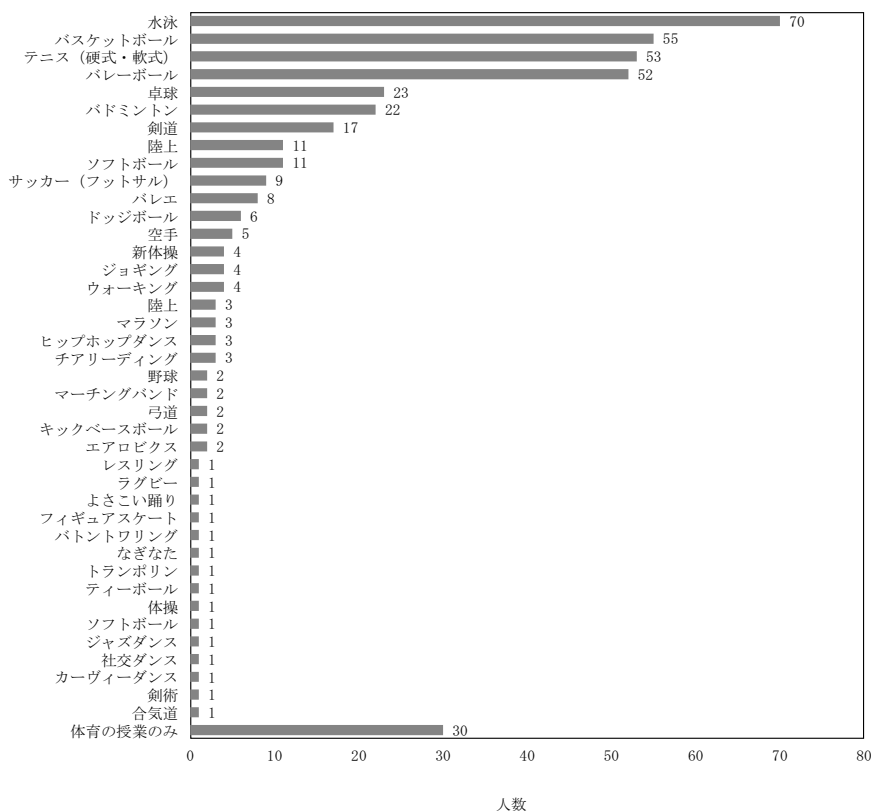


図5 女子学生が短大入学時までに行ってきた継続的な運動経験（2009年度～2012年度）

動部やスポーツクラブ等において、定期的かつ十分な身体活動を実施できる環境にある学生がほとんどいないことが示された。

次に、2012年度入学の女子学生については、短期大学入学以降、運動部やスポーツクラブ等に所属している学生は23名（40.4%）であり、運動部やスポーツクラブ等に所属していない学生は34名（59.6%）であった。運動部やスポーツクラブ等において、定期的かつ十分な身体活動を実施できる環境にある学生が4割程度いることが示された。

2011年度と2012年度を比較すると、2012年度の学生の運動部やスポーツクラブへの所属状況が、2名（2.6%）から23名（40.4%）へと大きく好転していることが分かる。この要因としては、2012年度より、「球技サークル」「テニスサークル」が新設された点が挙げられる。

以上の調査結果をまとめたものを図6～図7に示す。

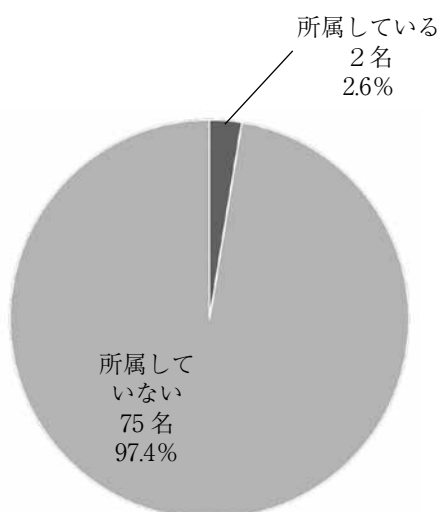


図6 女子学生の運動部やスポーツクラブへの所属状況（2011年度）

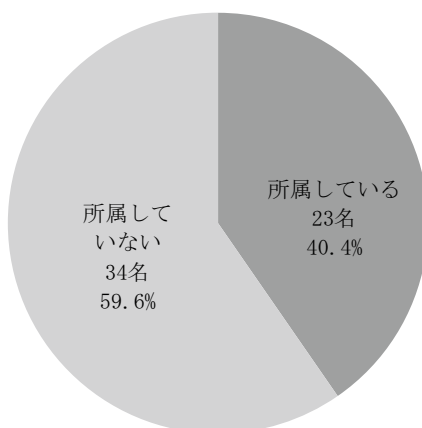


図7 女子学生の運動部やスポーツクラブへの所属状況（2012年度）

さらに、2011 年度においては、体育の授業以外での 1 日の運動・スポーツ実施状況に関しては、「ほとんど毎日（週 3 回以上）」3 名（3.9%）、「ときどき（週 1～2 回程度）」14 名（18.2%）、「ときたま（月 1～3 回程度）」18 名（23.4%）、「実施していない」42 名（54.5%）という結果であった。2011 年度入学生は、短期大学入学後、半数以上の学生が体育の授業以外で運動やスポーツを行っていないことが判明した。

一方、2012 年度入学の女子学生については、体育の授業以外での 1 日の運動・スポーツ実施状況が、「ほとんど毎日（週 3 回以上）」3 名（5.3%）、「ときどき（週 1～2 回程度）」21 名（36.8%）、「ときたま（月 1～3 回程度）」16 名（28.1%）、「実施していない」17 名（29.8%）であった。2012 年度入学生は、約 3 割の学生が体育の授業以外で運動やスポーツを行っていないことが判明した。

2011 年度と 2012 年度を比較すると、「ほとんど毎日（週 3 回以上）」が 2011 年度 3 名（3.9%）から 2012 年 3 名（5.3%）、「ときどき（週 1～2 回程度）」が 2011 年度 14 名（18.2%）から 21 名（36.8%）、「ときたま（月 1～3 回程度）」が 2011 年度 18 名（23.4%）16 名（28.1%）と全体に占める割合としてはいずれも上昇傾向で推移している。一方で体育の授業以外で運動やスポーツを全く実施していない者が、2011 年度 42 名（54.5%）から 17 名（29.8%）へと大幅に減少していることが分かる。これにより、前述した「球技サークル」「テニスサークル」での活動が、週 1 回程度の継続的な運動経験へと繋がっていることが明らかになった。

以上の調査結果をまとめたものを図 8～図 9 に示す。

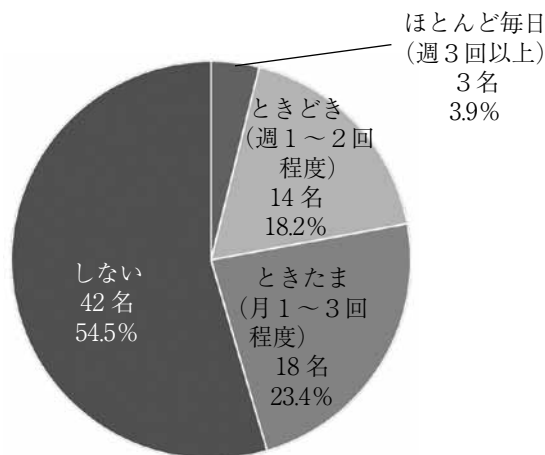


図 8 女子学生の 1 日の運動・スポーツ実施状況（2011 年度）

さらに、2011 年度において、体育の授業以外での 1 日の運動・スポーツ実施時間に関しては、「2 時間以上」2 名（2.6%）、「1 時間以上 2 時間未満」4 名（5.2%）、「30 分以上 1 時間未満」8 名（10.4%）、「30 分未満」63 名（81.8%）との結果となった。1 日の運動実施時間が 30 分未満であると答えた学生が、8 割以上を占めている。

一方、2012 年度においては、体育の授業以外での 1 日の運動・スポーツ実施時間に関しては、「2 時間以上」2 名（3.7%）、「1 時間以上 2 時間未満」3 名（5.6%）、「30 分以上 1 時間未満」14 名（24.9%）、「30 分未満」35 名（64.8%）といった結果となった。1 日の運動実施時間が 30 分未満であると答

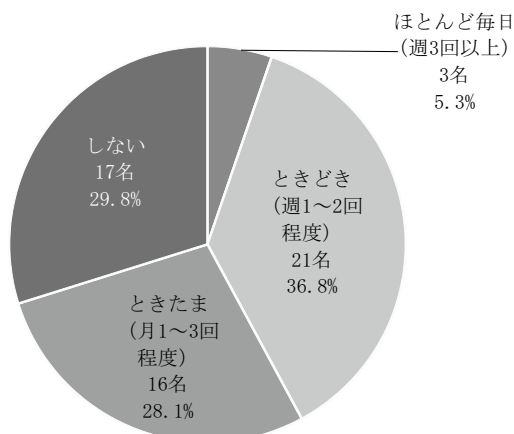


図9 女子学生の1日の運動・スポーツ実施状況 (2012 年度)

えた学生が、6割以上を占めている。

2011 年度と 2012 年度を比較すると、「30 分以上 1 時間未満」が 2011 年度 8 名（10.4％）から 2012 年度 14 名（24.9％）へと全体に占める割合としては倍増している。一方で「30 分未満」の学生は 2011 年度 63 名（81.8％）から 2012 年度 35 名（64.8％）へと減少傾向にあることが分かる。

これにより、前述した「球技サークル」「テニスサークル」での活動が、週 1 回 2 時間程度の継続的な運動経験へと結びついていることが明らかになった。

以上の調査結果をまとめたものを図 10 ～図 11 に示す。

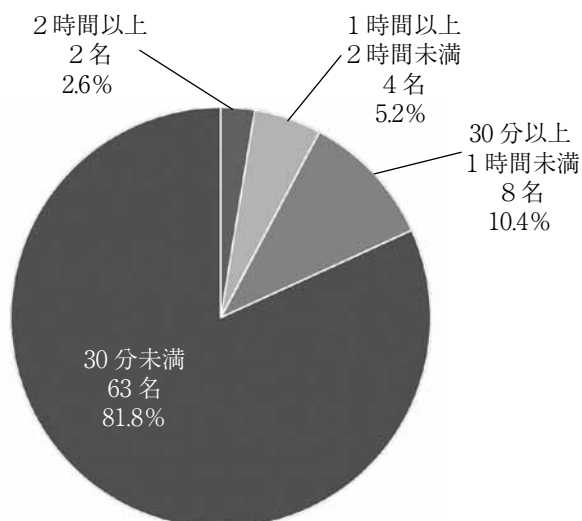


図 10 女子学生の1日の運動・スポーツ実施時間 (2011 年度)

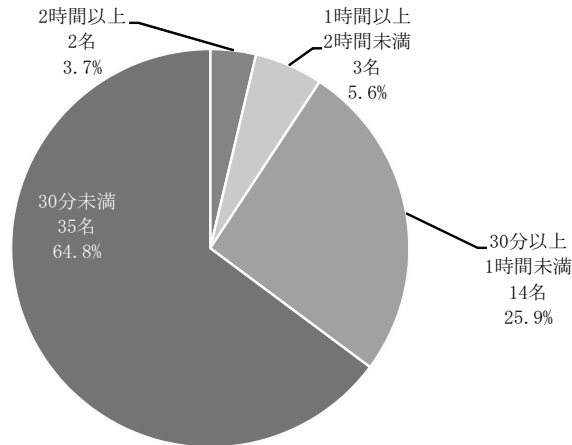


図11 女子学生の1日の運動・スポーツ実施時間（2012年度）

さらに、短期大学入学以降も継続している運動について、自由記述方式により質問紙調査を行った。調査対象は、「球技サークル」「テニスサークル」が開設される以前の2009年度～2012年度入学の18歳～19歳の女子学生、有効回答者数は2012年73名、2011年84名、2010年度57名、2009年度45名、計186名である。調査時期はいずれの年度も4月に実施し、回答方法は自由記述方式による。

4年間のデータを統合したところ、女子学生が短期大学入学以降も継続している運動は、「ジョギング」6名（2.3%）、「ビリーズブートキャンプ^v」5名（1.9%）、「ウォーキング」4名（1.5%）、「バスケットボール」3名（1.2%）、「バレーボール」3名（1.2%）、「Wii Fit^{vi}」3名（1.2%）、「筋肉トレーニング」2名（0.8%）等であった。短期大学入学時までに行ってきた運動種目の中で上位を占めていた「バスケットボール」、「テニス」、「バレーボール」等の種目は全体の1割程度の割合にとどまっている。

一方で、野外で自由に行える「ジョギング」や「ウォーキング」、広いスペースや器具を必要とせず自宅でも実践可能な「ビリーズブートキャンプ」「Wii Fit」「筋肉トレーニング」等のエクササイズが上位にみられることが明らかになった。

年度別の調査結果をまとめたものを図12～図15に示す。また、4年間のデータを統合したものを図16に示す。

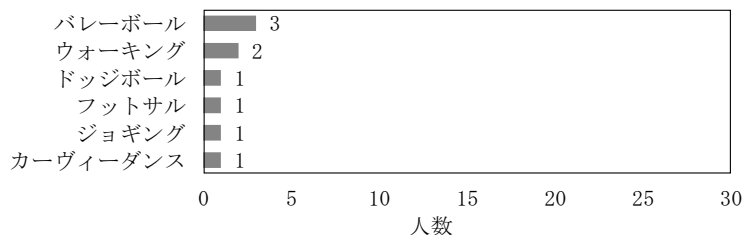


図12 女子学生が短大入学後も継続している運動（2012年度）

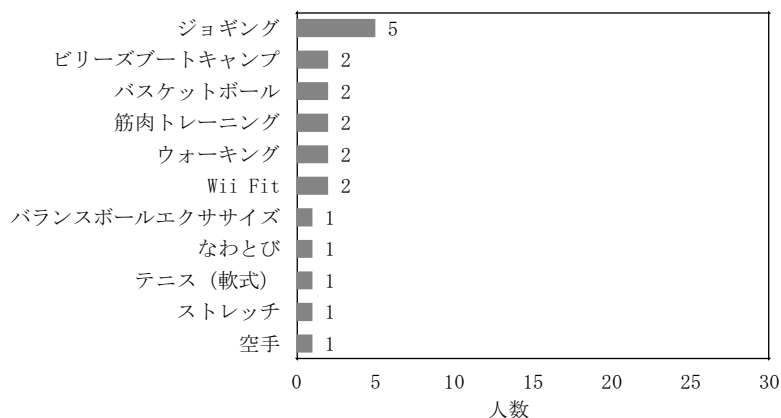


図 13 女子学生が短大入学後も継続している運動（2011 年度）

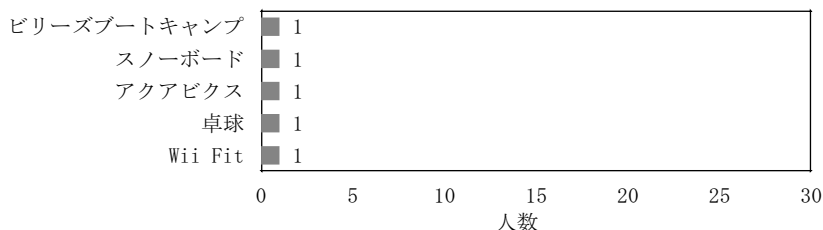


図 14 女子学生が短大入学後も継続している運動（2010 年度）

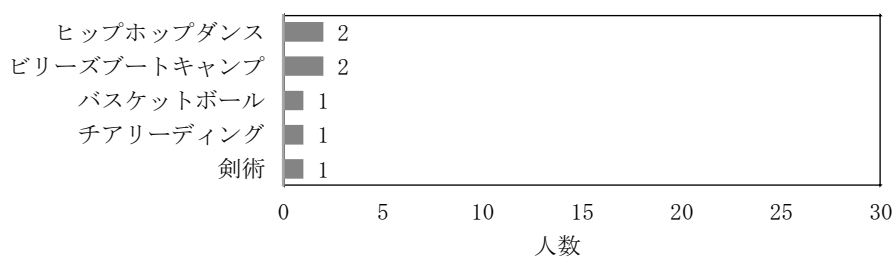


図 15 女子学生が短大入学後も継続している運動（2009 年度）

一方で、2012 年より開設された「球技サークル」「テニスサークル」の運動状況を把握するために、サークルに所属する学生に限定して質問紙調査を実施した。有効回答数は 20 である。調査項目は、「所属しているサークル名」、「所属しているサークルの運動・スポーツ種目」、「所属しているサークルの運動・スポーツ実施状況」、「所属しているサークルの運動・スポーツ実施時間」である。調査対象は、2012 年度入学の 18 歳～19 歳の女子学生、調査時期は 2012 年 1 月、有効回答者数は 20 名であった。回答方法は選択回答方式による。

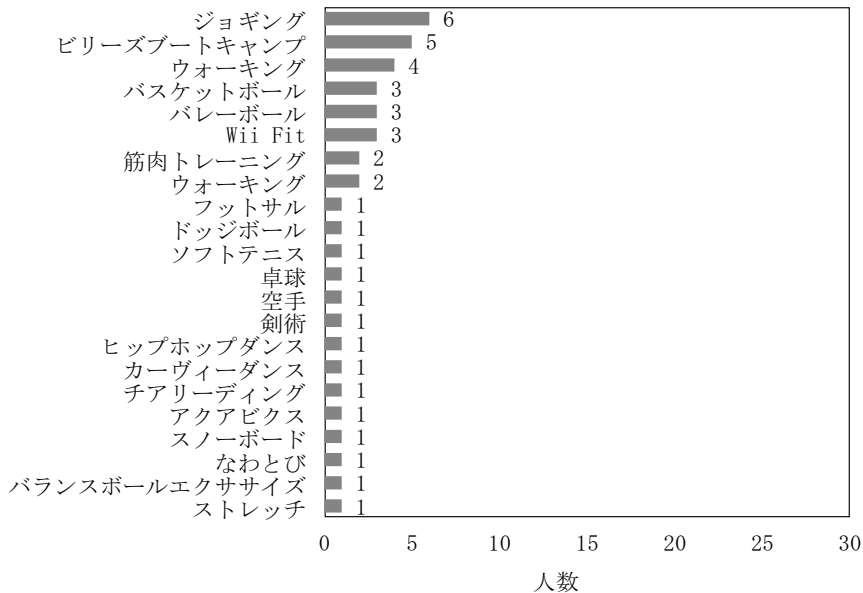


図 16 女子学生が短大入学後も継続している運動（2009 年度～ 2012 年度）

この調査によると、運動・スポーツの種目については、「球技サークル」では、「バスケットボール」「バレーボール」「フットサル」であり、「テニスサークル」では「軟式テニス」である。

さらに、「所属しているサークルの運動・スポーツ実施状況」、「所属しているサークルの運動・スポーツ実施時間」について、球技サークルとテニスサークルのデータを、運動系サークルとして統合したものを、以下の図 17～図 18 に示す。

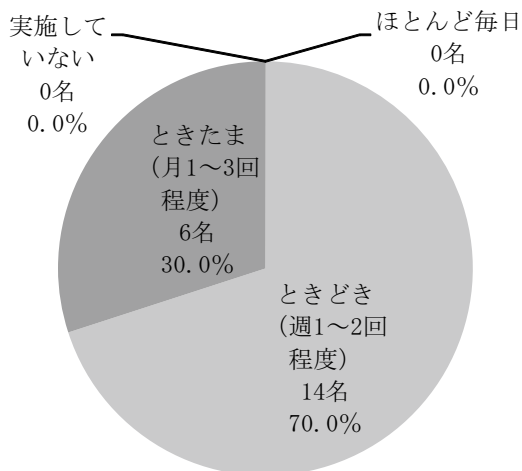


図 17 運動系サークルにおける運動・スポーツ実施状況（2012 年度）

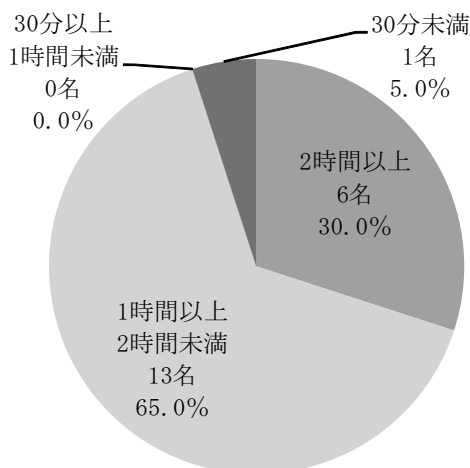


図 18 運動系サークルにおける運動・スポーツ実施時間（2012 年度）

以上の結果は、サークルが開設される 2011 年度以前の女子学生の運動状況と比較して、サークルに所属する女子学生は、運動を行う回数が増加し、運動時間も増加していることを示唆している。これにより、「球技サークル」や「テニスサークル」といった運動サークルでの活動は、日常生活の中で運動の機会を得にくい女子学生にとって、体育館フロアや学内テニスコート等の広いスペースを利用して運動・スポーツに打ち込むことのできる貴重な場となっており、定期的かつ継続的な運動経験へと結びついている状況が見出された。

また、サークルに所属していない学生にとっては、継続的な運動の経験は体育の授業以外では困難であり、1 年生全員が週 2 回、1 回 90 分受講する体育の授業における運動経験は、重要な意味を持つ可能性が示唆された。

次に、女子学生の「小学校・中学校・高校における体育の好き嫌い」に関する調査結果を示す。調査対象は、2011 年度入学及び 2012 年度入学の 18 歳～19 歳の女子学生、調査時期は 2011 年 5 月及び 2012 年 5 月、有効回答者数は 2011 年度 84 名、2012 年度 73 名であった。回答方法は選択回答方式による。

調査の結果、2011 年度入学生について、小学校の体育に関しては「大好き」26 名（31.0%）、「好き」25 名（29.8%）、「普通」17 名（20.2%）、「嫌い」9 名（10.7%）、「大嫌い」7 名（8.3%）、中学校の体育に関しては「大好き」25 名（29.8%）、「好き」23 名（27.4%）、「普通」24 名（28.6%）、「嫌い」5 名（6.0%）、「大嫌い」7 名（8.3%）、高校の体育に関しては「大好き」30 名（35.7%）、「好き」26 名（31.0%）、「普通」18 名（21.4%）、「嫌い」4 名（4.8%）、「大嫌い」6 名（8.3%）となった。

一方、2012 年度入学生については、小学校の体育に関しては「大好き」19 名（26.0%）、「好き」17 名（23.3%）、「普通」18 名（24.7%）、「嫌い」13 名（17.8%）、「大嫌い」6 名（8.2%）、中学校の体育に関しては「大好き」23 名（31.5%）、「好き」16 名（21.9%）、「普通」21 名（28.8%）、「嫌い」8 名（11.0%）、「大嫌い」5 名（6.8%）、高校の体育に関しては「大好き」28 名（38.4%）、「好き」22 名（30.1%）、「普通」16 名（21.9%）、「嫌い」5 名（6.8%）、「大嫌い」2 名（2.7%）となった。

2011 年度入学生については、体育の授業を「嫌い」あるいは「大嫌い」と答えた学生、すなわち「体

育嫌い」の学生は、小学校で 16 名 (19.0%)、中学校で 12 名 (14.3%)、高校で 10 名 (11.9%) であった。2012 年度入学生については、体育の授業を「嫌い」あるいは「大嫌い」と答えた学生、すなわち「体育嫌い」の学生は、小学校で 19 名 (26.0%)、中学校で 13 名 (17.8%)、高校で 7 名 (9.6%) であった。

2011 年度入学生は約 2 割の学生が、2012 年度入学生は 3 割近くの学生が、小学校においては「体育嫌い」であったと回答し、その後中学校、高校と徐々に「体育嫌い」の学生の割合は減少していくものの、短期大学入学時まで、約 1 割の学生が、「体育嫌い」を払拭できていない可能性が示唆された。

結果をまとめたものを図 19～図 20 に示す。

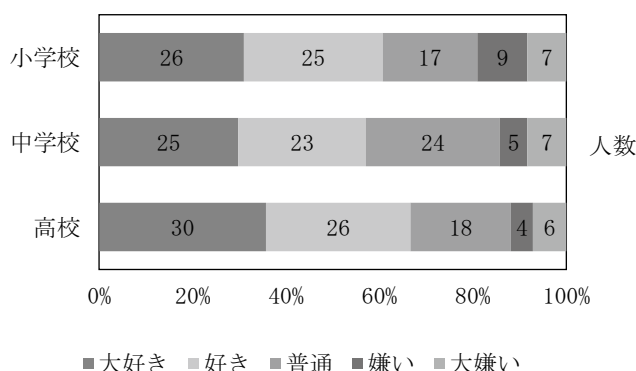


図 19 小学校・中学校・高校における体育の好き嫌い (2011 年度)

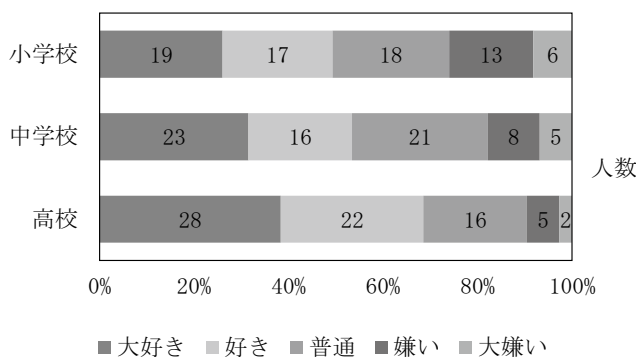


図 20 小学校・中学校・高校における体育の好き嫌い (2012 年度)

4. 女子短期大学における授業実践

(1) 授業科目及びその履修学年

体育指導者は現在 1 名 (2009 年度は 2 名) である。2009 年度から 2012 年度までに I 女子短期大学において開講された体育関連の授業 (実技・講義・演習) は、以下の表 1 のとおりである。

表1 開講された体育関連の授業一覧

年度	科目名	学年	学期
2009 年度	健康とスポーツ	1 学年	通年
	基礎体育	1 学年	通年
	身体表現	2 学年	前期
	幼児体育Ⅰ	2 学年	前期
	幼児体育Ⅱ	2 学年	後期
2010 年度	健康とスポーツ	1 学年	通年
	基礎体育	1 学年	通年
	身体表現	2 学年	前期
	幼児体育Ⅰ	2 学年	前期
	幼児体育Ⅱ	2 学年	後期
2011 年度	健康とスポーツ	1 学年	通年
	保育表現技術（身体Ⅰ）	1 学年	前期
	保育表現技術（身体Ⅱ）	1 学年	後期
	身体表現	2 学年	前期
	幼児体育Ⅰ	2 学年	前期
2012 年度	健康とスポーツ	1 学年	通年
	保育表現技術（身体Ⅰ）	1 学年	前期
	保育表現技術（身体Ⅱ）	1 学年	後期
	幼児体育	2 学年	後期

※筆者が担当した授業科目は網かけ部分で示してある

上記の科目以外で、授業の一部分に体育系の内容を含む科目としては、「ゼミナール」（2 学年・通年）、「総合表現」（2 学年・後期）、「教職実践演習」（2 学年・後期）がある。

(2) 授業内で取り扱う身体活動の概要

2011 年度の「保育表現技術（身体Ⅰ・Ⅱ）」において導入した身体活動を表2に示す。

表2 2011 年度授業内で取り扱った身体活動の概要

2011 年度 保育表現技術（身体Ⅰ・Ⅱ） 授業内容		
講	義	プリント「現場ですぐに使えるからだ遊び」、テキスト「幼児体育教本」
からだほぐし運動		フロアストレッチ、エアロビ、コアリズム、2人組指圧マッサージ、リンパマッサージ、各種エクササイズ（骨盤矯正、便秘改善、月経痛改善、O脚改善）、筋トレ、ベビーポジション、いろいろな座り方、からだでごあいさつ、もしもし電話、おしり歩き、大きくなって歩こう、ちいさくなって歩こう、からだでお絵かき、芝生であそぼう等
鬼ごっこ系あそび		色鬼、氷鬼、手つなぎ鬼、たけのこ鬼、バナナ鬼、地藏鬼、ケイドロ、しっぽ取り等
2人組みあそび		ぎっこんぱったん、V字バランス、W字バランス、地藏倒し、背中合わせおんぶ、背中合わせ立ち上がり、目閉じお散歩、手押し車、Yesマン、Noマン等
グループあそび		うつ伏せダッシュ、人間知恵の輪、動きのしりとり、足あとぺったんこ、馬跳び、じゃんけん列車、モップリレー等
模倣・表現あそび		まねっこポーズ、動物ごっこ、ホネホネマン、タコ人間、洗濯機ごっこ、いろいろ卵、卵からチョウへ、フォークとスプーン、鏡のように動いてみよう等

リズムあそび	ミュージックゲーム、ホイッスルゲーム、世界の言葉でこんにちば、太鼓に合わせて、カスタンネットに合わせて、アルプス一万尺、ジェンカ、ジンギスカン、リズムとステップ、8カウントで小さく・大きく、あんたがたどこさ、アルゴリズム行進等
ボールあそび	頭でバランス、ころころストップ、ころころトンネル、ジグザグドリブル、やわらかボーリング、転がしドッジボール、大玉送り、大玉転がし等
フープあそび	フープ回し（腰・腕・脚）、フープ投げ、フープ転がし、けんけんば、電車ごっこ、輪ぐり競争、フープ縄跳び等
ロープあそび	なわとび、大縄跳び、ヘビ跳び、波跳び、おおなみなみ、ゆうびんやさん、いろはにこんべいとう、リンボーダンス、綱引き、おすもうごっこ、ロープでお絵かき、2人3脚、お釣り、カウボーイ等
新聞紙あそび	お布団、お座布団、お帽子かぶって、じゃんけんゲーム、チョウになって、カンガルーになって、新聞紙スリッパ、新聞紙くつついた、ちゃんばら、新聞紙の海で泳ごう、新聞紙になってみよう等
大型遊具	大型トランポリン等
レクリエーション	ハワイアンラケット、輪投げ、フリスビー等
マットあそび	おむすびコロリン、伸びて縮んで、サンドイッチ横転、けんけん相撲、ベルトコンベア、チョコバナナ、ブリッジくぐり等
ダンス表現	ダンス鑑賞（バレエ、ベリーダンス、モダンダンス）、バレエ（手足のポジション、基礎レッスン）、フラダンス（ハンドモーション、基礎レッスン）、ベリーダンス（基礎レッスン、ベリーダンス作品“Habbousou”）、HIPHOPダンス（基礎レッスン）、水戸黄門まつりダンス「ごきげん水戸さん」「黄門ばやし」、マイケルジャクソンダンス“Beat it”、幼児向けダンス「マルマルモリモリ」、「ミッキーマウスマーチ」等
ダンス創作	グループダンス創作、ステージ発表（「ワルツィング・キャット」に合わせた幼児向けダンス）

次に、2012年度（2012年12月まで）の「保育表現技術（身体Ⅰ・Ⅱ）」において導入した身体活動を表3に示す。

表3 授業内で取り扱った身体活動の概要

2012年度 保育表現技術（身体Ⅰ・Ⅱ） 授業内容	
講義	プリント「現場ですぐに使えるからだ遊び～216種類の運動遊び～」 「年齢ごとの運動機能発達の特徴」、テキスト「保育と幼児期の運動あそび」
からだほぐし運動	フロアストレッチ、エアロビ、コアリズム、2人組指圧マッサージ、リンパマッサージ、ツボ押し、各種エクササイズ（骨盤矯正、便秘改善、月経痛改善、O脚改善）、筋トレ、ベビーポジション、いろいろな座り方、からだでごあいさつ、もしもし電話、おしり歩き、大きくなって歩こう、小さくなって歩こう、からだでお絵かき、あんよの下からこんにちば、芝生であそぼう等
鬼ごっこ系あそび	手つなぎ鬼、たけのこ鬼、バナナ鬼、地藏鬼、トンネル鬼、しっぽ取り、ガムテープ鬼、おおかみさん今何時、ころころ等
2人組みあそび	ぎっこんぱったん、V字バランス、W字バランス、地藏倒し、背中合わせおんぶ、背中合わせ立ち上がり、目閉じお散歩、手押し車、逆手押し車、Yesマン、Noマン等
グループあそび	わんわん競争、うつ伏せダッシュ、人間知恵の輪、足あとべったんこ、ケンケンずもう、ホイッスルポーズゲーム、馬跳び、エアーボール、宇宙ステーションゲーム、モップリレー、出前ですよゲーム、キョンシー競争等
模倣・表現あそび	動物ごっこ、おもち、変身歩き、ホネホネマン、タコ人間、人形ごっこ、洗濯機ごっこ、いろいろ卵、卵から生まれる、フォークとスプーン、鏡のように動いてみよう等
リズムあそび	ミュージックゲーム、ジェンカ、ジンギスカン、リズムとステップ、あんたがたどこさ、アルゴリズム行進等
ボールあそび	ハイハイ追いかけて、フープにポイッ、頭でバランス、ころころストップ、ころころトンネル、転がしドッジボール、大玉送り、大玉転がし、ボールをかわせ、からだでボール運び等

フープあそび	フープ回し（腰・腕・脚）、フープ投げ、フープ転がし、けんけんば、電車ごっこ、輪くぐり競争、フープ跳び、フープ輪投げ等
ロープあそび	なわとび、大縄跳び、増やし跳び、ダブルダッチ、ヘビ跳び、波跳び、おおなみこなみ、ゆうびんやさん、いろはにこんぺいとう、リンボーダンス、引っぱりっこ、おすもうごっこ、ロープでお絵かき、ぐるぐる跳び、ひとりぐるぐる跳び、2人3脚、お魚釣り、おいも掘り、コマ回し、頭にのせて、曲に合わせて跳ぼう等
新聞紙あそび	お布団、お座布団、お帽子かぶって、じゃんけんゲーム、チョウになって、カンガルーになって、新聞紙スリッパ、新聞紙くつついた、ちゃんばら、ボール運びリレー、足裏で新聞紙ボイッ、足で新聞紙ビリビリ、新聞紙の海で泳ごう、新聞紙になってみよう等
道 具 あ そ び	フリスビー、ハワイアンラケット、ペットボトルたおして・おこして、風船ジャンプ、風船のせて、風船で静電気、風船運びリレー、風船妊婦さんリレー、風船バレー、風船へそつかみ、風船あおぎ、イス取りゲーム、フルーツバスケット、ハンカチ落とし、巨大トランプ等
大 型 遊 具	大型トランポリン等
マ ッ ト あ そ び	どんぐりころころ、おむすびコロリン、伸びて縮んで、サンドイッチ横転、けんけん相撲、ベルトコンベア、チョコバナナ、ブリッジくぐり、おいも掘り、マットにくつついて等
ダ ン ス 表 現	ダンス鑑賞（バレエ、ベリーダンス、モダンダンス）、バレエ（手足のポジション、基礎レッスン）、フラダンス（ハンドモーション、基礎レッスン）、ベリーダンス（基礎レッスン、ベリーダンス作品“Habbousou”）、HIPHOPダンス（基礎レッスン）、水戸黄門まつりダンス「ごきげん水戸さん」「黄門ばやし」、AKBダンス「真夏のsounds good!」、幼児向けダンス「ミッキーマウスマーチ」等
ダ ン ス 創 作	グループダンス創作、「春」の身体表現、ステージ発表（“It's a small world” に合わせた幼児向けダンス）

5. 結果

(1) テキストマイニング分析

「授業の振り返り」における全記述文の抽出語は、2011年度は8914語、2012年度は9094語であった。また、異なり語数は、2011年度は873語、2012年度は892語であった。

2011年度「授業の振り返り」における記述文の中で、出現回数5回以上の抽出語を表4に示す。

また、2012年度「授業の振り返り」における記述文の中で、出現回数5回以上の抽出語を表5に示す。

本研究で行ったテキストマイニング分析により、以下の知見を得た。

2011年度の「授業の振り返り」記述文の中で、20回以上抽出された語は、抽出頻度が高い順に「ダンス」「思う」「楽しい」「遊び」「体」「子ども」「踊る」「自分」「授業」「ベリーダンス」「猫」「たくさん」「使う」「実習」「トランポリン」「表現」「考える」「難しい」「覚える」「創作」の20語であった。その中で、身体活動や心身の表現に関する語は「ダンス」「楽しい」「遊び」「体」「子ども」「踊る」「授業」「ベリーダンス」「実習」「トランポリン」「表現」「考える」「難しい」「覚える」「創作」である。

2012年度の「授業の振り返り」記述文の中で、20回以上抽出された語は、抽出頻度が高い順に「ダンス」「思う」「楽しい」「体」「自分」「遊び」「ストレッチ」「ベリーダンス」「授業」「残る」「学ぶ」「表現」「頑張る」「踊る」「たくさん」「子ども」「柔らかい」「心」「出来る」「黄門」「少し」「エクササイズ」の22語であった。その中で、身体活動や心身の表現に関する語は「ダンス」「楽しい」「体」「遊び」「ストレッチ」「ベリーダンス」「授業」「学ぶ」「表現」「頑張る」「踊る」「子ども」「柔らかい」「心」「出来る」「黄門」「エクササイズ」である。

また、学生の「授業の振り返り」記述文には、いずれの年度においても「楽しい」「好き」「大好き」「頑

表4 「授業の振り返り」における抽出語一覧（2011年度）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
ダンス	136	動かす	15	取り組む	9
思う	107	感じる	14	先生	9
楽しい	100	好き	14	反省	9
遊び	60	分かる	14	HIPHOP	8
体	41	マット	13	観る	8
子ども	37	頑張る	13	グループ	7
踊る	36	気持ち	13	ゲーム	7
自分	35	踊れる	13	リズム	7
授業	35	良い	13	技術	7
ベリーダンス	31	新聞紙	12	合わせる	7
猫	30	大変	12	前	7
たくさん	29	遊ぶ	12	大好き	7
使う	28	1つ	11	楽しむ	6
実習	28	印象	11	協力	6
トランポリン	26	運動	11	思える	6
表現	25	教える	11	小さい	6
考える	21	実際	11	体育	6
難しい	21	少し	11	縄跳び	6
覚える	20	人	11	アイディア	5
創作	20	バレエ	10	アルゴリズム体操	5
マイケル	19	フラダンス	10	テレビ	5
友達	19	経験	10	家	5
エクササイズ	18	最初	10	気	5
学ぶ	18	使える	10	苦手	5
保育	18	初め	10	座る	5
いろいろ	17	恥ずかしい	10	実演	5
残る	17	動き	10	取り入れる	5
知る	17	遊べる	10	早い	5
今	16	練習	10	多い	5
初めて	16	違う	9	動く	5
振付	16	見る	9	内容	5
一緒	15	行く	9	発表	5

※なお、ポジティブな感情を表す抽出語は濃色の網掛け、ネガティブな感情を表す抽出語は淡色の網掛けで示す。

張る」「頑張れる」「良い」「楽しむ」「楽しめる」といったポジティブな感情を表す語と、相反する「難しい」「大変」「恥ずかしい」「苦手」といったネガティブな感情を表す語がみられることが示された。

次に、これらのネガティブな語とポジティブな語との関連性を明らかにするために、全記述文から「楽しい」「好き」「頑張れた」「楽しめた」といったポジティブな語と、「難しい」「大変」「恥ずかしい」「苦手」といったネガティブな語を手作業で抽出し、語の関連性を調査した。その結果、「難しい」「大変」「恥ずかしい」「苦手」等から「楽しい」「好き」「頑張れた」「楽しめた」等への印象の変化の構図、すなわち、ダンスや身体表現を含む身体活動への苦手意識が改善されたという内容の記述が多く認められた。

表5 「授業の振り返り」における抽出語一覧 (2012 年度)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
ダンス	102	友達	14	現場	7
思う	95	フラダンス	13	出す	7
楽しい	90	良い	13	大型	7
体	66	難しい	13	大切	7
自分	44	水戸	12	ボランティア	6
遊び	40	動き	12	楽しむ	6
ストレッチ	39	エアロビ	11	筋肉	6
ベリーダンス	38	印象	11	考える	6
授業	38	硬い	11	使える	6
残る	32	踊れる	11	周り	6
学ぶ	29	グループ	10	春	6
表現	29	石巻	10	食べる	6
頑張る	28	発表	10	全然	6
踊る	28	一緒	9	分かる	6
たくさん	25	家	9	サークル	5
子ども	25	協力	9	リズム	5
柔らかい	25	教える	9	ロープ	5
心	25	最後	9	黄門	5
保育	24	集団	9	楽しめる	5
出来る	23	新聞紙	9	感じる	5
黄門	22	声	9	頑張れる	5
少し	22	先生	9	後期	5
エクササイズ	20	体育	9	好き	5
最初	19	大変	9	行う	5
覚える	18	恥ずかしい	9	行く	5
動かす	18	反省	9	実際	5
練習	18	違う	8	出る	5
トランポリン	16	汗	8	笑顔	5
運動	16	技術	8	振付	5
初めて	16	足	8	想像	5
身体	16	続ける	8	多い	5
見る	15	知る	8	大きい	5
今	15	特に	8	跳ぶ	5
使う	15	勉強	8	動く	5
前	15	毎回	8	本番	5
創作	15	遊ぶ	8	毎日	5
色々	14	嬉しい	7	遊べる	5
人	14	苦手	7		

※なお、ポジティブな感情を表す抽出語は濃色の網掛け、ネガティブな感情を表す抽出語は淡色の網掛けで示す。

具体的には、2011 年度の自由記述方式の「授業の振り返り」記述文において、「ダンス」等の身体表現への苦手意識に変化がみられたという内容の記述をした学生の割合は、78 名中 27 名 (34.6%) であった。結果を以下の図 21 に示す。

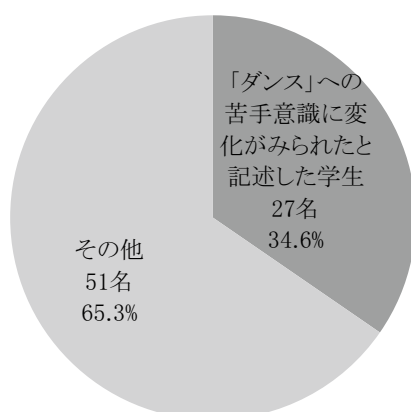


図 21 身体表現への苦手意識に変化がみられたという内容の記述をした学生の割合

さらに、「授業の振り返り」データにおいて、出現頻度の高い抽出語の関連性を可視化するために、共起ネットワーク図を作成し、以下の図 22～図 23 に示す。抽出する語は出現回数 5 回以上の語とし、描画数は 60 に設定する。また、図中では、出現数の多い語ほど大きな円で描画し、円同士は強い共起関係ほど太い線で描画するものとする。

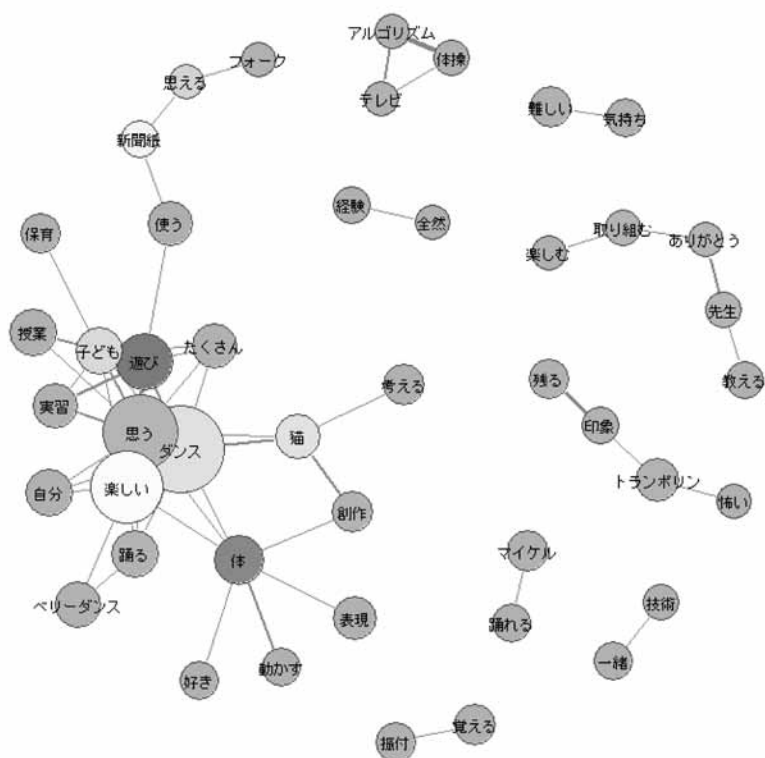


図 22 頻出語の共起ネットワーク図 (2011 年度)

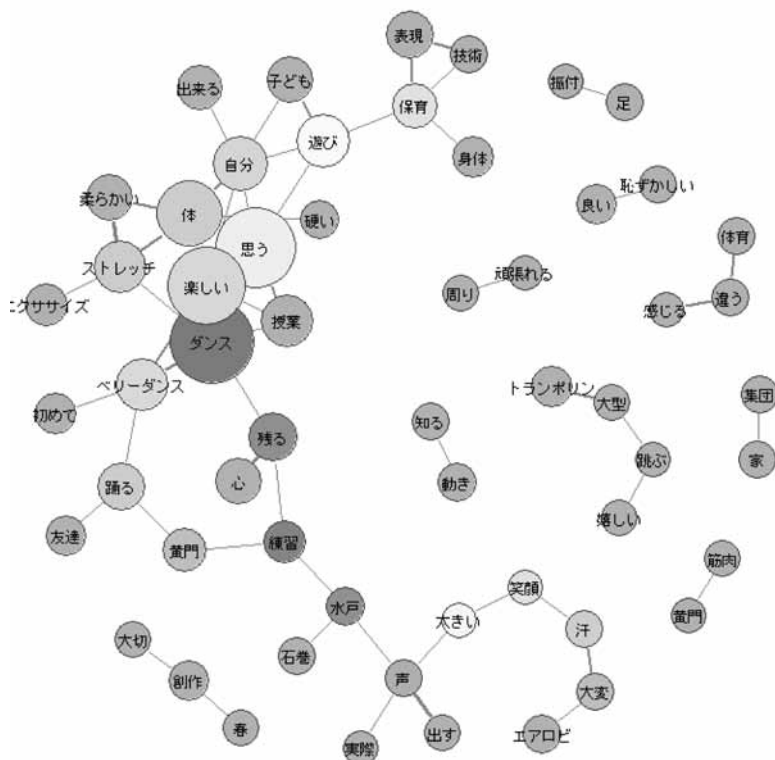


図 23 頻出語の共起ネットワーク図 (2012 年度)

6. 考察

筆者は、学生が身体活動を通じて他者とコミュニケーションをとりながら、自らの心身を見つめ直し、身体的感性を高めていけるよう、様々なアプローチからの実技の授業を行っている。

また、柔軟でしなやかな「ひらいた身体」であることのメリットを認識させ、多様なストレッチやからだ遊びを紹介することで、身体活動への主体的なモチベーションの向上を図っている。

本稿で行ったテキストマイニング分析により、学生の「保育表現技術(身体Ⅰ)」 「保育表現技術(身体Ⅱ)」における「授業の振り返り」記述文には、「楽しい」「楽しむ」「楽しめる」「出来る」「嬉しい」「頑張る」「頑張れる」「良い」「好き」「大好き」といった快感情を表す語が多くみられることが示された。一方、「難しい」「大変」「恥ずかしい」「苦手」のネガティブな4語は、2年間の授業を通じて多くみられる抽出語であった。

これらのネガティブな語とポジティブな語との関連性については、「ダンスに全く興味がなかったが、今では大好きになった」「自分の体を使って表現する恥ずかしさと戦ったが、皆で協力して1つの作品を創るのも楽しいなと思えるようになった」「全く経験がなかったので心配だったが体で表現することの楽しさ、素晴らしさを学んだ」「ダンスは苦手だと思っていたが、間違えても楽しく表現することが大事という先生の言葉で自分なりに楽しく表現できた」といった、ダンスや身体表現を含む身体活動への苦手意識が改善されたという旨の記述が多く認められた。加えて、図21で示したように、選択回答方式でない自由記述の回答文において、3割以上の学生が身体表

現の苦手意識が改善されたという内容の記述をしたことから、学生の身体表現力の向上に関してある一定程度の効果が認められたと言えるだろう。

図 22～図 23 の共起ネットワーク図を作成することにより、2011 年度の「授業の振り返り」からは、「体」を「動か」し「表現」することが「好き」、また「ダンス」や「踊る」ことが「楽しい」といった快感情と結びついている点が明確になった。加えて、「新聞紙」を「使」った「遊び」等、「実習」や「保育」の現場で「子ども」と一緒に行うことのできる「遊び」を「授業」で「たくさん」学ぶことができたといった様子が明らかになった。

また、2012 年度の「授業の振り返り」からは、「授業」内で「初めて」経験した「ベリーダンス」等の「ダンス」を「踊る」のが「楽しい」、本格的な「大型」「トランポリン」で「跳」べたことが「嬉しい」といった快感情と結びついている点が明確になった。加えて、「自分」でも「出来る」「保育」現場での「子ども」との「遊び」を習得できた点、各種「エクササイズ」や「ストレッチ」によって「硬い」「体」が「柔らか」くなった点、高校までの「体育」とは「違って」いたと「感じた」点、さらに、「実際」に「大きい」「声」を「出」して「友達」と「踊」り「水戸」のパワーを「石巻」に届けた「黄門」まつりダンスの練習が「心」に「残」ったといった様子も見出された。

実際に、2011 年度の学生の「授業の振り返り」における回答文には、「自由に表現することの楽しさや、子どもたちと一緒に遊べる遊びを学ぶことができた」「実習でも使えそうな内容ばかりだったので、是非使いたいと思った」「子ども達もできるような楽しい遊びをたくさん学んだので、保育者になったら取り入れたい」といった保育実践力の向上に関する記述や、「ダンスをする楽しみや喜びを感じることができた」「グループの人と創作して踊ることにより、達成感や満足感を味わうことができた」「ダンスは苦手だと思っていたが、自分なりに楽しく表現することができたし、自信にもなった」等の自身の表現力の高まりを実感する旨の記述が複数回答みられた。

また、2012 年度の学生の「授業の振り返り」における回答文には、「グループ遊びや集団遊び、リズム遊びなどは、これから実習に行くときのためにとても参考になった」「長縄や新聞紙遊び、空気の玉を送ろうなどは、こんな遊びができるのだとか、この材料だけでこんなに遊びが広がるのだと驚いたし勉強になった」「保育で使える遊びもたくさん習って、それを工夫して使えるので、教わったものをアレンジしたいと思った」といった保育実践力の向上に関する記述や、「ここを伸ばすとかこういう効果があるんだと毎回毎回新たな発見ができて良かった」「ダンスを覚えることは以前は苦手だったけれど、仲間に教えてもらったりして自分もダンスを覚えることができるのだと、また新たな自分を発見することができた」「身体を使って何かを表現するということは大切に楽しいということを学んだ」「保育の現場でも、表現する力は大切だと思うし、想像力も必要なので、とてもいい勉強になったと思う」等の自身の身体への気づきや表現力の高まりを実感する旨の記述が複数回答以上みられた。

さらに、「体を動かすとモヤモヤしていたことがすっきりしたり、心と体がリラックスできるということを学んだ」といった心身への効果を実感する記述や、「エクササイズやからだほぐし運動は自分も子どもも楽しんでやることができて、集団で遊ぶことは友達の輪を広げるきっかけにもなると思った」「集団で協力して1つの創作を行ったことがとても印象にあって、ダンスのおかげでクラスのみんなとの仲が深まったと感じた」「クラス全体で関わって体を動かすので、みんなとの仲が深まった」「ダンスを通して友達と笑いあったり、2人組あそびではあまり話したことのない

い友達と話すようになったし、この授業を通して友達関係が良くなったと思う」等、授業を通しての人間関係の広がりを示す記述も複数回答以上みられた。

また、「今まで運動は嫌いであり積極的に参加していくことはなかったが、短大のこの授業でやっていた内容は楽しみながらできる運動だったのでよかった」「高校の体育とは違い、子ども向けの遊びや運動があったので、体育が苦手な人にもとてもやりやすかったのではと思う」「1つ踊れるようになるととても楽しくなって、いつの間にか嫌いだったダンスを自分の中で受け入れられるようになり好きになっていた」等、体育嫌い・ダンス嫌いの改善を実感したという内容の記述もみられた。

そして、東日本大震災で甚大な被害を受けた石巻市でのダンス発表に関しては、「練習をしている時に、みんなが石巻の人たちに元気を与えるために真剣に取り組んでいた」「本番では茨女のパワーを石巻の人たちに届けられたことがとても心に残っている」「石巻ボランティアのために練習した黄門ばやしとごきげん水戸さんでは、みんなで声を出し合ったりして、最高の演舞を被災地でやることができた」「皆であそこまで息ピッタリに踊れたのは、たくさん練習を頑張ったからだと思う」といった、達成感や自己充実感を表す記述が多数みられた。

また、2011年度後期に導入したグループでの「猫」の「ダンス」の「創作」では、アイディアを出し合うことで相手の気持ちを知るきっかけとなった様子も示される一方で、自由な身体表現への難しさを払拭できず、創作過程において積極性に欠ける学生の様子もみられた。2012年度においても、「春」をテーマとした「ダンス」の「創作」について、「自分から何かを発言するということが出来なかったので、ダンス創作を通して自分が改善しなければならないことを知ることが出来た」「みんななかなか意見が出なくて時間がなくなって、ギリギリに完成したので、そういう時にしっかり自分の意見を言えれば良かったなと反省している」等、ダンス創作過程における消極的な姿勢を反省点として挙げる学生が少なからずみられた。また、「なかなか案が決まらず難しく感じたが、グループみんなで力を合わせてやれたところが心に残っている」「みんなで意見を出し合って、でもまとまらず大変だったことを良く覚えているが、体だけで春を表現できるのは凄と思った」「桜が散るイメージをしながら体全体を使って見せたことが心に残っている」等、ダンス創作過程における身体を媒介とした他者とのコミュニケーションの難しさを実感しながらも、「印象に残ったこと」として挙げる学生も数多くみられた。

以上のように、「保育表現技術（身体Ⅰ・Ⅱ）」の授業を通して、学生は「保育実践力の向上」「身体への気づき」「身体表現力の高まり」「心身への効果の実感」「人間関係の広がり」「体育嫌い・ダンス嫌いの改善」「達成感や自己充実感」「他者とのコミュニケーションの構築」といった様々な効果を認めていることが明らかになった。

7. 今後の課題

2012年度からは、学生の心身の状態を細やかに把握し、さらに学生自身が毎回の授業を見つめ直す機会を得られるように、「保育表現技術（身体Ⅰ・Ⅱ）」の毎回の授業において、「授業シート（健康カード）」を新たに導入している。この「授業シート（健康カード）」は、毎回の授業のまとめとして、①「心とからだの様子（風邪・月経・腹痛・モヤモヤ等）」②「授業内容（具体的に）」③「心に残ったこと、学んだこと、気づいたこと、挑戦したいこと、感想、質問、要望等」の3つの項目

を、5～10分程度で受講生全員が自由記述で記入するものである。

本稿ではテキストマイニングの分析対象を、2011年度～2012年度の「保育表現技術（身体Ⅰ・Ⅱ）」における最終授業の「授業の振り返り」記述文に限定しているが、今後は、毎回の授業の「授業シート（健康カード）」についても分析を進め、授業内容と学生の心身の状態との関連性をより一層明確にしていきたい。

また、自由記述の質問紙調査である「授業の振り返り」は、誰がどのような回答をしたのかをリアルタイムに把握することで、その後の授業において個々のフィードバックを可能にするというねらいを踏まえ、記名式で行っている。しかしながら、記述した学生が特定されることによって、指導者のねらいに沿った内容を意図的に記述する傾向が高まり、調査の正確性に支障をきたす可能性も否めない。今後は必要に応じて無記名式の質問紙調査を取り入れ、匿名性を保つ工夫も必要となるだろう。

8. まとめ

学生の「授業の振り返り」記述文のテキストマイニング分析により見出された、「保育表現技術（身体Ⅰ・Ⅱ）」での身体活動が受講生にもたらす効果をまとめると、以下のようになる。

- 1 保育実践力の向上
- 2 身体表現力の向上
- 3 身体への気づき
- 4 身体の柔軟性の向上
- 5 心身への効果の実感
- 6 人間関係の広がり
- 7 体育嫌い・ダンス嫌いの改善
- 8 達成感・自己充実感の獲得
- 9 他者とのコミュニケーションの構築

また、現代の女子学生が直面している「身体を見られることに抵抗がある」「人前で表現することが恥ずかしい」といった種々の身体的問題を解消し、子どもの表現をからだ全体で受け止め、支え、共感し、広げることのできる「ひらいた身体」を目指すという授業のねらいに関しては、ある一定程度達成されたものと考察される。

本稿の分析結果を元に、学生の学習意欲がより一層向上するような工夫を授業実践に加え、短期大学における体育授業が、創造的で豊かな子どもの表現を担う保育者として求められる身体的感性を高める一助となるように、今後も実践及び研究を継続していきたい。

参考文献一覧

- 1) 「健康日本 21」最終評価について」、厚生労働省、2011
- 2) 「健康日本 21 実践の手引き」、厚生労働省、2000
- 3) 「新学習指導要領に基づく中学校・高等学校向け「体づくり運動」「体育理論」リーフレット」、文部科学省、2011
- 4) 「平成 22 年度 体力・運動能力調査報告書」、文部科学省、2011
- 5) 内田英二・永田瑞穂・神林勲・武田秀勝「運動習慣の有無が青年期女子学生の運動能力および生活行動に及ぼす影響」、pp.1-8、大正大学研究紀要第 94 輯、2009
- 6) 太田恒義・大矢隆二・伊藤宏・小木しのぶ「小学校体育実技における感想文のテキストマイニング—体育の好き・嫌い」と各属性との関連に着目して—」、pp.63-77、常葉学園大学研究紀要第 31 号、2011
- 7) 大矢隆二・太田恒義・伊藤宏・小木しのぶ「小学校体育授業に対する好き嫌い」と運動意欲の関連性および授業後の感想文のテキストマイニング」、pp.9-16、日本教科教育学会誌第 34 巻、2011
- 8) 落合優・加藤務・村瀬浩二「小学生の運動・スポーツに対する意識について」、pp.23-35、横浜国立大学教育人間科学部紀要、2007
- 9) 木本泰洋「最終教育機関としての大学の体育が生涯スポーツに及ぼす影響—集団雰囲気」が学習意欲に及ぼす影響の検証を通して—」、pp.277-306、四天王寺大学紀要第 51 号、2011
- 10) 斎藤孝「身体感覚を取り戻す 腰・ハラ文化の再生」、NHK ブックス、2000
- 11) 佐久本稔・篠崎俊子「学校体育期の“運動嫌い”に関する研究（Ⅰ）」、pp.55-78、生活科学、福岡女子大学、1979
- 12) 佐藤伊都美「ボディワークを採り入れた大学体育授業の試み」、お茶の水女子大学人間文化研究科人文専攻舞踊・表現行動学コース修士論文、2008
- 13) 佐藤節子「ヨガ・エクササイズ」の体験が短大生の心身の健康に与える効果」、p.103、日本健康心理学会第 22 回大会発表論文集、2009
- 14) 佐藤節子・佐藤伊都美「ヨガ、ピラティスおよびバレエエクササイズ」の体験が短大生の心身の健康に与える効果」、pp.53-72、埼玉女子短期大学紀要第 21 号、2010
- 15) 佐藤正「体育における臨床的指導法の研究（1）—運動嫌いの問題と指導—」、pp.9-15、東京女子大学紀要 15、1980
- 16) 坂本勝江「体育の授業において「総合的な学習をする」取り組みについて」、pp.(45)-(60)、茨城女子短期大学紀要第 23 集、2009
- 17) 田中彰吾「ボディワークとトランスパーソナル——身体」の役割」、pp.35-39、トランスパーソナル心理学／精神医学 vol.1、2000
- 18) 鶴山博之・大門信吾「大学生の運動経験と運動意欲に関する研究」、pp.81-91、国際教養学部紀要 vol.1、富山国際大学、2005
- 19) 羽鳥操・松尾哲矢「身体感覚をひらく 野口体操に学ぶ」、岩波ジュニア新書、2007
- 20) 春木豊「動きが心をつくる 身体心理学への招待」、講談社現代新書、2011
- 21) 深沢悠二「からだ」と心のマネジメント」、ブックハウス HD、1994
- 22) 福本まあや・猪崎弥生・石澤宣子・中川文可「豊かな営みとしてのダンス—平成 20 年度公開講座の記録—」、pp.166-173、富山大学芸術文化学部紀要第 4 巻、2010
- 23) 松浦真宏・三浦麻子「人文・社会科学のためのテキストマイニング」、誠信書房、2009
- 24) Synthia J. Novack「コンタクト・インプロヴィゼーション—交感する身体」、フィルムアート社、2000

脚注

- i 「基礎体育」は、保育士養成過程の改訂に伴い、2011 年度より「保育表現技術（身体Ⅰ）」「保育表現技術（身体Ⅱ）」に名称変更された。
- ii 「健康とスポーツ」については、保育科の学生の他に、ことばの芸術学科（旧・国文科）の学生も受講することができる。ことばの芸術学科（旧・国文科）の受講者数は、2009 年 2 名、2010 年 2 名、2011 年 1 名である、2012 年 0 名である。
- iii テキストマイニングについては、佐藤ら（2010）の「ヨガ、ピラティスおよびバレエエクササイズの実験が短大生の心身の健康に与える効果」の手法を参考にした。
- iv KHcoder では、例えば「ベリーダンス」という単語を「ベリー」と「ダンス」といったように別の単語として抽出してしまうことがある。これを「ベリーダンス」という 1 単語として正確に抽出するために、手作業で強制抽出する語の選択を行う必要がある。
- v ビリーズブートキャンプ（Billy Blanks Boot Camp）は、ビリー・ブランクスが考案した短期集中型エクササイズの総称及び、それを収録した映像ソフトウェアの題名である。米軍における新人向け基礎訓練である「ブートキャンプ」を基盤としている。通販番組で紹介されたところ、日本では 2007 年に一大ブームを引き起こした。
- vi Wii Fit とは、任天堂より発売されたフィットネストレーニングソフトウェアである。「家族で健康」をキャッチフレーズとし、トレーニングや運動感覚を向上させるゲームが搭載されている。専用のボードに乗り、体重測定や、ヨガ、有酸素運動、バランスゲーム等の様々なトレーニングを行うことができる。

報 告

「こども音楽療育実習」の授業展開 ～初年度の取り組み～

神永 直美・馬立 明美

茨城女子短期大学

1 はじめに

近年、保育の現場で、多様化している発達障害児への関心が高まるとともに、その保育や対応への不安を訴える声が増してきている。保育者養成校においても、保育の現代的なニーズに応えるという意味からも、何らかの対策の必要性を感じている。

そのような状況を受けて、一般財団法人全国大学実務教育協会において、こども音楽療育士資格認定制度が創設された。平成23年4月に出された「こども音楽療育士資格認定制度設置の趣旨」には次のようにこども音楽療育の必要性が述べられている。

近年、保育、幼児教育、福祉の各領域において、音楽は幅広く活用され、音楽活用の可能性が注目を集めると共に、その活用に関する実践研究が進められている。特に、昨今の課題である発達障害児への対応という点において、音楽を用いた療育は、こどもの心やからだを育てる発達援助の一手段として活用され、意義深いことが検証されている。

そのような時代背景を踏まえ、音楽療育、障害児・心理、保健及び音楽に関する科目を体系的に学んだものに「こども音楽療育士」として、資格を授与する制度の導入を図り、保育所、幼稚園、小学校、児童福祉施設等において、心身の発達に役立つ療育の知識と技術の獲得を目指したい。そして保育士資格及び幼稚園教諭、小学校教諭免許に、より付加価値を加えることとしたい。

こども音楽療育とは、障害をもった子どもに対して、音楽を用いた活動を行うことで、心やからだを育てていこうというものである。これは、現代の保育の課題に迫るための一つの糸口となるのではないかと大変興味深く捉え、本学でこの資格が取得できるように検討することとなった。

しかし、その時点では本学に音楽療育という分野の専門家がいなかったこともあり、学生に適切な指導ができるかどうか不安であった。そこで平成23年6月に行われた説明会、9月に行われた「こども音楽療育を担当する教員研修会」に参加し、情報を得ることになった。説明会では、こども音楽療育士資格認定制度設置の趣旨、こども音楽療育士資格認定に関する規程、こども音楽療育士教育課程ガイドラインが示され、申請に向けてのイメージをつかむことができた。また、9月の研修会では、「子ども音楽療育」の実際について説明を受けると共に、実際にセッションを体験したり、すでに「保育音楽療育士」の資格（こども音楽療育士の上位資格）を出している（保育士資格取得に必要な単位+29単位で取得可能）大学等の事例を聞いたりした。そのことで、学生が「こども音楽療育士」の資格取得を目指して学ぶことは、さらに子どもの心身の育ちを促す療育の知識を深め、技術を獲得できるという確信を得た。それは、幼稚園や保育所の大きな柱となっている子育て

支援や親子のふれあい支援にも通じるものであり、これからの保育者にとってとても重要な資質となるものと考えた。

そこで、本学では、学生の学びの充実と学生定員の安定的な充足に向けて、他短大と差別化を図るという目的から、平成 24 年度から「こども音楽療育士」の資格を取得できるようにカリキュラムを編成することを決定した。

本稿では、「こども音楽療育士」の資格取得のために平成 24 年度から新たに開設した 3 講座（「こども音楽療育概論」「こども音楽療育演習」「こども音楽療育実習」）のうち「こども音楽療育実習」の授業展開（初年度の取り組み）について報告し、その成果と課題を明らかにするとともに、今後さらに学生の学びを深める実習となるよう、また地域貢献としても充実させていけるように考えていきたい。

2 「こども音楽療育士」資格について

① 資格取得に必要な単位

「こども音楽療育士資格認定に関する規程」（以下規程とする）第 3 条（資格の取得）に次のようにある。

こども音楽療育士の資格を取得しようとする者は、当該大学（短期大学及び専攻科を含む。以下同じ。）において、次に示す必修科目及び選択科目を合わせて 20 単位以上を履修し、単位修得する者でなければならない。

必修科目（3 科目 4 単位以上）

こども音楽療育概論	（講義）	2 単位
こども音楽療育演習	（演習）	1 単位
こども音楽療育実習	（実習）	1 単位

選択科目（各群それぞれの必要単位数を満たし、計 16 単位以上）

I 群	「障害児及び心理」関連分野	4 単位以上
II 群	「保健」関連分野	2 単位以上
III 群	「音楽」関連分野	4 単位以上

この規程により、平成 24 年度から保育科の教育課程に「こども音楽療育概論」（講義）「こども音楽療育演習」（演習）「こども音楽療育実習」（実習）の 3 科目を新設した。

② 担当教員

規程の第 4 条に「専任教員は必修科目に 1 名以上配置するものとする。」とある。3 科目を新設しなければならないが、そのうち 1 科目は専任教員を含まなければならないことになる（「ただし、必修科目に専任が得られない場合は、当分の間、選択科目に 1 名以上とすることができる。」となっている）。

また、規程の第 4 条 2 には「専任教員については、履歴書及びこども音楽療育に関する業績調査（実務実績を含む。）等を提出しなければならない。」とある。説明会では、「通常の業績

(教育歴)の審査をすることやボランティア等の活動歴も含んでもよいこと、また平成23年9月の研修会への参加を加味すること」などの説明があった。

いずれにしても、授業を充実させるためには、担当する教員は実績があり、その経験を生かして授業が展開できる方が望ましいと考える。特に「こども音楽療育実習」については、どこでどのように観察ができるか、また学生が実習する場を設けることができるか検討しなければならない。子どもを対象にした音楽療法等の情報を収集していたときに、県内の複数の児童福祉施設で音楽療法のセッション(グループでの音楽療法)を定期的に開催したり、市民センターで1、2歳児親子を対象に音楽あそびを開催したりしているNPO法人があるという情報を得た。

代表の方に話をうかがい、セッションを見学させていただいた。そして、その方(共同執筆者:馬立)に「こども音楽療育演習」と「こども音楽療育実習」を担当していただくこととなった。しかし、実習は様々な交渉、日程調整、学生の振り分け、学生指導等、授業時間だけでは担えないことや専任教員が担当した方が望ましいこと、また、「こども音楽療育」には、「幼児教育・保育」という視点も必要であると考え、筆者(神永)も一緒に担当することとした。

③ 施設、設備等

〈施設・整備〉

施設、設備については、説明会時に次のような説明があった。

- ・ 特別の施設は必要ではなく、短大の施設があれば十分である。楽器等も音楽の科目があれば必要なものはあるだろうから、それで十分である。
- ・ 鍵盤楽器、打楽器等が充実していればなおよい。
- ・ 音楽と動きが必要なので、動ける部屋の方が好ましい。

本学では、もちろん音楽関係の科目が従来から充実していたので、それ相応の楽器は整備されている。また、ML室があり、クラス全員が一斉に電子ピアノの演奏や練習ができる設備も整っている。音楽室は、可動式の机なのですぐに動けるスペースは作ることができる。施設、設備的には問題はないと考えた。

〈教材の整備〉

施設、設備的には問題はないと考えたが、療育に必要な遊具教材は充分とは言えない。実習の場としてワークショップを学内での開催することにも対応できるように以下の教材を整えた。

- | | |
|---------------|---------------------|
| ・ バルーン 大1 | ・ ユランコ 大1 小2 |
| ・ ボールハウス | ・ ムーブメントスカーフ 大5 小15 |
| ・ ドレミマット 1セット | ・ くだものマラカス 30 |
| ・ こどもボンゴ 2 | ・ リペットバトン 30 |
| ・ 打楽器各種 | |

〈安全柵の整備〉

平成18年度に、学内で「子育てひろば」を開催するために多目的演習室「キッズルーム」を整備した(茨城女子短期大学紀要第36集で報告)。今回、学内でのワークショップを「子育てひろば」で活用している2階の2部屋で開催することを計画していたので、子どもが飛び出して転落することなどがないように新たに安全柵を設置した。

④ピアノの技量

説明会で「ピアノの技量に特別なことは求めている。だが、弾けた方が様々な活動ができるだろう」ということは言える。ピアノにこだわってはいない。」との説明があった。

特別な技量は求めないにしても、やはり楽器が弾けることにこしたことはない。本学では、入学試験にピアノを課していないので、レベルの差が大きい。以前からレベル別にピアノのレッスンを行ったり、ピアノの補習（放課後等に希望者による）を行ったりしていたが、今後はますますピアノのレベルアップ（コードによる伴奏、子どもの動きに合わせた伴奏等）を図っていく必要があると考える。このことについては平成 25 年度から、レベル別グループレッスンを実施することに決定している。

3 「こども音楽療育実習」の授業展開

①実習の組み立て

平成 24 年度は、2 年生 21 人（学年の 27%）が履修した。下記に授業の展開を示す。

〈平成 24 年度「こども音楽療育実習」の授業展開〉

1	4/9	実習の意義、目的、内容の理解	
2	4/16	発達障害児の音楽療育	
3	4/23	身体障害を伴う場合や重度障害の音楽療育	
4	4/30	アセスメントについて	
5	6/11	プログラムについて	
6	5月 ～ 6月	観察実習	2人～4人に分かれて 2回ずつ（授業の日とは限らない） 5時間×2回
7		4/28(土)「みんな de 歌おう音楽会」	
8		・ A 園	
9		・ B 園 ・ 市民センター	
10	7/2	振り返りと模擬セッション	多目的室
11	7/9	実習日誌の書き方	
12	8月	ワークショップ実習	校内でのワークショップに2日ずつ 参加。1回はプログラム実施者となる。 5時間×2回
13		8/20(月) 8/23(木)	
14		8/27(月) 8/31(金)	
15			
16	10/4	音楽療育実習振り返り①	
17	10/11	音楽療育実習振り返り②	
18	11月 ～ 2月	ワークショップ実習	11月～2月 4回中1回は必ず参加。 1回5時間
19		11/10(土) 12/1(土) 1/12(土) 2/9(土)	
20		音楽療育実習のまとめ	実習日誌を提出

実習科目は、本学では45時間で1単位となっているので、事前事後指導を含めて、45時間以上の実習時間を確保することが必要となる。こども音楽療育士教育課程ガイドラインでは、「施設、保育所、通園事業、児童デイサービス、障害のあるこども達とのグループ体験やボランティア活動、音楽療育に関するワークショップ参加等の観察実習、参加実習、体験学習を通して、音や音楽を使った音楽療育の具体的実践方法を学ぶ。」とある。

そこで、実習を充実させるために、地域の施設における観察実習と、学内でのワークショップにおける参加・体験実習を主に、事前・事後指導を入れるという構成で進めることにした。

②観察実習（地域の施設）

観察実習は、すでに「音楽療法」のグループセッションを行っている施設と交渉し、その時間帯を中心に観察させていただくことになった。地域の重症心身障害児通園施設と知的障害児通所施設、そして障害児が若干含まれているという1、2歳児親子を対象とした音楽あそびのセッションを行っている市民センターである。平成24年度から資格を取得できるようにしたため、2年生は1年間で3科目をとることとなり、観察実習はやむを得ず授業を欠席して行かなければならない日もあった。また、障害のある子どもが対象であるため、大人数で観察することは難しく、少人数で何回にも分けて行わなうため、日程の調整がとても困難であった。最終的に、28日の観察実習日を設けたことになる。

参加した学生にとっては、実際に障害のある子どもの活動への参加の様子やセラピストのかかわりを観察できたことは、大きな学びとなっている。振り返りの中での感想を学生の許可を得て掲載する。

今回の観察実習で一番初めに思ったことは、子どもたちがとても楽しそうに音楽活動に参加していたということです。知的な障がいがある子どもたちだということを事前に聞いていたので、音楽活動をどのように展開するのか気になっていましたが、子どもたちから「やる！」という意思表示があり、楽器に触れている姿を見てとても驚きました。また、その子どもによって障がいの状態が違うので、その子によって支援の方法も変わってくることが分かりました。状態をよく把握しておかないと、その子のできることを妨げてしまったり、要求ややりたいことがわからないままに終わってしまったりするのではないかと思います。

初めての音楽療育の観察実習でした。先生のプログラムの進め方、子どもたちに対する声のかけ方、ピアノの弾き方など、保育実習とはまた違う別の光景を見ることができました。ペープサートを動かすのも、音楽に合わせた動かすのではなく、手首を動かすという療育になっていることを意識するとまた違った活動のように思えてきます。

発達障害を理解すること、一人一人の発達について理解し、障がいを早期発見することも「こども音楽療育士」の大切な役目なのだと改めて感じました。

③参加・体験実習（学内でのワークショップ）

参加・体験実習は、地域貢献という面からも有意義であると考え、学内でワークショップを行うこととした。学生が参加できる日程を組むのに苦労したが、8月の4回コース（保育実習（施設）の合間）と11月～2月の授業のない土曜日開催の4回コースとした。



夏休み 4回コース

たのしい音楽あそび

♪音楽に興味の少ないお子さんとOK!

親子でいっしょに、音楽あそびをしましょう！
音楽療法士の先生や学生（こども音楽療育の学習中）とともに、楽器をつかってあそんだり、歌を歌ったり、音楽に合わせて体を動かしたりします。

平成24年度

第1回	第2回	第3回	第4回
8/17(金)	8/23(木)	8/27(月)	8/31(金)

時間 10:00～11:30(毎回)

場 所 茨城女子短期大学

参 加 対 象 3歳～6歳の療育が必要なお子さんと保護者（一緒に参加できる方であればどなたでも可）

目 標 親子で音や楽器を感じ、コミュニケーションを深め心の安定を図る。

内 容 ☆きれいな音や歌を聴く（リラックス）
☆音の振動を共有する（心の安定とほどよい刺激）
☆楽器を鳴らす（集中力、興味を引き出す）
☆歌を歌う、会話を楽しむ（発声）
☆身体を動かす（身体機能の発育を促す）
☆グループで活動する（社会性、協調性が芽生える）

参 集 人 数 12人（先着順）、4回とも保護者（育児者）同伴で参加できる方。

参 加 費 無料

申し込み方法 必要事項を記入の上、FAXかメールで申し込みにください。
FAX **029-295-4868**
メール **kaminaga@taipei.ac.jp**
(2012年7月30日(月)から)

問い合わせ 茨城女子短期大学 理学部 理学系 電話 (TEL) 029-298-0596
郡市東本館 560-2 11時5分30秒～17時30分

〈8月開催のためのちらし〉



〈模擬ワークショップのひとこま〉

「こども音楽療法」 ワークショップ			
子どもとお母さんのための親子音楽活動 2012年 8月 23日(木) 10:00～11:30			
保育科教授 神永達典 音楽療法士 馬立明美 実習生			
<対象> 子どもと母親（保育者） 15組 <目標> 音楽を楽しむ（親子で音や音楽を感じ、コミュニケーションを深め、心の安定を図る） 楽器で遊ぶ・音に合わせて身体を動かす <内容・目的> きれいな音や歌を聴く・・・リラックス 身体を動かす・・・身体機能を促す 音の振動を共有する・・・心の安定、ほどよい刺激 楽器を鳴らす・・・集中、興味を引き出す 音で遊ぶ・・・聴覚を養い、刺激 歌を歌う・会話を楽しむ・・・発声 グループで活動する・・・社会性、協調性 ※参加費無料 ※2012年8月23日開催			
プログラム	内容	楽器・用具	保育者の役割
あいさつ（身体全体を動かす） 「こどもたちの歌」	活動開始・・・近事	チャーム	子どもたちと挨拶をする。
歌唱（声を出す・歌を楽しむ） 「さくらんぼ」 「バス・バス」 「うみ」 「アイスクリームの歌」 ママの好きな歌（母親） 16歳の子供の歌（子供） 手遊び歌（楽器ができる）	好きな歌、季節の歌を歌う	ピアノ、カブサ、バズ	その特徴を説明（製作） （エプロンに） 机の上にボールを 乗せて、波の上に 乗る。 テープシート等を 用意して子ども たちと目標を合 わせる。
身体機能（身体全体を動かす） 「大きな星の下で」 身体運動（親子のスキンシップ） 「崖の上のぶどう」 「おれい」	身体を動かす リズムに合わせて （ゲーム・ダンス）	ピアノ	子どもたちの身体を 動かす（お母さん の手で） 全員に協力する。
楽器活動（合わせる・楽しむ） 「ぶんぶん」	楽器を鳴らす	フルーヤマラス ドレミマツ	子どもたちと一緒に 楽器を鳴らして 楽しむ。
鑑賞音の運動を感じる 「」	リズムに合わせて オカリナを聴く		
あいさつ（終わりの歌） 「さよならの歌」	歌いながらあいさつをする		終わりの歌を 歌うようにする。

〈学生が作成したプログラム〉

8月のワークショップでは、1回の学生の人数があまり多くならないように、4回中2回参加することとし、そのうち1回は活動を進める中心となり、1回は観察するようにした。

11月のワークショップでは、4回中最低1回は参加することとし（3回参加した学生もいた）、参加、体験実習を行った。

回を重ねる毎に、学生も参加者も緊張が解け、一人一人とふれ合いを楽しむ様子が見られた。

8月と11月～2月の両方のワークショップの終了時には参加者にアンケートを行った。



〈バルーンを使用した活動〉

参加者全員が「とても楽しく参加できた」と評価し、「家でも歌を口ずさむことが多くなった」「子どもが楽器に興味をもって自分から触ろうとしている様子に驚いた」「もっとたくさんの回数を行ってほしい」「また、近いうちに開催してほしい」などの好意的な感想が書かれてあった。

初年度から学内でワークショップを開催することには、不安も大きかったが、有意義なワークショップになったと考える。学生に了解を得て感想を記載する。

音楽療育実習を体験して、最初はきちんと進めることができるのか、子どもたちと打ち解けることができるのか、とても不安でした。ワークショップが始まると、子どもたちの明るい素直な笑顔や元気な声で、不安が少しずつ和らいでいきました。友達と協力して楽しく進めることができ、子どもたちも楽しんでいる様子でとても嬉しく思いました。

最初は、「こども音楽療育士」がどんなことをするのか理解していないまま、ほんの興味で授業をとりましたが、授業が進むうちに「やってみたい」「自分に合っているかも」と思えるようになりました。実習もワークショップも楽しみながら学ぶことができました。

音楽を楽しむことは障がいがあってもなくても同じなのだと思います。音を通して子どもと向き合い、子どもも安心すると笑顔を見せてくれると今回の実習で学ぶことができた。

1回目の最初の時、子どもたちがいすに座ることなく、他のものや遊び場に興味が向いてしまいどうなることかと不安になった。音を出し、始まる合図をすると、少しずつ興味を示していることを感じた。2回目の時は全員が音楽活動をするにに興味を示してくれたのでとても嬉しかった。子ども自身も何をするかがわかり、安心したことで落ち着いてきたのだと思った。

これからは、ピアノの練習を続けてレパートリーを増やし、いろいろなワークショップに参加することも必要だと思った。



障害のある子どもにとって音楽リズムは、とても有効なのだと実際に体験してみて感じた。ゆったりとした時間の中で、子どもたちのペースで行う保育がとてもよいと感じ、障がい児に限らず、健常の子どもたちにもこういった保育をしていくことが大事ではないのだろうかと思った。

実際にやってみると、とても難しく、どうすれば子どもたちに伝えられるのか、どう子どもたちが理解しているのか悩む部分もあった。

また、音楽は音を耳で感じる、楽しむだけでなく、身体全体で感じるができるのだと、実際の子どもの表情や言葉の発達、自己表現を目にし、音楽の力はすごいのだと感じた。

これから現場に出て障がいのある子どもに出会うことは多いだろう。こども音楽療育関係の授業で学んだことを生かしていきたいと思う。

4 まとめとして～今後の課題～

こども音楽療育関係の授業を立ち上げる際、一番心配だったことが実習に関してのことである。観察をする場所が見つかるか、見つかっていても学生を受け入れていただけるのか、学生が子どもたちに実際にかかわる場をどう設定していくかなど、悩みはつきなかった。しかし、これまで音楽療法のグループセッションを積み重ねてきた実績のあるNPO団体主宰者を介して交渉を進めることができたことで、新しい資格についてよく理解していただき、実習についても好意的に受け入れていただくことができた。観察実習は、外部の施設でのセッションへの参加を中心に、参加実習は学内でのワークショップを中心にという2本立ての実習の基本的土台を初年度に構築できたことは成果である。

学生の学びという視点からは、少人数で授業を行うことができたことや音楽好きの学生が集まっていたことから、欠席する学生が少なくとても意欲的、積極的に学ぶ姿勢が見られた。特に、学内でのワークショップは初めての開催であるため、イメージが共通になりにくかったのであるが、自由な雰囲気の中、いろいろな意見を出したり音を鳴らしたり教材を作ったりすることができた。振り返りの文章の中にも、学びが深まったことがうかがえた。

しかし、初年度であることから2年生は1年間で3科目を受講することとなり、観察実習のため授業を欠席する事態となってしまった。現1年生からは長期休業を利用して実習が行えるように計画を変更したが、今後も学生がの不利益にならないような日程の調整をしていく必要がある。

また、初めての試みである学内でのワークショップに参加者が集まるかどうかを心配したが、発達障害児の支援に力を入れている地域の幼稚園の教頭先生のご理解があり、支援が必要な子どもの保護者に直接ワークショップのことを紹介していただくことができた。そのことで、興味をもった親子が初回から参加してくださったことはとてもありがたかった。2回目は様子が分かったからか募集人数を上回る応募があった。今後は、学内での音楽療育ワークショップというスタイルが定着していくように定期的に開催し、アセスメントや内容を充実させ地域貢献の一端としていきたい。

さらに、本年度の本学で行った教員免許更新講習に「こども音楽療育」の講座を設けたところ、受講生から大変好評であり、資格取得のための方法についての問い合わせがあり関心の高さに気付かされた。卒業生等からの資格取得の希望にどう応えていくかも今後検討していきたい。

図書館システム：Enju 導入の覚え書き

内桶 真二

本学図書館システムの更新に際して、Project Next-L の提供する Enju を採用することとなった。本稿は、導入作業の記録である。

Enju には Root、Leaf、Flower がある。正式には Next-L Enju Leaf などと呼ばれるものである。本稿では Enju Leaf のことを単に Enju と称することとする。

Enju のソフトウェア群は Project Next-L が開発をすすめているオープンソースのソフトウェアである。本稿作成時点では、バージョン 1.1 のベータ 2 が最新版である。本学で準備作業を行っているのは、現時点でバージョン 1.06 である。

Project Next-L のホームページアドレスは：<http://www.next-l.jp> である。

1 導入の経緯

- ・ 2011 年の後半ぐらいから本格的に次期図書館システムの検討が開始される
- ・ これまで利用していたものを継続利用していく方向に傾いていたが、経費節減の方針が打ち出される
- ・ 従来用いていた専用ソフトは高額である（特にサポート料）
 - 5 年ごと 機器の入れ替え 約 200 万円（このうち、データベースエンジン部の更新料が見過ぎせない額となる）
 - 年間サポート料 約 50 万円
- ・ 安価なソフトウェアもあるが、要求を満たしていない
 - いくつかの問い合わせの結果
 - 数万円程度のソフトウェアは小中学校の図書室程度の蔵書数の施設を対象にしている
 - そのようなソフトウェアには上位版もあるが、上位版は従来利用していたものと同程度かそれ以上の経費がかかることが判明
- ・ 2012 年 2 月初旬 Enju の利用を本格的に検討し始める
- ・ 2012 年 2 月 8 日 従来のシステムから書誌データを書き出し Enju のテスト開始
 - 8 万件ほどのデータは意外と容量が少ない。書き出してみるとタブセパレータで約 130 メガバイト
 - 文字コードは UTF-8 にする
 - 従来利用していたソフトウェアのテキスト書き出し機能を利用して、後の作業を考慮し、項目はタブ区切り、文字コードは UTF-8
- ・ 2012 年 2 月 13 日
 - Enju 稼働（この時点での Enju のバージョンは 1.01 ぐらいであったように記憶している）
 - Enju を利用していくことに目処が立つ。Enju を利用可能であると報告。Enju で作業を進めて

いくことに決した

2 利用環境

VMware を利用した仮想マシンで Enju が提供されており、簡便に利用できた。(現在、最新版の Enju を組み込んだ仮想マシンは提供されていない。VMware 等を利用して自作することは可能である。)

Moodle 用のサーバーとして利用していた CentOS 5 が動作するサーバーに、VMware 4 を導入。その VMware 上の Ubuntu で動作する Enju を利用する。

2.1 利用方法のまとめ

2.1.1 サーバー／パソコンに VMware を導入する

VMware が動作する環境であれば、ウィンドウズでもマック環境でもよい (リナックス、あるいはウィンドウズの場合、VMware は無料で利用できる：マックでは VMware Fusion という有料ソフトが必要となる)。

2.1.2 ホストマシンに Enju を直接組み込む方法

ホストは Linux でも (マック) OS X でもよい。

慣れれば、Linux 系の OS のダウンロード／インストールから、Enju の設定まで3時間程度で終了する (蔵書データの導入は除く)。データベースソフトウェア (PostgreSQL) の操作に習熟すれば、データのバックアップにも問題はない。

2.1.3 仮想環境で使うか、ホストマシンに直接インストールするか

VMware 等の仮想マシンで Enju 利用するようにしておくと、バックアップ、リストアの細かい手間が省けるように思う。

バックアップには仮想マシン全体を複製して安全な場所に保管しておけばよい。VMware が利用できるパソコンを別に準備しておけば、データが入ったままバックアップされた仮想マシン自体を動かことができる。トラブルが発生しても即座に対処可能である。

一方、ホスト (サーバー) マシンに直接 Enju を導入するメリットは、まず第一に、動作が高速であること。ただし、仮想マシンでも動作が極端に遅いということはない。

次に、ネットワークの設定が簡便であること。仮想マシンの場合、ネットワークの設定に一手間要する。ホストマシンに直接インストールする場合にはそのような手間がかからない。

2.1.4 VMware のネットワーク設定

仮想マシンを利用する場合、ホストマシンと仮想マシンの間のネットワーク設定を施す必要がある。

VMware のマニュアルをていねいに読めば設定できる。(ただし、VMware のネットワーク設定方法はバージョンアップの際に時々変更されるようである。ネット検索し、やり方を探りたくなるが、最新の方法がネット上に書き込まれていることはあまりなく、どの方法がよいのか見当をつけ

にくい。)

Cent OS 上のポートフォワード設定は /etc/VMware/vmnet8/nat/nat.conf で行う。(詳細を書き留めておくことを忘れてしまったが、VMware のバージョン 3 のマニュアルに記載されていたように思う。)

2.2 書誌データの導入

従来の書誌データをテキストで書き出したものを整形し、Enju に読み込む作業を 2012 年 2 月の末から 2012 年 9 月末まで行う。

不明の点を解明しながら試行錯誤を繰り返したが、いちおうデータを取り込めた。しかしその後、いくつかの不具合が読み込みの際に発生していることが判明し、さらに 2 度、データの読み込みをやり直した。2012 年の末にはデータの読み込み／移行作業に一区切りつける。さまざまなテストなどを含め、ファイルの読み込み回数は約 1200 回を数えた。

3 忘備録

- ・ Enju のデータベース名は、enju_production である。
- ・ Enju を動かしている OS に ssh でアクセスできるようにしておくことが望ましい。
 そのような際、日本語キーボードで文字入力がかまわない場合がある。
 コマンドラインから
 日本語キーボードの設定：sudo loadkeys jp
 英語キーボードの設定　：sudo loadkeys us
 を入力し設定する。
 手元に、
 \ (バックスラッシュ) の入力は 「む」 のキー
 アンダースコア ' _ ' は シフト + 「は」 のキー
 などのように一覧を作成しておくのも役に立つ。
- ・ ssh でアクセスできれば、psql を利用して PostgreSQL のデータベースを直接操作できる。
- ・ さらに、外部からデータベースにアクセスできるようにしておけば (postgres.conf および pg_hba.conf を編集する)、pgAdmin III でアクセスし、さまざまな保守管理作業が可能となる (postgresql-contrib も導入すること)。
- ・ 書誌データ読み込み時に考慮すべき点
 一度に大量のデータを読み込むのではなく、小分けにした方がよい。まず、所蔵情報 ID、著者名、タイトル、など最低限のものを読み込ませ、読み込みを確認し、次に細々としたデータを読み込ませる、など。

従来利用していたデータのクセ（読み込めないものがある）が把握できるまである程度時間を要した。読み込みながら、弾かれた項目をチェックしていくのが最良の方法かもしれない（データベースの各項目の入力制限をあらかじめ調べるだけの知識がなかったのである）。

・ LibreOffice の活用

読み込み用書誌データの作成／編集には LibreOffice の Calc（表計算）を利用した。

データを保存する際には、

ファイルの種類をテキスト CSV とするが

ファイル名の拡張子は、.tsv を手入力する。

フィルター設定を編集し

文字エンコーディングは Unicode（UTF-8）

フィールドの区切り記号をタブに

テキストの区切り記号は "（ダブルクォート）にし、

チェックボックスは、下から2番目の「テキストのセルを引用符で囲む」オプションだけをチェックすると必要な部分がすべて2重引用符で囲まれて出力される。

PotgreSQL のデータベースに外部からアクセスできる設定が施されていれば、LibreOffice の Base（データベース）などでアクセスし、データを閲覧することができる。

LibreOffice の設定は、dbname= アクセスするデータベース名 host= データベースホストマシンのアドレス（さらにポート番号の指定が必要なら、p= ポート番号）となる。

・ マニュアルに記載されていない項目を読み込ませたいとき

プロジェクトホームページに公開されているマニュアルに記載がある以外の項目を読み込ませたいことがある。

例えば「利用制限」の箇所を修正するには

item_identifier と use_restriction のコラム（行）を作成し、2行目移行に資料番号と、Limited Circulation, Normal Loan Period、と入力しファイルを読み込ませれば、「通常貸出期間」と表示されるようになる

読み込ませる項目の名称を見つけるには

ウェブブラウザで編集可能な状態にし

ページのソースを表示させる

```
<label class="string optional control-label" for="item_ 利用制限"> 利用制限 </label>
```

```
  <select id="item_item_has_use_restriction_attributes_use_restriction_id"
    name="item[item_has_use_restriction_attributes][use_restriction_id]"><option value="4"
      selected="selected"> 通常期間貸出 </option>
```

```
<option value="7"> 貸出不可 </option></select>
```

オプションバリエーションの4が Limited Circulation, Normal Loan Period であることは
 図書館の管理＞システムの設定＞利用制限
 で確認できる。

言語の設定を読み込ませたい場合、

```
<div class="field">
  <label class="string optional control-label" for="manifestation_ 言 語 "> 言 語 </label>
  <select id="manifestation_language_id" name="manifestation[language_id]"><option
    value="1" selected="selected"> 不明 </option>
```

language というコラムを設け、日本語に設定する場合には Japanese を入れればよい。

4 今後の予定

書誌データの読み込みは終了し、現在確認作業を行っている。できれば早いうちに仮運用を始め、4月からは稼働させたい。なお、しばらくは仮想マシン上の Enju を利用していく予定であるが、近い将来にはマックの OS X Server に Enju を導入して利用していくことを検討している。

【研究ノート】

司書課程におけるアクティブ・ラーニング導入の
試みに関する一考察

中山 愛理

茨城女子短期大学 ことばの芸術学科

キーワード：アクティブ・ラーニング，司書課程，主体的な学習活動

要旨：アクティブ・ラーニングを司書課程の授業に導入すると、学生の意識や行動にどのような変容が見られるのかを分析する。本稿では、司書課程の授業において、アクティブ・ラーニングを導入した授業実践を報告し、その意義と課題を明らかにすることを目的とし、学生自身が主体的に考えるために教員側がどのような支援が可能かその方略を探った。

その結果、アクティブ・ラーニングを授業に導入することで、学生が主体的に考え・判断する機会が多くなっている可能性が示唆された。また、主体的に考えることで、学生自身からの質問や発言が多くなる傾向が見られた。さらに、学生自身の考えを自らのことばで発言することにより、人に伝えるための情報をコンパクトにまとめる力が身についたことも示唆された。

この結果を踏まえて、教員側は学生の疑問に対し、学生が自ら解決するための資料や情報の見つけ方を導くような支援をし、図書館資料やコンピュータの信憑性のある情報源を自ら探し、自らの疑問に対して、課題解決能力を高めるために教員側がはたらきかけることが重要であることが明らかとなった。

1. はじめに

平成 24 年度からそれまでの司書課程で学ぶべき科目が見直され、新課程の「司書資格のために大学において履修すべき図書館に関する科目一覧」が示された¹。新課程では、「大学において」との文言が加えられ、大学教育の枠で司書養成のための教育活動を捉える必要性が出てきた。このことは、必ずしも大学が抱える教育的課題に対応した司書課程運営の必要性を意味しない。しかし、司書課程の授業と他の授業とを区別し、受講している学生は少ないと考えられる。こうした状況では、ある一定程度大学がめざすべき教育の方向性を踏まえつつ、多様な学習方法を司書課程に導入するべきであると考ええる。

大学における教育の方向性について、平成 24 年 8 月 28 日に中央教育審議会は「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」を答申した²。この中で、学修時間の確保の必要性とともに、学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続け、主体的に考える力を修得することが指摘された。この答申の内容はすべて賛同すべきものとはいえないが、社会で生きるために「主体的に考える力」を身につけることが必須であるということは疑いようがない。

大学において、主体的に考える力を育成することを目的とした教育活動をアクティブ・ラーニン

グと呼び、取り組みがはじまっている³。アクティブ・ラーニングは「伝統的な教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学習者が能動的に学ぶことによって、後で学んだ情報を思い出しやすい、あるいは異なる文脈でもその情報を使いこなしやすいという理由から用いられる教授法。発見学習、問題解決学習、経験学習、調査学習などが含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワークなどを行うことでも取り入れられる」⁴と定義づけられている。これらを溝上は「学生自らの思考を促す能動的な学習」と指摘した⁵。学生主体型教育といわれることもあるアクティブ・ラーニングであるが、全国の大学で初年次教育や専門教育のなかで導入が進められている。

今回は、このアクティブ・ラーニングを司書課程の授業に導入すれば、学生の行動変容が見られると仮説をたて、実際に試みることにした。その結果を踏まえて本稿では、司書課程の授業において、アクティブ・ラーニングを導入した試みの紹介と検討を通して、その意義と課題を明らかにすることを目的とした。

2. 司書課程の概要と課題

茨城女子短期大学では、1970年当時の文科に司書コースを開設して以来、現在のことばの芸術学科に至るまで文学を専攻する学生が司書課程を履修してきた。ことばの芸術学科では、司書資格のほか、秘書士、プレゼンテーション実務士、メディカル秘書、秘書実務士の民間資格を取得することが可能である。ほかの短期大学同様、実学を重視する本学においても、複数の資格の中から学生が希望する資格を選び履修することになっている。そのなかでも司書課程の履修者は比較的多く、おおよそ入学者の6、7割で推移してきた。高い割合の学生が履修することを反映して、「本が好きだから」や「資格を取得したい」、「図書館で働きたい」など司書課程を履修する理由も動機の強さも多様である。

履修動機が明確な学生は、自らテキストを読み、質問するなど従来から主体的な学びに取り組み、自らの希望で図書館に職を見つける者も複数存在した。しかし、動機付けが明確ではない学生からすれば、今学んでいる内容の意味や何に必要なことなのかがわからず、学ぶ意欲が湧きにくくなってしまっている。このように動機づけの高い学生とそうではない学生が存在するなかで、学生全体の学ぶ意欲を高めていくことが喫緊の課題となっている。

3. アクティブ・ラーニングの目的

今回、司書課程においてこのアクティブ・ラーニングを導入したのは、新課程の科目「情報サービス論」「情報組織資源論」の2つであった。これらの科目は、前期に図書館概論で図書館の業務や役割、機能を学んだ上で履修すべきとして、1年次後期に配当されている。

「情報サービス論」の授業目的としては、図書館で提供されるレファレンスサービスをはじめとし各種情報サービスに関する基本的知識を身につけ、関係する紙媒体とデジタルコンテンツを取り扱う技術についてのイメージを理解してもらうことを目的とした。シラバスに掲載した講義内容としては、図書館によせられる利用者のニーズの把握とその対応方法とともに、図書館で扱われる情報源としてのレファレンス・ツールの選定、収集、活用を中心に解説するとした。

また、「情報組織資源論」の授業目的では、図書館には多様なメディアがあり、それらの整理業

務にかかわる理論と方法論を学ぶことを目的とした。具体的に多様な情報資源を整理する意義を学び、整理するために使うツールとして、分類法、目録法や件名法を学ぶ内容となっている。

いずれの科目も講義科目として司書課程養成科目では位置づけられているが、一方的に説明するだけでは、情報サービス及び情報資源組織化の意義と実現するためのツールの活用方法や方法論を十分に理解することが困難であった。これまでも、テキストや図書館で調べることを要する予習プリントの配布と予習プリントに沿った授業を展開する試みも行ってきた。しかし、学生は課題の提出となると義務感で取り組み、わからないものは質問すればよいと受け身の考えで、必ずしも主体的な学習へとつながるものではなかった。この課題は、講義に加えて学生が主体的に知識を身につける機会の必要性を示唆するものであった。

そこで、学生自身の身近な問題として考えてもらうことができるようにする動機づけとしてアクティブ・ラーニングによる活動を導入することとした。アクティブ・ラーニング自体、それぞれ珍しい取り組みではないが、学生自身が考えたり判断に迫られたりするような仕組みを考える上で今回は試みることにした。なぜなら、自ら考え判断するためには、当然ながら前提となる知識が必要となるため、学生自身が必要性を痛感し、自ら学ぶ姿勢を引き出すことを意図したためである。

また、図書館で利用者のニーズを把握するためには、コミュニケーション能力は大切であると考え、これに対応するものとしてグループ活動を取り入れた。グループでの活動も取り入れることで、他者との協力や連携も考慮でき、自分と他者との関係を考えながら積極的に行動する姿勢を引き出すことも意図した。自ら学ぶ姿勢とコミュニケーションをとる姿勢は、司書資格取得後、公共図書館等の現場で即戦力として役立つと考えられる。

4. アクティブ・ラーニングの計画

「情報サービス論」の講義では、情報サービスの意義や情報サービスの種類などの基礎的知識を講義形式で解説をすることに加えて、アクティブ・ラーニングを組み込むことを計画した。学生が自ら判断し、かつ他の学生と共同して学習活動を進めるために学生一人ひとりの役割分担を決め、模擬的に「利用案内」などの情報サービスに関わる活動を行うこととした。また、情報サービスと他の図書館活動の関連に対する理解を深めるために、図書館の利用法、資料紹介、展示などの情報サービスに関わる学習活動も組み込むことを計画した。

続いて「情報資源組織論」の講義では、図書館における情報資源組織の意義や分類規定などの基礎的知識を講義形式で解説をすることに加えて、アクティブ・ラーニングを組み込むことを計画した。「情報サービス論」の科目同様に、学生が自ら判断し学習活動を進めやすくするために、図書館で行われている情報資源組織化を自ら確認するため、短期大学の図書館内での授業を計画した。

5. アクティブ・ラーニングの実施

実際の計画をもとに「情報サービス論」の講義では1. 図書館の利用法、2. 資料紹介、3. 展示などを事例として、情報サービスに関わる主体的な学習活動を行った。

5.1 図書館の利用法

情報サービスの基礎として位置付けられている⁶、「図書館の利用法」では、初めて図書館を利

用する人のために開かれるオリエンテーションを実際に立案、実行した。

- 1) 短期大学の図書館に置いてある利用案内パンフレットを見ながら、どんな項目がそこに書かれているのかをグループで話し合った(図1)。
- 2) 学生たちの身近にある公共図書館へ行ってもらい、利用案内パンフレットの入手や利用者に対する案内資料やサインについての確認をした。
- (3) 短期大学の図書館及び各自が調べてきたことを報告し合い、参考になる点や盛り込むべき事項を話し合い、オリエンテーションの立案を行った。
- 4) 立案にもとづき、司書役と利用者役に分かれ、オリエンテーションを実演した。

5.2 資料紹介

資料紹介では、情報資源の解題をつくることを通して、図書館が作成する情報資源の組織化を学んだ。

また、レファレンスブックの活用法についての理解も深めた。

- 1) 10月という授業実施時期を踏まえて、テーマをハロウィンとした。
- 2) 各学生がハロウィンについて紹介文を書くため、レファレンスブックを用いて調べた。
- 3) 主題に関連する図書やCD、DVDなどを検索した。
- 4) 見つけた図書やCD、DVDの中から、適切なものを選択して解題を作成した。

基本的には、学生の主体性に任せて、学習活動を進めてもらったが、偏った情報ばかりにならないように、図書やDVDなど幅広いメディアの存在を考慮することを助言した。

5.3 展示

展示では、各人で取り組んだ資料紹介を発展させ、グループワークとして、主題についての展示と紹介を行った。



図1. グループでの話し合い



図2. 利用者役と司書役に分かれた行動



図3. 学習成果の例：
ハロウィンをテーマにした資料紹介

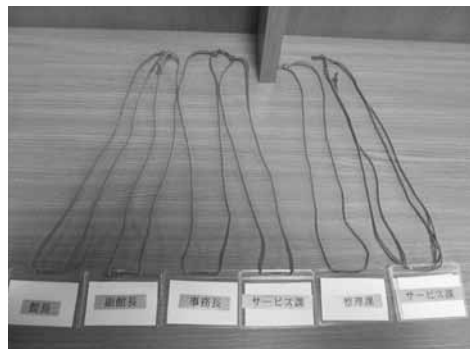


図4. 役割を記した名札

- 1) 学習活動を進めるにあたり、学生を図書館長、副館長、サービス担当司書、資料担当司書、事務（庶務）の各役と利用者役とに分けた。各担当は、誰がどの役にふさわしいのかを学生らが話し合って決めてもらった。
- 2) 12月という時期を踏まえて、クリスマス関連の資料の展示、漢字ツリーの制作を行うことにした。
- 3) 事務担当役が展示に必要な資材準備、資料担当司書役が展示する資料の選定、サービス担当司書役が飾り付け、館長と副館長役が準備の進捗状況の管理を中心に担った。
- 4) 今年1年を表す漢字を利用者に書いてもらい、ツリー型の大判ポスターに貼り、漢字ツリーの制作を行った。漢字ツリーには、漢字を調べるためのレファレンスブックを一緒に配置した。館長、副館長役の学生が学内の教職員に対して参加の案内を行った。



図5. 学習成果の例：
クリスマス関連の展示

前述のほかに情報サービス論では、接遇・コミュニケーションについて学ぶため、図書館員役と利用者役とに分かれて、レファレンスインタビューを行った。最初に利用者に接する際の言葉づかいを確認した後で、レファレンスサービスに必要な利用者が真に知りたい情報をどのように図書館員側が引き出していくかを体得するため、レファレンスインタビューを実際に行った。そのうえで、情報サービスの核となるレファレンスサービスを司書役と利用者役とに分かれ役割に応じて演じてもらい、違った立場の目線をもつことで双方の立場で考えてもらうよう学生に体験してもらった。

5.4 情報資源組織論

「情報サービス論」のほかに「情報資源組織論」の講義でも具体的に計画していた①図書館の分類に関するしくみに関わる学習活動を行った。本の背表紙に付与されている分類のしくみを確認した後、図書などを整理する際に使用する『日本十進分類法』を手にとってもらい、その中から自分自身で3つの記号を選択し、1枚の白紙に1つの記号を、3枚の白紙に書いてもらうようにした。全員分が揃ったところで、それらの紙をひとつの箱に混ぜ合わせ、くじ引きのように箱の中から紙を一人3枚ずつ引いてもらい、引いた紙に書かれている記号をもとに実際の図書館へ行って探してもらうことを計画した。

さらに、本の中身（内容）を分類記号に置き換える作業を通し、主題判断を考えてもらうこととした。その際、今話題となっている新刊図書を紹介し、それらの中身を記号で置き換えるとどのような記号が適切かを考えてもらうようにした。

6. アクティブ・ラーニングの評価

アクティブ・ラーニングを司書課程の授業に導入すれば、学生の行動変容が見られるとした仮説を検証するために、教員からみた評価と学生自身の評価をまとめた。

6.1 教員からみた評価

「情報サービス論」の1. 図書館の利用法、2. 資料紹介、3. 展示などの情報サービスに関わる学習活動にアクティブ・ラーニングを導入した結果、学生にどのような変容がみられたか教員の立場から評価してみたい。

1. 図書館利用法では、初めて図書館を利用する人の立場に立つことで、利用者目線に立って、図書館に必要なサービスはどのようなものなのかを考える姿勢が見られた。さらに、利用者の立場から出てくる疑問について、自ら発言するだけでなく、どの本がどこにあるのかその配置を確認できたようである。また、他の人に図書館の利用法を説明することで、図書館の専門用語をどのように伝えればわかりやすいのかを考え行動・発言する姿が見られた。
2. 資料紹介では、紹介する上で自分たちが利用する図書館にどのようなメディアが揃っているのかを知る機会を得られ、図書館にあるメディアについての知識が身についたようである。そして、図書館にあるメディアを知る中で、テーマに沿ったメディアはどれかといった選ぶ力が身についたようである。

また、「情報資源組織論」の学習活動にアクティブ・ラーニングを導入した結果、学生にどのような変容がみられたかまとめてみたい。教室で学ぶスタイルに比べて、図書館のツールを活用したことは、学生の主体的な活動を導き、さらに関心をもったことで質問しやすくなったように思われる。

6.2 学生からみた有効性

「情報サービス論」について、アクティブ・ラーニングによって、学生の行動変容がみられるのか、学生自身の認識を確認するための質問紙調査を行った。質問紙調査は、8項目準備し、受講学生を対象として、授業の最終週に実施した。その結果概要を以下で記述する。

1項目は、「講義で説明を聞くのと活動や体験では、どちらが意欲をもったか」について尋ね、全員が「活動や体験」との回答を得た。2項目は、「活動や作業を通して図書館で行われる情報サービス業務についてよく理解できたか」を尋ね、そう思う57%、ややそう思う43%、あまりそう思わない及び思わない0%の回答を得た。3項目は、「図書館での活動や作業を通して、自分で学ばなければ、活動や作業ができないと感じましたか」と尋ね、そう思う71%、ややそう思う14%、あまりそう思わない14%、思わない0%の回答を得た。4項目は「この授業を受けて、自分自身で考えて動けるようになったか」について尋ね、そう思う29%、ややそう思う57%、あまりそう思わない14%、思わない0%の回答を得た。5項目は、「役割を分けたことで図書館員の業務がより詳しくわかったか」を尋ね、そう思う28%、ややそう思う57%、あまりそう思わない14%、思わない0%の回答を得た。6項目は「もしまた機会があれば、展示や紹介などやってみたいか」

については、全員がそう思うとの回答を得た。7項目は「総合的にみて、授業について満足しているか」については、そう思う57%、ややそう思う43%、あまりそう思わない及び思わないは0%の回答であった。8項目は、「情報サービス論の授業について感じたことや思ったこと」を自由記述してもらった。その結果、みんなで協力して1つのものを作り上げる作業はとても楽しかった、実際に体験・活動することで実感がつかみやすく、行動力も増えたのでよかった、「来年もやりたいなと思いました、絵本の読み聞かせの授業もやってみたいなと思いました」、「レファレンスサービスの重要性や図書館内の利用者への配慮や主な活動内容を学ぶことができた」、「話を聞くだけでは、内容があまり理解できないが、活動や体験をし、体で覚えることができたので良かったです」など学生自身が自ら主体的に学習するための意識と実際に行動していたことが記述から確認された。

同様の傾向は、情報資源組織論でも確認された。「この授業に対して積極的・意欲的に参加しましたか」と尋ねたところ、非常に積極的に参加したが43%、どちらかといえば積極的・意欲的に参加したが57%と全員が自分自身の取り組み姿勢に対し、積極的・意欲的に参加していることが確認された。また、「この授業を履修してどのくらい満足したか」については全員が、「非常に満足した」という回答をした。

以上のことから考えられるのは、学生が積極的・意欲的に取り組んでいる学習活動に対しては高い満足が得られるということである。

7. 考察と今後の課題

教員の評価と学生による評価を踏まれば、アクティブ・ラーニングを導入することで、学生が、主体的に考え、行動しなければならないとの意識が芽生えたことが確認された。授業内容を理解したという割合も高い傾向と、授業への高い満足度という回答は、この様な授業を継続的に受けたいという高い意識につながったものと考えられる。

以上の考察を踏まえて、アクティブ・ラーニングを導入すると、学生自身が考える機会が多くなるため、受け身の態度から能動的な態度へと行動変容することが示唆された。

本研究には、残された課題もある。主体的に判断し、解決する力を身に付けるためには、何度も繰り返し継続することが必要な点である。今回のアクティブ・ラーニングの取り組みは、半期授業の中で完結させた。これまでの研究の中で、関連科目間での連携等は指摘されている⁷⁾。司書課程におけるアクティブ・ラーニングについても複数の科目間で継続することで、科目間の関連性を意識させることにもつながると考えられる。例えば、情報サービス論で行った図書館の役職を想定した学習活動は、図書館制度・経営論の領域にも関連づけることが考えられる。

また、短期大学の2年間という限られた時間の中で、アクティブ・ラーニングを取り入れる際には体系的に学べるよう支援側の配慮も必要となってくるといえる。今後の課題として、今回取り組んだ2つの科目以外で、アクティブ・ラーニングを継続的に取り入れることで、体系的かつ、科目間の関連が意識できるような検討をしていきたい。

引用・参考文献

- ¹ これからの図書館の在り方検討協力者会議．“司書資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目の在り方について：報告”．文部科学省．2009-02. http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/09/16/1243331_2.pdf, (参照 2013-01-01).
- ² 中央教育審議会．“新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）”．文部科学省．2012-08-28. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm, (参照 2013-01-01).
- ³ 溝上慎一．アクティブ・ラーニング導入の実践的課題．名古屋高等教育研究．2007, 7, p.269-287.
- ⁴ 中央教育審議会大学分科会制度・教育部会．“学士課程教育の構築に向けて：（審議のまとめ）：用語解説”．文部科学省．2008-03-25. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410/002.pdf, (参照 2013-01-01)．
- ⁵ 前掲) 溝上, p.271.
- ⁶ 小田光宏『情報サービス概説』日本図書館協会, 1997, p.30-33.
- ⁷ 大橋健治．アクティブ・ラーニングの試み．筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要．2010, 5, p.225.

報 告

「保育実践演習」「キャリア形成ゼミⅠ」の授業に 宿泊研修を組み込む試み

～東日本大震災被災地（石巻）訪問（ボランティア）を実施して～

埴雅文・神永直美・佐藤豊・山路純子・海野富江・角田雅昭
橋本祥子・安藤みゆき・国府田はるか・廣部朋美

保育科

Ⅰ はじめに

本学では、近年、学生生活への積極性が薄れてきたことや、中退者数が増えてきたことが大きな課題となっていた。様々な課外活動や学校行事への参加者が減少してきており、行事等の存続の危機にもなっていた。これまで、学生の自主性を重んじてきた伝統ある課外活動や学校行事であるので、その趣旨を守りつつも、学生が一丸となって目的に向かい充実感を得られる活動の立ち上げが必要なのではないかという考えに至った。

平成 23 年度から保育科では新カリキュラムになり、「保育実践演習」（演習・通年科目）と「キャリア形成ゼミⅠ」（演習・通年科目）が加わった。それを契機に、1 年生の早い時期に、それらの授業時間の一部を使い宿泊研修を計画することにした。初年度は、自然のなかで野外活動（ネイチャーゲーム、自然散策、野原で朝ヨガ等）を体験するというプログラムで実施した。時期は、保育科教員全員が指導に当たることができることから、2 年生の実習期間中に設定した。6 月の梅雨の時期ということもあり、天候に恵まれずプログラムの大半を変更せざるを得なかった。

平成 24 年度の計画を立てる際に、「東日本大震災の被災地でのボランティアを行ってはどうか」という案が出された。ボランティアと言っても、1 泊のみの宿泊なので時間的な制約もあり、たいしたことができるとは考えられない。しかし、教員間で議論をした結果、「被災地を訪れ、被災した方々のことを忘れていないことを示すこと、そして自分の目で現地を見てくること、そこで消費活動を行うことが少なからず復興支援につながるのではないか」「仮設住宅で苦勞している方々に学生たちの若さあふれるパフォーマンスを届けたり、話をうかがうことにも意味があるのではないか」との思いが一致した。

そこで、平成 24 年度は東日本大震災被災地（石巻）を訪問し、交流活動（ボランティア）を行うことに決定した。本稿は、その活動を通して学生がどのように変化したかを考察することから 1 年次に宿泊研修を行うことの意味を探るものである。

Ⅱ 実施にあたって

(1) 「保育実践演習」「キャリア形成ゼミⅠ」の授業の目的の共通理解

「保育実践演習」「キャリア形成ゼミⅠ」の授業の目的、授業の内容、学習活動を、それぞれ次に示す。

（保育科講義要項 平成 24 年度より抜粋）

下線の部分が、今回の宿泊研修にかかわる部分である。（下線は筆者による）

「保育実践演習」

(授業の目的) 具体的な実践を通して保育者の役割について理解を深める。また、その際子どもの観察や関わりの視点を明確にすることを通して保育の理解を深める。さらに、実践、観察、記録及び自己評価等についても実際に取り組み、理解を深め、今後の自己の課題を明確化する。

(授業の内容、学習活動)

- ① 保育者の役割についての理解
- ② 観察に基づく保育理解
- ③ 子どもの保育及び保護者・家庭への支援と地域社会等との連携
- ④ 指導計画の作成、実践、観察、記録、評価
- ⑤ 保育に係わる広範囲な問題から課題を選択し、グループ活動

「キャリア形成ゼミⅠ」

(授業の目的) 学生生活を円滑に進めるとともに、社会で必要とされる社会人としての基礎力を養う。特に保育科では、ほとんどの学生が保育者を目指していることを踏まえ、保育者を志望する意欲と学習動機を継続させ、なりたい保育者像が描けるようにする。また、人間社会に関する問題発見、問題解決およびコミュニケーション能力を形成し、将来の生き方を探究し、生きる力を修得できるようにする。

(授業の内容、学習活動)

- ① 大学で学ぶ目的と内容の確認
- ② カリキュラムの確認
- ③ グループにおける仲間づくりとコミュニケーション能力の育成
- ④ 目指す保育者像の模索
- ⑤ 身近な問題から様々なテーマを設定し、調査、発表、討論
- ⑥ 社会人としての必要な教養の修得

2科目の授業の目的、授業の内容、学習活動のなかで、強調したい部分はやはり、実際に他者とのかわりを通して感じたり考えたりしたことを発信していくということ、家庭支援や地域支援について考えるということ、そしてグループ活動を通して仲間をつくりコミュニケーション能力を養うということである。

その共通理解のもと、保育科教員全員が授業の担当となっていることから、様々なアプローチから宿泊研修をとらせ、学生とともに準備をしていくことにした。その結果、交流活動の中で「ダンス」「歌」「読み聞かせ」「折り紙」「マッサージ」「交流（話を聞く）」の活動を行うことになった。ボランティアの意味を考えることも授業の中にも含めることにした。その取り組みについては、後述する教員の座談会で一部話題になっている。

(2) 「東日本大震災被災地に対するボランティア活動と訪問」についてのアンケート

学生の震災や被災地についての意識を調査するために、事前に次のようなアンケートを実施した。

〈アンケートの質問内容〉

- (1) 東日本大震災が起きた日について
- (2) 東日本大震災後に、何か活動をしたかどうかについて
- (3) 東日本大震災後、一番不便だったことはどんなことかについて
- (4) 東日本大震災での記憶について
- (5) 被災地の場所について
- (6) ボランティア活動に対する期待について

〈アンケート結果と考察〉

- (1) いつ起きたかは全員が日時を記憶していた。学生にとっても忘れ難い日ということがわかる。
- (2) 「募金などをした」54%
「しなかった」50%
「何かしたいと思った」70%
半数以上の学生が募金をしたり、何かしたいと考えたりしていたことがわかる。「何かしたい」と感じてはいたが行動に移すまでにはいたらなかったという学生も多い。
- (3) ほとんどの学生が「ライフライン（電気、ガス、水道、電話など）が使えなかったこと」と回答していた。自ら体験した実感が表れている。
- (4) 「津波」27% 「学校での出来事」15%

「ライフラインが使えなかったこと」12%

「地震」10% 「犠牲者」5% 「交通渋滞」7% 「その他」18%

- (5) 被災地の場所が何県にあるか問うものであったが、石巻が宮城県と答えられなかった学生が27%いた。地名としては知っていても、いざ場所を尋ねられるとわからないという状態であろう。
- (6) ほとんどの学生が「期待している」と答え、ボランティアに期待感を抱いていることがわかった。しかし、「不安の方が大きい」と答えた学生が3%いた。

ボランティアについて、自由記述で次のようが意見があった。

- ・ボランティアをしたいと思っていた。しかし、思っているだけで今まで行動は起こさなかった。今回の宿泊ボランティアは、私にとってはすごくうれしいものだ。
- ・実際に被災した方々に会って何ができるかわからない。でも、行って現状を受け止めることが大事だと思う。
- ・自分たちに何ができるのか、できることを何か考えたい。

自分たちも被災し、ライフラインが途絶えた経験をもっている学生の、「何かしたい、でもどうしていいかわからない」という状況が見えてきた。それを把握した上で、ボランティアの活動にどう向かわせるのか、どう気持ちを支えていくのかを考えていく必要を感じた。

Ⅲ 活動の実際

(1) 期 間 平成 24 年 6 月 18 日(月)～ 19 日(火)

* 2 年生の保育実習Ⅱ・Ⅲの期間中

(2) 訪問場所 宮城県石巻市の団地（仮設住宅）の中の集会所 2 カ所

* 三陸自動車道石巻河南 IC から車で 15 分程度の場所

* この団地には 500 人強が居住している。

(3) 日 程 1 日目

6:40 短大、勝田駅に分かれて集合、出発

12:30 石巻の団地（仮設住宅）到着

13:00 ボランティア活動、交流

15:00 被災地訪問 石巻港方面

19:00 宿泊所到着

2 日目

7:00 起床 朝の体操、健康チェックなど

8:00 朝食

9:00 出発

松島、塩釜

昼食など

13:00 現地出発

18:30 短大着

* 移動については、大型バス 2 台を使用

(4) 参加者 保育科 1 年生と教員

(5) 訪問活動内容

ダンス 「ごきげん水戸さん」「黄門ばやし」

* 茨城県らしいものとして、毎年「水戸黄門まつり」で踊っている曲とした。

歌（手話つき）

「てをつなごう」「空より高く」

* 「てをつなごう」横原敬之作詞作曲復興支援で作られた曲。

保育園の園長先生の講話を聞いたときに、子どもたちが歌っている場面を写して紹介された。そのときに学生と一緒に歌った歌である。

* 「空より高く」新沢としひこ作詞 中川ひろたか作曲



てをつなごう 大きな声で !!

震災後、岩手県の地元ラジオ局で繰り返しリクエストがあった曲（地元の保育園児が歌ったもの）ということで選曲した。

読み聞かせ

*やってみたいという学生が、自分で絵本を選んだ。

マッサージ、交流

*授業の中で、マッサージの講習を行った。

Ⅳ 実施後の活動として

(1) 文集の作成

感じたこと、考えたことを発信するという意味で、実施後に「日本語表現法」の授業時に書き上げた感想を、文集として発行し、学生、職員、関係者に配布した。

2人の学生の感想を以下に掲載する。

作品1 ボランティアに参加して

A組 Y. A

私はボランティアに行く前、正直、行きたくありませんでした。がれき処理のボランティアなら被災地の人の役に立つと思えるけれど、歌を歌ってあげて被災者の力になれるとは思えなかったからです。歌やマッサージをやるだけで元気になってもらえるなんて思えなかったし、行っても邪魔なだけだと、仮設住宅に着いても思っていました。

しかし、集会所に着くと仮設住宅に住む方々が集まっていて、それを見て、中途半端な気持ちではできないな、と思い、元気よく歌を歌いました。すると集まってくれた方の目から涙が出ていたのです。私は嬉しくなりました。手話も真似しながら一緒にやっている人がいたので嬉しかったです。踊りを踊っている時の見てくれている方の顔が笑顔だったので、ここに来てよかったなと思うことができました。そしてマッサージ。マッサージをやってあげて「気持ちいい。気持ちいい。」と言ってくれて、マッサージ初心者の私でも人のためになっているのだと思い、改めて来てよかったなと思いました。

被災者との会話は何を話してよいのかわからず、自分からは話出せませんでした。現地の方が3人でお話をしていたので、そのお話を聞いていました。その方々はお孫さんや娘さんをあの津波によって亡くしたそうです。その様子などをいろいろ話していて、最後に携帯電話の待ち受け画面を見せてくれました。そこに写っていたのは、笑顔で写る3人の小さな子どもでした。「かわいいですね。」というと、「うちの孫なの。」と寂しそうにいました。そのお孫さんは3人とも津波によって亡くなったそうです。思わず涙が溢れました。テレビで津波によって家族を失った人々をたくさん見てきました。その家族を失った人の1人が私の目の前にいるということで、あの日の津波は現実なんだと改めて実感しました。

ボランティアが終わって、自分のことを考えました。私は幸せなんだなと思いました。家族もいるし、友達もいます。簡単に弱音なんて吐けないなと思いました。そして、最初に行きたくなかったボランティア。参加してよかったなと思いました。

作品2 石巻でのこと

B組 H. T

2011年3月11日東日本大震災がおきた。私が高校のロータリーに集まっているとき、今回ボランティアに行った宮城県石巻市に大津波がきて、すべてのものを奪った。私は、このボランティアを行うと聞いたとき、正直行きたいような行きたくないような気がした。大震災は忘れては行けないのも、だけど私達がボランティアに行くことにより、復興に向けてすこし忘れたいと思っている人が私達に当日の様子を話すことが、辛い人があるだろうと思っていた。

しかし、仮設住宅に行ってみると、石巻の人達は、笑顔があり元気だった。私は仮設住宅の集会所に来てくださった一人の男性がとても気になった。私達が二列に並び歌をはじめようとした時にその男性は、一言こう言った。「どのくらい出来るか？きっと80点もいかないだろう、先生達がどう教えているかわかるな。」と、私はとてもビックリした。私達のボランティアに点数をつけるなんて！と思ったとともに、私は、この男性は、すべてを失いとても寂しいけれど、私達に寂しいことを悲しかったことを精一杯に隠そうとして威張っているんだと思いました。私達が歌、踊りを終え、他の人達は拍手をたくさんしてくれましたが、その男性は軽い拍手でした。マッサージの時間になり、私はその男性をマッサージしてあげたいと思いましたが、マッサージが苦手な様子だったので、マッサージをしませんでした。

私は、東日本大震災という大きすぎる天災で、町を壊し、家を壊し、そして人の性格や感情を壊してしまうことがわかった。ボランティアにいく前に思っていたことは、人々の心の中にまだ残っているのだと、そして忘れないようにと思っている、きっと人々の心の中は、まだぐちゃぐちゃなのだろうだが、復興へがんばらなくてはいけないという目標に向かって、歯を食いしばり生活している石巻市のみなさん、津波で被害を受けた各県のみなさんは、強いと思いました。



マッサージによる交流

文集を受け取った訪問先のボランティアの方から、「妻と2人で涙しながら読ませて頂きました。(中略) 私たちに元気と勇気と情熱を湧き立たせ、前進の力となっております」という感激のメールをいただいた。

学生たちにとっては、自分が体験したことを文章にまとめることで振り返り、再度訪問した意味を考え、被災地に思いを寄せることができたのではないだろうか。また、他の学生の感想を読むことで、その学生の感性に触れさらに感性を磨くこととなったと考える。

(2) 宿泊研修を実施した意味を考える～保育科教員の座談会から～

実施後に保育科教員で、宿泊研修（ボランティア活動）について振り返る機会をもった。

本年度の宿泊研修を振り返りその意味を考えるとともに、来年度に向けての方向性を確認するためである。主な意見を次に掲載する。

〈発表（歌、ダンス、読み聞かせ）について〉

- ・ 歌の選曲がよかった。歌詞や手話で空気が変わった気がした。「てをつなごう」では、学生同士がしっかりと手をつなぎ歌う場面が感動するし、「空より高く」では、手話をつけて力強く歌うことができた。
- ・ 授業のなかでも歌ったり手話を覚えたりする時間をとったが、バスの中で何回も歌を歌ったことで気持ちが高まっていった。実際に訪問して活動しようという意欲が、バスの中では感じられた。学生が声を掛けリードして活動するようになるなど、学内の学習だけでは得られない効果があるように感じた。
- ・ 実際に現地で披露したときに生まれた一体感に見ている方も感動し、学生自身も感動していた。涙を流しながら歌っていた学生も多かったが、力強く歌っていた。
- ・ 司会の学生が不安そうにしていたので、自分の言葉で言えばいいことを伝えた。すべての進进行をやり遂げ、バスの中では喜びの表現をしていた。やり遂げたことが自信となると思う。
- ・ ダンスは「保育表現技術（身体）」の授業中に、授業内容とすり合わせながら練習する時間を設けた。最初はモチベーションがあがらず、授業の終わりの「授業の振り返り」では、最初の頃は「振りが難しくて覚えられない」「思うようにできない」「恥ずかしい」という感想が多く、どのように進めていけばよいかわからないこともあった。しかし、繰り返すうちに「振り付けをこなすということから踊りを通して何かを伝える」という方向へ高まっていったことを感じる。現地での踊りの発表は、手拍子生まれるような雰囲気があり、普段あまり笑わない学生の笑顔も見られた。学生全員で行ったことで、気持ちが一つになっていくのを感じた。
- ・ はっぴを着るという身支度を統一したこともよかった。一生懸命に踊る姿が見られた。ダンスサークルのメンバーを中心に練習を展開していったが、教え合うことを通して学生同士のつながりもできたのがよかった。
- ・ 読み聞かせは、幼稚園で2回りハーサルを行った。実際に子どもたちの前で行えたことで、反応がわかり人前で行うという意欲の高まりがあった。また、実際に集会所の皆さんから学生の明るい声の読み聞かせで癒やされたという感想を寄せていただいた。読み聞かせが得意な学生が行ったが、さらにより経験をし自信をもつことができたのではないかな。

〈マッサージ、交流について〉

- ・ 震災の中長期的な心のケアが必要だと言われている中で、1年3か月経過したときにこのような取り組みを行うことに意義があると思われる。学生達は自分たち被災地を思う気持ちを伝



ごきげん水戸さん

えたい、しかしこんなことで伝わるのかという葛藤があったと思われる。被災者の方々と学生たちの感情体験の相互作用が起きたと考えられ、やはりそれは現地に赴き現場で活動したという場の力だと思った。あの場でおきた現象、学生の姿を見て被災者の方が涙を流し、それを見た学生が涙を流す、そしてその学生の姿を見た教員が感動するという時間があった。相互作用の中で生まれた感情だと思う。

- ・ お孫さんを津波で亡くされた方の話を涙を流しながら聞いていた学生がいた。被災者の方は、まわりの方がみんな同じ辛い思いをしているので、自分の辛い経験を語れないということを知ったことがある。その方と学生の姿を見て、他人だからこそ語れるということもあるのだ、学生が話を聞くということには意味があるのだと感じた。



気持ちを合わせて

- ・ 保育科の1年生が被災地を訪問することを知り、2年生の学生からも何らかの形で参加したいという申し出があった。「大きな木を布に描いて、葉の1枚1枚に励ましの言葉を書いたものを持って行ってもらいたい」というものであった。呼びかけに応じたのは保育科2年生とことばの芸術学科の学生たちだった。2年生も心が動かされ、主体的に活動に参加したのであろう。
- ・ 成長途上の学生たちと仮設住宅に住んでいるお年寄りとの出会いのなかで、「自分たちに何ができるの？」と自問した学生は多いと思う。しかし、実際にお年寄りの話を聞きながらマッサージをしたり歌を披露したりして触れ合うなかで、震災という大きな悲しい出来事を共有してつながりを感じたのではないかと思う。それは、赤ちゃんに代表されるように、「弱さ」が他者の力を呼び覚まし引き寄せるという力に似ている。ボランティアという支援行為を、相手の状況に共感した学生が命令やプログラムされた行為としてではなく、自発的な力として発揮したのではないかと感じた。被災地の方々が苦労している状況を我が事のように共感した学生たちの気持ちや行動は、とても有意義なものであると思う。

〈来年度に向けて〉

- ・ 学生一人一人の感想から、その場所に行って初めて伝わることを実感していることが読み取れる。自分たちが行くことへの不安から消極的な参加態度だった学生が、活動を通して共感し、感動したことから「今後も少しでも役に立てるようにしたい」という気持ちに変化している。募金活動も大切であるが、顔の見える心の交流の大切さを教員も学生も実感した。



気持ちいいですか

活動の内容等を検討しながら来年度も継続する方向で考えていきたい。

(3) 保育科学生がボランティア活動に取り組む意味を考える～教員感想から～

〈体験を通しての学び―地域社会との連携― J. Y〉

ボランティア活動は、近年幼児教育においても家庭や地域社会との連携として重視されているところである。文部科学省は、「幼稚園教育要領解説」第2章ねらい及び内容、第2節各領域に示す事項、3身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」(10)の中で、次のように取り上げている。

『(10) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。

幼稚園の生活の中で、身近に感じられる情報に接したり、それを生活に取り入れたりする体験を重ねる中で、次第に自分の生活に関係の深い情報に興味や関心をもつようにすることが大切である。(中 略)

幼児が身の周りの情報に関心をもつようになるためには、例えば、教師自身が興味深く見た放送の内容、地域の催しや出来事などの様々な情報の中から幼児の生活に関係の深い情報を適切に選択し、折に触れて提示していくなど、幼児の興味や関心を引き出していくことも大切である。

また、図書館や高齢者福祉施設など様々な公共の施設を利用したり、訪問したりする機会を設け、幼児が豊かな生活体験を得られるようにすることが大切である。公共の施設を利用する際は、幼児の生活にかかわりが深く、幼児が興味や関心がもてるような施設を選択したり、訪問の仕方を工夫したりする必要がある。その際、このような施設が皆のものであり、大切に利用しなければならないことを指導することにより、公共心の芽生えを培っていくことも大切である。(後略)』

このように保育の場においても、具体的な体験を通して学ぶことが重視されてきている。

私は「幼児と環境」の授業の中で、被災地へのボランティア活動の前後にアンケートを実施し、保育者として幼児にどのような活動をさせることができるのか、どのようなことに気付かせたいと思うかを尋ねた。その回答の中から配慮が読み取れる事例を紹介する。

6月5日(活動前)

私が幼稚園の時、沖縄の方の島で津波があり、励ましの手紙を園で書いたのを思い出します。その時、先生はみんなのお友達が大切な物を流され、いろいろな辛い思いをしているという話をしてくださいました。手紙にどんなことを書いたか忘れたが、「元気だしてね」というようなことを書き、一番好きだったおもちゃの指輪を封筒に入れて、園に持って行きました。先生から言われてしたことだが、私だったら「みんなには何ができると思う？」と問いかね、子どもでも真剣に考えた意見を取り上げてよいのではないかと思います。

6月26日(活動後)

歌を歌うこと…元気いっぱいの子どもの歌は、被災した方々を笑顔にし、子どもたち自身でもそのことを感じてくれるかもしれない。

手紙を書いて、それを読む…大人が「大変だったでしょう」と言うよりは、子どもが小さ

な胸を痛めて書いた手紙やメッセージは、被災した方の心に何かを届けることができると思う。

話を聞き、語り合うこと…長期にわたる避難生活で、これから更にストレスを感じるようになると思う。

まっさらな子どもが笑顔で被災した方々と接したら、元気になってもらえると思う。

この他にも相手の立場にたって考えることや、相手の気持ちに寄り添うことの大切さに触れた記述が認められ、講義の内容が体験を通しての学びに生かされ、一定の成果が得られたと考えている。

〈石巻ボランティア雑感 S. H〉

2011年3月11日午後2時46分に起きた東日本大震災での死者・行方不明者数は19,009名。この数字は、ほぼ大洗町の人口(19,239名)にあたる。関係者を含めたら、どれだけの人たちが悲しみに暮れ、決して癒やされることのない苦しみと向き合っていることだろう。

授業でありながら“ボランティア”その中で何を学生に伝えられるだろうか…自分なりに考え、バスに乗った。

私は震災後4ヶ月半で仙台を訪れた。市街地を車で走っている時に、突如として現れた仮設住宅を目にした時の、何ともいえない感覚は今でも忘れられない。塩水で茶色く枯れた畑の草々。柱だけで向こう側の景色が見える家。人の気配の全くない町。文字通り、山のような瓦礫。あの時は、考えることが多すぎて言葉がなかった。

そんな感覚を、学生も持つだろうか。

初日の車内で、震災当日の学生の状況について聞くと、修学旅行で茨城にいなかった者も何人かはいたが、皆口々に当時の恐怖感や被害状況を語っていた。校舎に立ち入れなくなってしまい、既に取り壊したという学生もいた。高校2年生だった学生たちも又、被災者である。しかし、「元気になってもらいたい」「勇気付けたい」と言葉にしているけれど、そんなに簡単なことではないと思いながら、車内で死者・行方不明者数についての話をする。現地の方々とかわるときに、頭の片隅にでも残っていてほしかった。

仮設住宅では、歌や踊りを披露した。用意していった歌詩のあんちょこも使わずに、練習の時には無かった笑顔がたくさん見られた。読み聞かせの後、現地のボランティアの方の歌を聞いて、次の踊りができるだろうかと心配になる程涙していたが、いざ踊り始めると、気持ちがこもって今までで一番元気よく踊っていた。

続いてのマッサージは、「ハーレムの様…」と現地スタッフが表した言葉のように、おひとりに3～4人の学生が付いていた。普段の学内では見られないような、穏やかな笑顔で会話をしながら行い、集会所内に心地よい時間が流れた。

海岸を回り、入浴施設へ。宿舍での夕食、自由行動、就寝。

朝ヨガ、朝食。松島散策。船では、カモメやウミウの餌付け。塩竈での昼食。

そして、茨城へと帰路についた。

それぞれの場面で、現代の若者のはじけた言動が印象的だった。

帰りの車内での反省会では、照れ隠しに「大部屋最高!」「B組大好き!」等の感想で手短に済ませる学生もいたが、「マッサージの時に、おばあさんと話ができてよかった」「ありがたうと言ってもらえて嬉しかった」「頑張って踊れた」「もっと現地の地名を調べておけばよかった」等の感想や反省も聞かれた。

現地に行かなければ感じられない何かを、きっと感じてくれたことと思う。

どんなに高価なマッサージ器でも、温もりが感じられる人の手で、会話をしながら受けるマッサージにはかなわない。人の痛みや気持ちなど、他人に解ろうはずなどない。しかし、その痛みを少しでも解ろうと寄り添う姿勢を感じることで、人は癒やされるのではないだろうか。子どもの心に寄り添うことも同じはずである。

〈石巻市ボランティアダンス発表までの経緯及び考察 H. K〉

石巻市ボランティアのダンス発表までの経緯と、ダンス発表を終えての考察をここに記しておく。

ダンス発表の演目については、地元らしさをアピールできる内容であること、また、仮設住宅にお住まいの方々を勇気づけられる内容のものであること等の理由から、「水戸黄門まつり」において昭和61年より開催されている「市民カーニバル in MITO」の踊り曲目「黄門ばやし」「ごきげん水戸さん」の2曲を選出した。なお、茨城女子短期大学は、毎年「市民カーニバル in MITO」にダンスサークルに所属する学生及び教員有志で出場しており、上位入賞の経験もある。

「黄門ばやし」、「ごきげん水戸さん」は共に3分前後の曲目であるが、踊りの型やステップ、掛け声の中には独特かつ複雑なものも含まれるため、「保育表現技術（身体Ⅰ）」の授業内で、45分間×5回にわたり、ダンスの指導・練習を行った。加えて、「キャリア形成ゼミⅠ」「保育実践演習」の各授業内で、1回ずつリハーサルを行った。ダンス分野の指導教員は体育教員及びダンスサークル顧問の2名である。

なお、当日の発表会場となる仮設住宅集会所の広さを考慮し、36名ずつのABクラスをさらに2分割し、18名前後のチームになって練習・発表を行った。

ここで、「保育表現技術（身体Ⅰ）」の授業のまとめとして毎回、受講生全員に記入させている「授業の振り返り」を分析することで、練習の回を重ねる毎に学生のモチベーションがどのように変化していったかを検証する。

練習1回目、2回目の振付を覚える段階においては、「ダンスが難しくて大変だった」「複雑で覚えられなかった」「思うようにできなかった」「途中で疲れて動けなかった」「みんなの前で踊るのが恥ずかしかった」等のネガティブな意見が多くみられた。実際に、学生たちの練習での様子からは、初めて踊るダンスに戸惑い、「嫌々やっている」、「仕方なくやらされている」といった消極的な面が垣間見えた。

ところが、3回目、4回目においては、「笑顔で頑張ることができた」「声を出して踊ることができた」「みんなで踊れて楽しかった」「たくさん動いてすっきりした」等の前向きな意見が徐々にみられるようになった。このことは、回を重ね、振付をある一定程度覚えたこと

により、「わかる」、「できる」といった実感が、「楽しい」といった快感情に結びついたものと推測できる。

さらに、本番前最終日となる5回目の練習においては、「みんなが団結していた」「本番が楽しみ」「本番も頑張りたい」「元気よく声を出して笑顔で踊れるようにしたい」「感動を届けたい」といった意見が多くみられた。このことから、本番を目前に控え、学生たちのモチベーションが上昇し、発表への意欲や期待感が高まっていったことが示唆された。

ボランティア当日の、茨城県那珂市から宮城県石巻市へ移動するバス車中では、「黄門ばやし」、「ごきげん水戸さん」の2曲をCDで流し、それに合わせて学生たちが声出しや踊る際の目線、笛のタイミング等を練習する様子がみられた。狭い車中での学生たちの様子からは、「早く踊りたくて仕方がない」といったパワーが感じられた。

約5時間半の行程を経て、南境第7団地仮設住宅に到着した学生たちは、集会所に集まった被災者の方々に前にし、やや緊張した面持ちであった。心を1つに合わせた合唱「てをつなごう」、合唱・手話「空より高く」の発表の後には、現地のボランティアのアーティストらによる歌唱・演奏の披露があった。東日本大震災の凄惨さを彷彿とさせる歌詞と悲しいメロディーに学生たちは心を打たれ、涙を流す学生も多くみられた。それらを踏まえてのダンス発表であったため、この時点で、被災者の方々への想いはより一層募っていたことが推測される。

茨城女子短期大学の名称の入ったお揃いの法被を全員で着用し、ダンス発表への準備の整った学生たちは、曲が開始すると自然と笑顔になり、お腹の底から大きな掛け声を発するとともに、からだを精一杯使って踊り、文字通り全身で表現していた。被災者の方々からは、自然と手拍子生まれ、学生たちも大きなエネルギーを受け取っているようであった。力強く踊る学生たちからは、初回の練習でみられた消極的な様子は微塵も感じられず、まさに心からの踊り、心からの表現、心からの笑顔であったように感じられる。

今回の石巻市ボランティア活動のダンス発表を通して、学生たちは、「踊り」のもつパワーに気づかされ、同時に「踊り」を通して人々を勇気づけ励ますことのできる実感を得たように思う。「決められた振付を覚えて正確に踊る」段階から「踊りを通して何かを伝えたい」というステージへと移行することで、学生たちの「今、ここにしかない、生きた表現」は、被災者の方々の「悲しみ」や「困難」を、「勇気」や「希望」へと少なからず昇華することができたのではないだろうか。



V おわりに

今回の訪問（ボランティア）は、仮設住宅を訪ねそこに住む方々と直接触れ合い、感じ考えることを目的とした。学生は、被災地の惨状を実際に目にしたり現地の方の体験談を聞いたりし、現地

を訪れたからこそ感じたり考えたりすることができるという体験をした。これは、日頃真剣に物事を考えることを避けようとする傾向にある本学の学生たちにとって、大変意義深い体験であったと考える。

ボランティア活動の実施にあたっては、「自分が何ができるか」という視点から内容の検討を進めていく。しかし、できることを一方的に押しつけるのではなく、自分がしようとしている行為が相手にとってどのように受け取られるかについても謙虚に考えていくことが必要である。ボランティア活動は、お互いの気持ちのふれ合いを通して互恵的体験として深めていくことが大切だからである。学生がそれを実感できたことも、有意義であった。

今回の訪問は、ボランティアとしては本当に些細な試みであるが、学生たちが精一杯行ったことへ確かな反応が得られ、それをまた学生が受け止めることができたことや、場や時と一緒に過ごすことでしか得られない心にしみる貴重な体験ができたことが何にも替えがたい貴重な経験である。これを土台にしながら、ボランティア活動の内容や方法については、今後さらに先方の考えも聞きながら検討していきたい。

また、保育科1年生が同じ目的に向かって準備し実現した過程は、共通体験として今後の学生生活の糧になると考える。1年次の比較的早い時期に同じ釜の飯を食べ、一緒に風呂に入り一緒に寝るという体験をし連帯感を味わうことができた。友人同士でさらに親密さが増したり、新たな友人関係が生まれたりという効果もでてきた。これは、学生生活を中途でのドロップアウトすることを防止する意味でも有効であると考えられる。このことについては、今後回を重ねて検証していきたい。

今回の訪問（ボランティア）活動に際しては、お忙しい中現地での受け入れ体制を整えてくださった現地ボランティアの方のご尽力が大変大きかった。ここに深く感謝いたします。



ボランティアを終えて

執 筆 者（執筆順）

小 野 孝 尚（教授：日本近代文学・近現代詩）
小 林 和 子（教授：日本近代文学）
鷺 崎 秀 一（講師：日本近代文学・日本文化論）
安 藤 みゆき（講師：臨床発達心理学）
国府田 はるか（講師：舞踊学）
神 永 直 美（教授：幼児教育学）
内 桶 真 二（教授：英語学・英語史）
中 山 愛 理（講師：図書館情報学）
塙 雅 文（講師：国語教育）
佐 藤 豊（教授：日本画・造形教育）
山 路 純 子（教授：保育学）
海 野 富 江（准教授：保育者育成における研究）
角 田 雅 昭（講師：保育学・発達心理学）
廣 部 朋 美（講師：発達心理学・幼児音楽）
橋 本 祥 子（講師：保育実践）
馬 立 明 美（非常勤講師：音楽療法士・こども音楽療法）

茨城女子短期大学紀要 第40集

平成 25 年 3 月 31 日 発行©

編集者 茨城女子短期大学紀要委員会

発行者 額 賀 修 一

発 行 茨城女子短期大学
茨城県那珂市東木倉 960-2

印 刷 ワタヒキ印刷(株)
水戸市城東 1-5-21
Tel. 029-221-4381

BULLETIN OF IBARAKI WOMEN'S JUNIOR COLLEGE

No.40 (2013)

< CONTENTS >

1. **Kosho ONO** ;
A study on Syunryu Kitazima..... 1
 2. **Kazuko KOBAYASHI** ;
A study on Yukio Mishima "YAGINOKUBI" 9
 3. **Hidekazu WASHIZAKI** ;
Doppo's ways to make you smile — "not to be sad" 17
 4. **Miyuki ANDO** ;
Resilience concept represented in a Japanese anime
"ONE PIECE" (1)
 5. **Haruka KODA** ;
Continuous research on a body activity of "Childcare expression skill
(Body I , II)" :
Based on the text mining analysis of the free descriptive sentence
by the student (15)
 6. **Naomi KAMINAGA** ;
Class procedure of "Certified Child Music Habilitative Therapy training"
~ First-year approach ~ (41)
 7. **Shinji UCHIOKE** ;
Setting up Enju for the Library: a Memorandum (49)
 8. **Manari NAKAYAMA** ;
A study on the introduction of active learning method in Course for
Certified Librarians (55)
 9. **Masafumi HANAWA** ;
An Attempt at "Practical exercises for childcare" and
"Career Support seminar" (63)
-

PUBLISHED

by

Ibaraki Women's Junior College

IBARAKI